

# — 想い歌 —

土斑猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつもどおりの日々を送る裕一と里香。

けれど、そんな日々はある日終わりを告げる。

一人の少女の影によつて。

彼女が奏でるある“歌”に秘められる想いとは……………

※今作はボーカロイドの曲、「悪ノ娘」シリーズに関係した表現が多く出ます（ボーカロイドそのものの登場はありません）

一連の曲を知っていると、より分かりやすく読めると思います。

興味があれば、聞いてみてください。

目次

想い歌	①	1
想い歌	②	4
想い歌	③	8
想い歌	④	11
想い歌	⑤	15
想い歌	⑥	22
想い歌	⑦	30
想い歌	⑧	39
想い歌	⑨	47
想い歌	⑩	56
想い歌	⑪	65
想い歌	⑫	74
想い歌	⑬	82
想い歌	⑭	91
想い歌	⑮	103
想い歌	⑯	108
想い歌	⑰	116
想い歌	⑱	122
想い歌	⑳	134
想い歌		152
想い歌		166
想い歌		176
想い歌		188
想い歌		199

想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌	想い歌
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒
(最終話)										
278	267	263	257	252	247	239	233	227	216	207

― 想い歌 ― ①

♪ ― 君を守るそのためならば  
僕は悪にだってなつてやる ― ♪

— 1 —

それは、ある朝突然に始まった。

ポトン

僕が靴箱の蓋を開けると、そんな音を立てて “それ” は床に落ちた。

「?」

拾い上げてみると、それは一通の手紙だった。

桜色の便箋。裏を返して見ると、お定まりの様にハートマークのシールで封がしてある。

便箋の端つこには、丸っこい可愛い字で「戎崎先輩へ」と書いてあった。

それを見た僕は、呆然としながら呟いた。

「これって……」

「ラブレターじゃねえか!?!」

昼休みの廊下に響いたその声に、周囲の視線がいつせいに僕達に集まる。

「声がでけえ!!」

「ガフウ!?!」

大声で喚いた山西を逆水平チョップで沈めると、僕は周りに向かって「何でもない」のジェスチャーをおくる。

皆の視線が外れると、僕は改めて溜息をついた。

『初めまして。急にこんな手紙を出してごめんなさい。でも、どうしても自分の気持ちを抑えることが出来ませんでした。わたしはつ

い先日、この学校に転校してきました。そして、休み時間にクラスの人に校内を案内してもらっている時、偶然先輩を目にしました。その時の衝撃を、どの様に表現すればいいのかわたしには分かりません。以来、先輩の顔が、笑顔が目の前から離れてくれません。切ないです。苦しいです。人を想う事が、こんなにも辛いものである事をわたしは生まれて初めて知りました。この苦しみからわたしを救ってくれるのは、先輩だけだと確信しています。今日の放課後、校舎裏のプラタナスの下で待っています。来てください。信じています。『1年B組、名前は……如月蓮華……きさらぎれんかっつて読むのかな？まあとにかく、まごうことなき恋文だね。裕ちゃん』

みゆきがそう言って、件の手紙をピラピラと振る。

「声に出して読むなよ。恥ずかしい」

みゆきの手から手紙を奪い取ると、僕はそれをズボンのポケットに突っ込んだ。

「里香には言ったの？この事」

「言うわけないだろ」

「でもさ、どうするの？」

みゆきの問いに不機嫌気に答える僕に、今度は司が訊いてきた。

「どうするって、何をだよ」

「今日の放課後」

「行くわけないだろ」

「でもこの娘、待ってるって……」

その性根の優しさからか、司は困った様な顔をしている。少なくとも、お前が困る事じゃないだろ。

「そんなのにホイホイ行ったら、かえって余計な気を持たせるだろ。ほっとくのが一番なんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだよ。それに……」

「それに？」

「イタズラだったりしたら、相手の思う壺だろ？」

「ああ、それはあるかも」

みゆきがなるほど、という風に相槌を打つ。

「裕ちゃん、里香とつきあってるからって、一部の連中からけっこう妬まれてるもんね。こういうイタズラ、仕掛けてくるのもいるかも」「だろ？だからほっとくのが一番なんだよ」

そう言つて、僕は「里香ちゃんという者がありながら、他の娘までかどわかすか……この不誠実者がく」などと言いながら、ゾンビの様に復活してきた山西にシャイニング・ウィザードを食らわせた。

続く

―想い歌―・②

―2―

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン  
校内に、今日の授業の終了をつげるチャイムが鳴り響く。僕が昇降  
口に行くと、そこにはもう里香が待っていた。

「待ってたのか？」

僕が訊くと、里香は「うん」と言っただけ。

「待ったか？」

「ううん。あたしも、今来たところ」

「そうか」

「うん」

いつものやり取り。

そして、僕達は揃って歩き出す。

「今日もうち、寄るだろ？」

「うん」

「途中でまた、ぱんじゅうでも買ってくか？」

「あ、いいね」

いつもと変わらない放課後。

いつもと変わらない幸福。

それに浸りながら、僕達はいつしよに自転車置き場に向かって歩  
く。と、その途中で校舎の端が目にとまった。

その奥はこの時間、校舎の影でうっすらとした闇に包まれていた。  
ふと、あの手紙の事が頭に浮かぶ。

――如月蓮華――

正直、気にならないと言えば嘘だった。何せ、知らない相手からこ  
んな想いを寄せられたのは初めてだ。もちろん、先だってみゆき達に  
言った様にイタズラの可能性は多々あるわけだけど、その逆の可能性  
だって十分あるわけで……。もしそうだとしたら、その娘は今、あの  
薄闇の中で僕の事を待っているのだろうか。来るはずのない僕を、



たった一人でいつまでも。

ちよつとした罪悪感が、心をつく。その痛みが、足の歩みを少し鈍らせた。

だけど――

「どうしたの？裕一」

その声が、僕を我に返す。見れば、里香が怪訝そうに僕の顔を覗き込んでいた。

「さつきから、何か上の空だし。何かあった？」

黒く澄んだ目が、僕の目を見つめる。

そこに心配の色を見てとった僕は、慌てて頭を振る。

「い、いや何でもないぞ!!何でもない!!」

「……何か、あからさまに怪しいよ？」

里香が探る様に、顔を突きつけて来る。距離が近い。耐えきれずに、僕は視線をあさつての方向に泳がせた。

「いや、ほら、あれだ。今晚のおかずはなにかなーとか考えてたんだよ」

「……本当に？」

「本当、本当」

「ふーん、なら、いいけど」

そう言つて、里香は僕から目を離す。今一つ、釈然としてはいないようだけど、とりあえず追求は諦めた様だ。ほっと息をつく僕。と、同時にむらむらと腹が立ってきた。

大体、何で僕がこんな気を使わなきゃならないのだ。僕は何もやましい事はしていない。なのに、何でこんなにビクビクオドオドしなきゃならないのだ。そう。元はと言えば、みんなあの手紙のせいだ。湧いてきた怒りが全部、あの手紙の差出人に向かう。どの道、誘いに応じる気がない事には変わりがない。校舎裏だか、何だか知らないが、いつまでも一人で待ってればいい。

本物だろうが、イタズラだろうが、知った事か。

「ちよつと、裕一、どうしたの？」

急に足取りが荒々しくなった僕に、里香が訊いてくる。僕は「何で

もねえよ」とだけ返しておいた。里香も「変なの」とだけ言って、後は黙ってついてきた。

やがて自転車置き場に着くと、僕は置いてある自転車の列から自分のを探して引つ張り出した。里香はその横で、僕の準備が整うのを待っている。

「じゃ、行くか？」

準備が出来た僕がそう言うと、里香は「うん」と頷いた。僕と里香が並んで歩きだそうとしたその時――

「せ・ん・ぱ・い」

後ろから声がかけられた。聞き覚えのない、女の子の声だ。僕や里香を「先輩」と呼ぶ連中はたくさんいる。僕らは、そろって振り返った。振り返ったその視線の先には、見た事のない女の子が一人立っていた。

「やつぱり、こっちにいましたね。先輩」

女の子はそう言いながら、僕に向かって近づいてきた。どうやら、「先輩」という呼び声は僕にかけられたもの様だ。近づいてくる女の子は、当然というか、うちの学校の制服を着ている。その顔つきはとても整っていて、大人の持つ美しさと、子供の持つ可愛らしさが抜群のバランスで組み込まれている。サイドで纏められた黒髪は艶やかで、里香ほどではないにしろ、かなり長い。均整のとれた身体つきをしていて、その顔や髪とあいまって、ひどく魅力的な外見をしていた。

つまり十人に訊けば、十人が美人と答える。そんな風貌の女の子だった。

そんな女の子が、しやなりしやなりと僕に近づいてくる。僕の隣には、里香がいる。そして当然、僕らの周りにはたくさん他の生徒達がいる。だけど、そんなものは目に入らないとでもいう様に、その娘の目は真っ直ぐに僕だけを見つめていた。ついに立ちつくす僕の目の前に立つと、彼女は制服のスカートの両端を摘まんで優雅にお辞儀をした。

「初めまして。 戎崎先輩」

そう言って、僕の顔を見上げてくる。酷く、印象に残る瞳だった。里香と同じ様に、芯の強さを感じさせる瞳。だけど、その強さの質が違う。それは、里香の様に凜と澄み通った強さではなく、何処か底の見えない、仄暗さを感じさせる強さ。その瞳でニコリと微笑むと、その娘は僕に向かって言った。

「酷いですね。『信じてます。』って書いたのに」

「……誰だよ？お前……」

そう聞く僕に、女の子はクスクスと笑う。

「いやあだ。分かっているくせに」

笑いながら、僕のポケットを指差す。

「それに、ちゃんと書いてましたよね？」

何処で見ていたのか、その指先は間違いなくポケットの中の手紙を指していた。

「如月蓮華ですよ。先輩」

そう言って、如月蓮華は綺麗に、酷く綺麗に微笑んだ。

続く

― 想い歌 ― ③

「……何で、自転車置き場に来てんだよ？お前、校舎裏につて……」  
「女の感です」

僕の問いに真顔でそう答えた蓮華は、だけどすぐに相好を崩してケタケタと笑う。

「ウソウソ。そんなに驚いた顔しないでください。可愛いなあ、もう」

そう言つて、蓮華は僕との距離をまた一步詰める。

「分かつてましたよ。あたしの方には来てくれないって」

ニコニコと微笑みながら、何でもないかのようにそんな事を言う。

「先輩にもうお相手がいる事は知ってましたし。むしろ来られたら、そっちの方が幻滅ものだったかも」

笑いながら、蓮華は右手の人差し指を、教鞭でも振るかの様に宙でクルクル回す。

「こっちに来ないなら、いつも通りの帰宅コースを辿ると考えるのは、易い事だと思いませんか？先輩」

そしてまた、ケタケタと笑う。

その人を食った様な態度に、僕はだんだん苛ついてきた。

「そこまで分かつてんなら、何でちよっかい出してくるんだよ!?オレには里香がいるんだ。お前の誘いになんか、乗らねえぞ!!」

少し語気を荒めた僕の言葉を、だけど蓮華は余裕で受け流す。

「大変でしたよお。クラスの皆が皆、先輩には秋庭先輩がいるから駄目だつて言うんですから。でも……」

そこで、蓮華は初めて僕から視線を外した。向けた視線の先には、僕の隣に立つ里香がいる。

「そんなの、関係ないですし」

語調が変わった。それまでキャラキャラと軽かった言葉に、剣呑とした響きがこもる。

「人を好きになるのに、理屈をこねるなんて不粋ですよねえ。そう  
思いませんか？ 秋庭先輩？」

人の神経を逆撫でする様な、悪意のこもった口調。明らかな挑発で  
あるそれに、だけど里香は答えない。ただ黙って、自分に向けられて  
いる視線を真正面から受け止める。

「……………」

「……………」

しばしの間。張り詰めた空気に、こっちの息が詰まりそうになる。

「……………乗ってきませんね。本妻の余裕ってやつですか？」

そう言つて、先に目をそらしたのは蓮華の方だった。

「まあいいです。今日の所はこれで終わりにします。でも……………」

瞬間、蓮華の右手が素早く動いて僕の襟を掴んだ。抵抗する間もな  
く、頭が強く引かれる。一瞬の後、頬に触れる柔らかい感触。

「!!」

それがなんなのかを理解する前に、蓮華は踊る様なステップで僕か  
ら離れていた。

「先輩、あたしの方はこういう事ですから。それと……………」

鋭い眼差しが、再び里香に向けられる。

「先輩は、あたしがもらいますから」

その言葉に、明らかな敵意をこめてそう言うと、蓮華は踵を返して  
走って行ってしまった。

「……………何なんだよ……………一体……………」

頬に残る感触に呆然としながら、走り去る後姿を見送るだけの僕。  
と、唐突に背中に走る悪寒。

凄まじい殺気にゴクリと唾を呑み込んで振り返ると、里香が底冷え  
のするような眼差しで僕を睨んでいた。

「裕一、今の、何……………」

「い、いや、今のは、その……………!!」

冬の吹雪の様に冷たい視線に射抜かれて、僕はただただ竦み上がる  
ばかりだった。

続く

―想い歌―・④

それからしばし後。場所は、自分の家の座敷。二つの視線に晒されながら、僕は叱られる子供の様に小さくなっていた。差し向かいで座った僕と里香の間には、この災いの根源たる例の手紙が置いてある。

「……という訳なんだよ……」

「どうして黙ってたの？」

僕の説明に、里香はまだ許さないとばかりに問い詰めてくる。

「いやだってさ、こんなの、オレは最初っから受ける気なかったし、お前に教える事もないかなって……」

「説明になってないんだけど？」

静かな、だけど底冷えのする様な声。ちよつと……いや、かなり怖い。

「え……だって、それは、その……」

しどろもどろになる僕を、里香は容赦なく睨みつけてくる。

と、

「裕一」

卓袱台で、お茶を飲みながら事態を見ていた母親が口を挟んできた。おお、さすが親。助け舟を出してくれるかと思いきや……

「二股かけるなんて、十年早いわよ。身の程を知りなさい」  
なんて言っつけてきやがった。

「裕一」

「全く、血は争えないのかしらねえ？」

射殺す様な勢いで見つめてくる里香と、好き勝手を言う母親。ああ、何でこんな事になってんだよ。僕が一体、何したってんだ。二人の冷たい視線に晒されながら、僕は泣きたい気持ちでいっぱいだった。

それから数刻後。  
やっと解放された僕は、勢田川沿いの道を里香を送って歩いて  
た。

「……………」

「……………」

いつもなら何やかやと会話をしながら歩くこの道も、今は気まずい  
沈黙に包まれている。

何も言わない里香。

何も言えない僕。

夕暮れを過ぎ、薄闇の落ちた道に僕達の足音だけが響く。

いつまでも、いつまで経っても続く沈黙。

「あの……………」

それに耐えかねた僕が、何か言おうと口を開きかけたその時、

ギユツ

ブラブラさせてた左手が、不意に温かい感触に包まれた。そこまで  
出かけていた言葉を、僕は息とっしよに呑み込む。里香の右手が、  
僕の左手を握り締めていた。細い指が、ギユツと力を込めてくる。ま  
るで、この手は絶対に離さないとも言う様に。

「……………」

「……………」

僕達の間にも、また沈黙が戻る。だけど、今度の沈黙はさっきまでの  
それとは違う。少し気恥ずかしくて、温かい沈黙。川沿いの道。僕達  
は黙って歩き続ける。

いつしか、僕らはお互いの指を絡めあっていた。

僕の左手は、里香の右手を。

里香の右手は、僕の左手を。

ギユウツと握る指から、里香の気持ちが伝わってくる。僕も、僕の  
気持ちが伝わる様にギユウツと握り返す。

ギユウ

ギユウ

お互いにお互いを握り締めながら、僕らは歩いた。



やがて、僕達は里香の家の前についた。

だけど、手はまだ離れない。

お互いに、離さない。

しばらくの間、僕らはそうやって佇んでいた。

玄関から洩れる光の中、二人の影が長く伸びる。

伸びた影も、繋がっていた。

「……裕」

里香が言った。

「……おう」

続く様に、僕も応える。

二人の手が離れた。

名残りを惜しむ様に、ゆっくりと。

僕から離れた里香が、玄関に向かって歩いていく。

その手が玄関にかかろうとしたその時、

「裕!!」

里香が僕を呼んだ。

「ん、何だ?」

僕が近づいたその瞬間、

グイッ

突然身体が引かれる。

瞬間、左頬に優しく当たる、柔らかく温かい感触。

左頬。それは昼間、如月連華が唇を押し当てた場所。

そこから唇を離れた里香は、啞然とする僕を見上げるとペロリと舌を出してこう言った。

「上書き!!」

そして僕が何かを言う前に、踵を返すと玄関を開けて家に入ってしまった。

主の照れを隠す様にピシヤンと閉まった戸の前で、僕は左頬を押さえたまま、ただ立ち尽くした。

やがて――

「クッククククククククククク……」

腹の底から笑いがこみ上げて来た。そう。一体何を取り乱していたのだろう。僕らはこんなにも繋がっている。あんな小娘の割り込む隙間なんて、ありはしないのに。帰り道の間、僕はずっとヘラヘラ笑っていた。他人が見たらさぞ気味悪く思った事だろうが、知った事か。左手と頬に残る幸せの温もりに浸りながら、僕は一人、笑い続ける。

すっかり日の落ちた勢田川に、僕の笑い声が響いては消えていった。

……そうこの時、僕らはまだ知らなかったのだ。

あの如月蓮華の瞳に宿っていた、仄暗い強さの本当の意味を――

続く

―想い歌―・⑤

罪とは何だろうか？

社会の秩序に反する事？

人の道義から外れる事？

確かに、それは罪なのだろう。

だからこそ、それを成せば裁かれ、罰せられるのだから。

だけど、罪とはそれだけなのだろうか？

万人が見とめ、万人が認めるものだけが罪なのだろうか？  
否。

例え、万人が罪と認めなくとも。

例え、万人がそれを否定しても。

存在する罪はある。

例えそれが、皆が賛美する美談であったとしても。

そこには必ず、罪があるのだ。

日の光の下に、ひっそりと、だけど必ず影が出来る様に。

皆が見つめる光の裏に、必ずそれはあるのだ。

そして、例え当人達がそれを知らないとしても。

例え当人達がそれを承知で受け入れているとしても。

―罪は、罪―

ならば、裁かれねばならない。

なぜならそれは、罪なのだから。

まごうことなき、罪なのだから。

―罪は、罰せられなければならないのだから―

ピ。ピ。ピッピ。ピッピ。ピッ

薄暗い部屋の中に、無機質な電子音が響く。それはその音と同様に、酷く味気ないデザインの目覚まし時計が喚く音。けれど、それに起こされるべき者はもういない。

この部屋の主は、もうとうに起きていた。否、ひよつとしたら、寝てすらいなかったのかも知れない。腰掛けたベッドの上。時計に向けた目には、眠気の欠片も見取れない。ス、と伸びる手。目覚まし時計の頭にかかる。

カチリ

首り殺す様にスイッチを押され、目覚まし時計はその声を止めた。

ギシリ

ベッドのバネが軋る音。

立ちこめる薄闇の中、*「彼女」*は踊る様に身を揺らして立ち上がる。

タン

タン

タン

リズムを刻む足取り。

歩み寄る先は、部屋の隅にある勉強机。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

その口から静かに漏れるのは、鈴音の様に澄んだ声。確かな音程を持って流れるそれが、歌である事を察するのに時間はかからない。口ずさみながら、覗き込む。机の上には、数枚の写真。どれもこれも、写っているのは一人の少年。撮られているのに気付いていないのか、その視線はどれもあさつての方向を向いている。

クラスの写真部の連中に、いくらか渡して撮らせたもの。

細い指が、その内の一枚を拾い上げる。

罪がある。

例えそれが、皆が賛美する美談でも。

日の光の下に、ひっそりと、だけど必ず影が出来る様に。

必ずそれはある。

例え、当人達がそれを知らないとしても。

例え、当人達がそれを承知で受け入れているとしても。

——罪は、罪——

罪は、罰せられなければならない。

けど。

それならば。

止めてあげればいい。

罪が、罪となる前に。

彼らが最後の一步を踏み出してしまう前に。

止めてあげればいいのだ。

そう。

まだ間に合う。

まだ、大丈夫。

準備は万端。

宣戦布告もすませた。

後は、繰り糸を上手く紡ぐだけ。

「♪……君を守る その為ならば……♪」

たおやかに歌いながら、彼女は微笑む。

「♪……僕は 悪にだってなつてやる……♪」

そう紡いで、如月蓮華は写真の少年、戎崎裕一にそつとキスをした。

「何なんだよ!! 一体!!」

その日、僕は学校に着くなりそう叫ばざるをえなかった。そもそも、登校中からして何かおかしな感じだった。いつも通り、里香と登校していた僕は、周りから妙に痛い視線がチクチクと刺さってくる事に気がついた。見回して見れば、あっちこっちで学校の連中が僕らを見ている。こちらを見ながらヒソヒソと陰口をたたいてるっぽい女生徒がいるかと思えば、今にも殴りかかってきそうな形相で睨んでいる男子生徒もいる。

「……何だか、様子がおかしいね。」

里香も気付いたらしく、そんな事を言ってくる。

「……だよな。何か、あったのか?」

そんな事を言ってみても、答えが出るわけでもない。妙な居心地の悪さを感じながら、僕達は学校に着いた。着いたはいいが、そこでまた仰天した。僕の靴箱に、ベタベタと沢山の紙が貼り付けられていた

のだ。その紙にはみんな、

『不誠実者!!』

『色ボケ!!』

『色魔!!』

『色事師!!』

『二股野郎!!』

などといった罵詈雑言が書き連ねられていた。

僕が呆然としていると、その向こうでは里香が数人の女生徒に囲まれていた。

耳を澄ましてみると、

「先輩、二股かけられてたって本当ですか!？」

「酷いですよね!?!そんな男、こつちから捨ててやりましょう!!」

「先輩、どこまで許しちやっただんですか!?!キスマまで!?!まさか、一番大事なものまで……」

などと、これまたとんでもない事を口々に言っている。さすがの里香も困惑した様子で、一々対応に苦慮している様だった。

本当に、何なんだ!?!

事態は教室に行っても同じだった。クラス全員の視線が痛い。針の筵とは、まさにこの事だ。一時間目の休み時間。それまでの精神的重圧に耐えかねて机に突っ伏していたら、一人の男子生徒がズンズンと近づいてきた。その顔には覚えがあった。以前、僕が里香と付き合ってるのか聞いてきたヤツだ。確か、伊沢……とか言ったっけ。それは僕の前まで来ると、突然バンツと机を叩いた。

「な、何だよ!?!」

驚いてそう言うと、伊沢は僕をギツと睨みつけて喚き出した。

「何で浮気なんかしたんですか!?!」

「はあ?」

「何が『はあ』ですか!!知ってるんですよ!!我崎さんが、一年の如月と付き合ってるって!!」

「お、おいおい!!」

「酷いじゃないですか!!先輩が……秋庭さんという女ひとがいながら!!先輩が秋庭さんと結婚してるっていうから、僕は……僕は……!!」  
そう言っつて、机の上に泣き崩れてしまう。それに同意するかの様に、周囲から降ってくる視線。女子からは軽蔑。男子からは敵意。オイオイと泣く伊沢を前に、僕はただ途方にくれるだけだった。

「お、来やがったな!!不貞のやか……グベエ!」

二時間目の休み時間。顔を合わせるなりくだらない事を言おうとしてきた山西を、それまでの鬱憤を込めた空手チョップで沈めると、僕は大きな溜息をついた。

「何か、大変な事になっちゃってるね」

床に伸びる山西を無視して、みゆきがそんな事を言っってくる。

「下のクラスでも凄い噂だよ。戎崎が秋庭と如月を二股かけてたつて」

司もそう言っつて、困った様な顔をする。

「……そんな訳ねえだろ……」

「一体、何があったのよ?」

疲れた様に壁に背もたれる僕に、みゆきが訊いてくる。

「実は……」

僕は、昨日の放課後にあった事を話した。それを聞いたみゆきは、両腕を組んで「うくん」と唸った後、こう言った。

「ひよつとして、ハメられたんじゃない?」

「……は?」

訳が分からないと言った顔の僕に向かって、みゆきは続ける。

「その娘が裕ちゃん達に絡んで来た時、周りにはどれだけ人がいた?」

「どれだけ……」

何と言っつたって、放課後の自転車置き場である。それなりに、人はいた。

「里香ってき、人気あるじゃない。多分、その場でも周りにいた皆は多少なりとも、気にしてたと思う」

うんうん、と頷く僕達。

「そこに、別の女の子が割って入ってきて、何やら言い合った拳句、裕ちゃんにキスして走ってっちゃった。周りからしたら、どう見える？」

「どうって……」

「そりゃ……」

黙りこくる僕達。確かに、答えは明白かもしれない。しかし――

「だ、だけどき、そんなもん、それまでの話聞いてりや分かるじやねえか!? オレ達がどんな関係かって……」

「周りに人が多けりや、それなりにザワザワするし。そんな中でいくら目端で気にしてたって、本人達の会話にまで聞き耳立てたりすると思う?」

「う……」

答えに詰まる僕に向かって、みゆきは溜息をつく。

「後は簡単。それを見てた連中がメールや電話で友達に話して、後はその繰り返し。その内に、伝言ゲームみたいに話に尾ひれがついて……」

「今みたいになっただってか……?」

僕は頭を抱えた。

なるほど。話の筋は通っている。しかし、そこまで計算して事を進めたというのなら、とんでもない狡猾さだ。その歳に似合わない計算高さは、どこか里香に通じるものがあるかもしれない。だけど――

僕を見上げる、如月蓮華の瞳が思い出される。

里香と似ていて、それでいて全く違う、仄暗い強さ。改めて思えば、十六やそこの小娘が、あんな目を出来るものだろうか。今まで僕や里香に関わりあってきた人間の中にも、あんな目をしている人達はいなかった。クラスメートはもちろん、父親や母親、夏目や亜希子さんといった大人にも、あんな目を持つ者はいない。

と、ふと何かが頭の隅に引っかかった。

いや、知っている。

僕はあの目を、あの仄暗さを宿した目を知っている。



誰だ？

考えても、思い出せない。

一体誰だったろうか。

僕がそんな事を考えていると、

キーンコーンカーンコーン

休みの終りを告げるチャイムが鳴った。

「あ、もう教室に戻らないと」

司が言った。

「じゃ、裕ちゃん、あたしの方でも如月蓮華って娘の事、調べて見るから」

言いながら、みゆき達は階段を下りていく。僕も大きく溜息をつくと、自分の教室へと足を向けた。またあの針の筵の中へ戻らなければならぬかと思うと、正直気が重かった。しかし、だからと言って留年の身でそうそうサボる訳にもいかない。

トボトボと教室に向かう僕。

そして後には、床に白目をむいて伸びる山西だけが残された。

続く

―想い歌―・⑥

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン  
校内に、昼休みを知らせるチャイムが響く。僕はやれやれと溜息をつくと、弁当を取り出した。午前中にこうむった精神的疲労のおかげで、完全にエネルギー不足だ。ここでしつかり補給しておかないと、後が持ちそうにない。

さて、何処で食べようか。

正直、教室では食べたくない。っていうか、この状況下では何を食っても味がしそうにない。

司達の所にも行こうか。それともいっそ、人気のない屋上にでも行つて……

思案にふけていたせいで、気付かなかった。教室の連中がざわめく声にも、近づいて来る足音にも。

シャツ

突然ヘビの様に伸びてきた手が、僕の手から弁当を奪い取る。

「!!」

驚いて見上げた僕の目に飛び込んできたのは、綺麗にサイドで纏められた黒い髪。

「こんにちは。先輩」

妖しい微笑みを浮かべて、如月蓮華がそこに立っていた。

「な……何だよ、お前!? ここは二年の教室だぞ!! 何で一年のお前がいるんだよ!?!」

「休憩時間に、下級生が上級生の教室に来ちゃいけないなんて校則、ありましたっけ?」

ニコニコと微笑みながら、ケロリとしてそんな事を言う。

そりゃ、そんな校則ないけどさ……。

普通、下級生は上級生のエリアになんか足を踏み入れたがらない。

特別な圧迫感というか何と言うか、そういったものがあって二の足を踏むものだ。なのに、この如月蓮華にはそういったものをまるで気にする様子がない。まるで当然と言うように、上級生の只中に凜と立っている。

やっぱり、こいつは何かが違う。

僕がそんな事を考えている内に、教室の中が騒がしくなってきた。まあ、昼休みの教室というのは概して騒がしいものだけど、そんな有体の騒がしきではない。皆の視線が痛い。ヒソヒソと囁きあう声も耳に障る。

……まずい。このままではまた余計な噂を立てられる。

僕は、相変わらずニコニコと笑っている蓮華に向かって怒鳴った。

「一体何なんだよ!? オレには、お前なんか相手にする気はないって言っただろ!? 早く自分の教室に帰れ!! っていうか弁当返せ!!」

「やですよー♪ “これ” はあたしがいただきます」

僕の言葉を揶揄する様な口調でそう言うと、蓮華は僕の弁当を持つのは別の手を出してきた。

ポトン

そんな音とともに、僕の目の前に落とされたもの。それは可愛い柄の入ったピンクの布に包まれた弁当箱だった。

「先輩はこれ食べてください。あたしの手作り。 “愛妻” 弁当です」

“愛妻” の所をこれでもかってくらい、強調して言いやがった。

「ん” な……!?!」

「それでは」

言葉を失う僕の前で、蓮華はクルリと踵を返す。そのまま踊る様なステップで教室の出口に向かうと、そこでまたクルリとこつちを向いて、大きな声でこう言った。

「ちゃんと食べてくださいね。でないと、午後の授業に響きますよー」

そして唾然としている僕達(ようするにクラスの連中)を尻目に、またあのステップを踏む様な足取りで去って行ってしまった。

「……………」

そして、絶句する僕に残されたのは、可愛い布に包まれた「自称」愛妻弁当と、さらに圧力を増して周りから降り注ぐ、侮蔑と殺意（もはやそう言ってもいいレベル）の視線だった。結局、僕は残り二時間の授業を空腹を抱えたまま過ごすハメになったのだった。

え？弁当はどうしたのかった？

喰う訳ないだろ!!そんなもん!!

「ああ、腹減った……」

その日の放課後、いつも通り昇降口で里香と落ち合った僕は、その足で自転車置場に向かった。

「大丈夫？裕一」

空腹でフラフラしている僕を、里香が心配（？）そうに見ている。

「大丈夫じゃない。問題だ」

そう言う僕を見て、里香は溜息をついて言った。

「しょうがないなあ。それじゃあ、帰りに伊勢うどん、奢ってあげるよ」

「え？本当か!？」

「うん。ただし、並盛り一杯だけね」

「充分だよ。サンキュ」

「どういたしまして」

微笑む里香。ああ、それを見るだけで、今日一日の心的疲労が癒される。デレ〜としながら微笑み返そうとした時、ふとある事が思い至った。今日一日、僕がどんな目にあっただかは御存知の通り。でも、それなら里香はどうだったのだろうか。

「里香、そう言えばお前の方はどうだったんだ？何か変な目に合わなかったか？」

僕の問いに、里香は少し考えて「うん」と頷いた。

「ええ、どんなだよ!?今朝みたいに、他の連中に纏わりつかれたりしたのか？」

「それはずっと。休憩に入る度に色々聞かれた。それと……」

「それと?」

「告白、された」

「ええ!」

里香の言葉に、僕は飛び上がらんばかりに驚いた。

「だ、誰にだよ!」

「ええと……、二年の青木君に、三年の渡辺君に加々美君」

三人もかよ……。

って言うか、三年が二人って何だ!?

そんな事にうつつぬかしてないで、受験勉強してろ、馬鹿!!

啞然とする僕の横で、里香はクスリと笑う。

「面白かったよ。三人とも、判で押したみたいに同じ事言うんだもん」

「同じ事?」

「うん。『戎崎の様に二股をかける様な男は君にふさわしくない。僕だったら君だけを大切にしてみせる』って」

ただでさえ空腹でフラフラする頭が、ますますクラクラしてきた。

「そ、それで、お前、何て答えたんだ!」

「何て答えたと思う?」

裏返った声で問う僕の様子が面白いのか、里香はクスクス笑いながらそんな事を言った。

「何て」って、そりやお前……。

「大丈夫。皆、断ったから」

その言葉にホツとしつつも、僕の心中は穏やかではなかった。前にも言った様に、里香に惚れてる奴らは多い。どうやら、そういった連中が僕の二股疑惑に便乗して動き出したらしい。恐らく、今日はほんの小手調べ。

明日以降は、そうやって里香にアプローチしてくる奴らがさらに増えるに違いない。そんな連中、里香が相手にする筈がないと分かっていつつも心中穏やかとは言いがたい。

「大丈夫か? うざったくないか?」

「うん」

「迷惑だったら、言うんだぞ」

「うん」

そんな会話をしながら僕達が自転車置場にたどり着いた時、

「そんなにフラフラして。だからちゃんと食べてって言ったのに」  
不意に飛んできた、聞き覚えのある声。僕は頭を抱えなくなった。

「何なんだよ!! ストーカーか!?! お前は!!」

自転車の前に、立っている如月蓮華に思わず怒鳴る。

「ストーカーだって。あはは、酷いなあ」

僕の怒声も何処吹く風と言った態で、蓮華は笑う。

「何だも何も、お弁当箱返そうと思って待ってただけですよ」

確かにその手には、昼休みに奪っていった僕の弁当箱を持っ  
ている。

「美味しかったですよ。お義母さん、お料理上手なんです」

そう言いながら、弁当箱を僕の自転車のカゴにポスンと入れる。

「いつ、オレのお袋がお前のお義母さんになったんだよ!!」

「いいじゃないですか。いずれ、そうなるんですから」

「ならねえよ!!」

怒鳴りながら、蓮華の弁当を突っ返す。

「あれあれ? お口に合いませんでしたか。好きだって聞いてたのに  
なあ。ハンバーグ」

しれっと言いながら、弁当を鞆に入れる蓮華。僕の苛立ちはもう  
マックスだった。頭に浮かぶだけの罵詈雑言を吐き出そうとしたそ  
の時、

「いい加減にしたら? 少し、しつこいよ」

僕よりも先に、里香が口を開いていた。

「裕一が迷惑してるし、あたしも迷惑してる」

ズイツと前に出ると、里香は真っ直ぐに蓮華を見つめ、そう言い  
放った。こんな時の、里香の目は強い。その目に見つめられると、大  
抵の連中は萎縮して何も言えなくなってしまう。

「だけど——」

「あは、初めて口きいた」

蓮華はその里香の視線を真正面から受け止めてなお、揺るがなかった。

「口、きけない訳じゃなかったんですね。良かった良かった」  
ケタケタと笑いながら、半目で里香を見つめる。

「やつと土俵の上に上がってきてくれましたね。これで、組み合える」

その人を食った様な口調もそのまま、蓮華は里香に近づいて来る。蓮華の背丈は里香と同じくらいだ。目の前までくれば、自然と視線が合う。睨み合う形になる二人。

……何だろう。周囲の空気が一気に重くなったような、そんな気がする。

得体のしれない怖気を感じ、思わず後ずさる僕。

「組み合うとかなんとか、そんなの知らない。迷惑だから。もう、絡んでこないでって言ってる」

キツパリと言う里香。しかし、当の蓮華には柳に風だ。

「つれないなあ。せっかく恋敵なんてレアな関係になれたのに。もう少し、血沸き肉踊るバトルでも楽しませせん？」

「恋敵？誰と誰が？」

「認めませんか？でも、〃周り〃はそう見てくれますかねえ？」

そう言われても、里香は視線を逸らさない。代わりに、僕の方がキョロキョロしてしまう。周りの連中の視線が、こっちに集中していた。

ドキドキ。

ハラハラ。

ワクワク。

その表現は多々なれど、皆がこの事態の次の展開を固唾を呑んで待っている事がよく分かった。

ちくしよう。他人事だと思いやがって。

蓮華がフフンと鼻で笑う。

「望むと望まざるとに関わらず、もう先輩は土俵の上です」

そう言って、蓮華はズイツと顔を里香に寄せる。

「逃げられませんよ。もつとも、逃がしませんけど」  
その瞳の奥で、仄暗い炎がユラリと揺れる。

「……!!」

それに何かただならぬものを感じて、僕が二人の間に割って入ろうとしたその時、

「キャアツ!!」

突然、里香が悲鳴を上げた。

里香が悲鳴を上げるなんて、滅多にある事じゃない。

何だ!? こいつ、何をしやがった!?

などと思いながら二人を見た僕は、その場で硬直した。

蓮華の右手が、里香の左胸を鷲掴みにしていた。

「んん、なるほど。小さい。こりや、学校一つてのはホントかも」

その手をムニムニと動かしながら、蓮華は値踏みするかの様にそんな事を言う。

里香、呆然。

僕、啞然。

固まる、皆。

そして――

「~~~~つ☆ㄨㄨㄨㄨ〇ㄥ▼èπÿπ※!!」

我に返った里香が、訳の分からない声で喚きながら腕を振り回した。

「おととつとつ、危ない危ない♪」

振り回される里香の腕を掻い潜りながら、蓮華が僕の方へ逃げてくる。何だ何だと思っていると、蓮華は僕に抱きつく様に肉薄してきた。その瞬間、薄い唇が僕の耳元で囁く。

「あたしの方が、ありますよ。せ・ん・ぱ・い♪」

途端、フワリと香る甘い香り。不覚にも、頭がクラクラした。蓮華はそのまま、僕の横を通り過ぎる。長いサイドポニーとともに、甘い香りが流れていく。遠ざかっていく、ケラケラという笑い声。後に残されたのは、両腕で胸を押さえてへたり込む里香と、ただ立ち尽くすだけの僕。呆然とする僕達の耳には、遠ざかるケラケラ笑いがいつま



でも残っていた。

続く

―想い歌―・⑦

—7—

如月蓮華は一人、薄闇の中を歩いていた。時間は午後六時。日はもう暮れかけている。周囲に人影は少なく、薄明るい外灯の光だけがボンヤリと周囲を照らし出していた。そんな黄昏の下校道を、如月蓮華は一人で歩いていった。

他の女生徒の様に、友人とつるむでもなく。

街へ繰り出して、放課後の時間を楽しむでもなく。

如月蓮華は一人で歩いていた。

と、その足が外灯の中で止まる。

「……………」

薄明かりの中で見るのは、自分の右手。その手は、先程とある女生徒の胸を揉みしだくという、普通の観点で言えば破廉恥極まりない行為を行った手である。手には、その感触がまだはつきりと残っている。如月蓮華は、その手をジツと見つめる。その表情には、先程まで見せていた軽い、アクティブな小娘の様相はない。

しばしの間――

そして、

ギユツ

開いていた右手が、握り締められる。

まるで、手に残る“それ”を握り潰す様に。

ギリギリ……

鈍い音を立てて握り締められる右手。暗い焰が揺れる瞳が、それを見つめる。

いつまでも。

いつまでも。

逸らす事なく。

見つめていた。

「ええ!? そんな事があつたの!?!」

驚きの声を上げる司に、僕はゲンナリしながら頷いた。

「あの里香をそこまで手玉に取るなんて、如月蓮華、聞きしに勝る娘みたいね……」

みゆきが腕を組み、そんな事を言いながら頷いた。ここは司の家の司の部屋。今日、僕は学校から帰るなり、家を飛び出して司の家に押し込んでいた。とにかく、どこかで鬱憤を吐き出さない事には自分を保つ自信がなかったのだ。そんな僕に白羽の矢を立てられた司も、気の毒と言えば気の毒だけど、来てみたら司の家族は留守で、どういう訳かみゆきがいた。何やってんだと訊いたら、今日は司の家族が用事で留守なので、じゃあせつかくだから一緒に受験勉強しようという事になったという答え。

……「じゃあ」って何だ。「じゃあ」って。そんな言い訳が、世の中通ると思ってるのかお前らは。

まあ、それでもいつもの僕なら、アラお邪魔でしたかすみませんと素直にその場から退散する所だが、生憎今の僕はいつもの僕ではない。正直、「そういう仲」でいる連中を前にして、素直に空気を読もうなんて殊勝な気持ちの在り所ではないのだ。……と言うか、はつきり言つて邪魔したい。司には重ね重ね申し訳ないが、丁度良い。僕の鬱憤晴らしに協力してもらおう。

何? そんな事してると馬に蹴られて死ぬだつて?

うん。いつそ殺してくれ。

「それで、結局その後、どうしたの?」

「どうも……うもねえよ……」

茶菓子として出されたクッキーを口に押し込みながら、僕は今日何度目かも知れない溜息をついた。どうでもいいけど、これ司の手作りだろうか。美味しいな。相変わらず。とにかく、先だつての事件。事後処理の方も大変だった。好き放題やった蓮華が去った後、周囲の好奇の視線に晒されながら地べたに座り込んでいる里香を立たそうとし

たのだが、なかなか立たない。

何やらブツブツ言っているので耳を寄せてみると、「小さくないもん小さくないもん小さくないもん小さくないもん小さくないもん……」と呪詛の様に繰り返していた。

どうやら、何かトラウマに触れたらしい。

そんな里香を何とか立たせて自転車の荷台に乗つけると、僕はそのまま里香の家まで直行した。当然ながら、帰りの伊勢うどんの話は流れである。空きお腹を抱えての自転車操業は、かなり過酷だった。ちなみに里香は道中ずつと、僕の耳元で例の言葉をブツブツと唱え続けていた。正直ちよつと……いや、かなり怖かった。

「……つとに最悪だよ」

クツキーをあらかた平らげてようやく人心地のついた僕は、どつと襲ってきた疲労感に、ぐったりと畳の上に伸びながらそう毒づいた。

「それにしても、その蓮華っていう娘、何でそんなに裕一に入れ込んでるのかな？裕一、前にその娘と何かあった？」

「ねえよ!!ある訳ないだろ!!大体、一年に転校生があつたつて事事態、知らなかったんだぞ!」

司の質問を、僕は真つ向から否定した。

つていうか、むしろその理由を知りたいのは僕の方だ。

「……みゆきはなんか分かったか？蓮華あいつの事？」

陸揚げされた烏賊の様にグダグダと畳の上でのたうつ僕に、「だらしがない」とか言いながら、みゆきは少し考える素振りをして話し始めた。

「如月蓮華、16歳。身長157cm、体重は禁則事項。スリーサイズは上から80、62、84。好きな食べ物はフルーツ全般。嫌いなのは魚。趣味は音楽関連。最近はボカロにはまっている。でも、部活には入っていない。家族は母親との二人暮らし。転校してきたのは先月の9日。元の住居は東京。……と、こんな所かな？」

……まさか、スリーサイズまで出てくるとは思わなかった。呆れる僕を見て、みゆきがさもありませんという顔をした。

「転校生つてやつぱり珍しいし、それに、あの顔でしょ。転校してき

た時からチェックいれてる子、多かつたみたい。大体、本人も、聞かれりや別に隠しもしないって話で」

にしたって、スリーサイズまで教えるか普通。訊くほうも訊くほうだが、教えるほうも教えるほうだ。やっぱり、あいつは普通じゃない。

「ただね」

「うん？」

みゆきが困った様に腕を組む。

「そういう、表面的なデータはすぐに集まったんだけど、逆に内面的なデータは全然なの」

「内面的なデータ？」

僕の言葉に、みゆきはそう、と答える。

「性格とか、何を考えてるのかとか……そういうのがまるで分からない。ほら、女子つてすぐグループ作ったり、つるむ相手作ったりするものなんだけど、あの娘はそういう事が全然ないんだって。何か、“一線”があるみたいでさ、誘われれば答えるけど、そこから先は触れさせないっていうか……。まるで、他の皆から一步引いて事を見るって感じで、そういう所が、少し気味悪いっていう声もあつたな……」

「へえ……。あのラブレターの内容とか、裕一に聞いた話からすると、もうちよつとキヤイキヤイした娘だと思ってたけど……」

司が、以外だという風に言った。

「だけど……」

「裕一、どうしたの？」

「あ、いや、何でもねえよ。」

尋ねてくる司をそう言つて適当にはぐらかすと、僕は続けるとみゆきを促した。

「そんなだからね、今は里香とはまた別のベクトルでクラスで浮いてるみたい。俗に言う、「一匹狼」つてやつかな？」

「一匹狼」。

なるほど、言いて妙かもしれない。

周りの反応など露ほども気にかけず、唯我独尊に振舞うあいつには

ピッタリな表現に思えた。でも、今の僕にとって重要なのは、とりあえずそこじゃない。

「―それで、あの娘が裕ちゃんに入れ込んでる理由だけど……」

「お、おう!!それだ、それ!!」

みゆきのその言葉に、寝そべっていた僕は思わず起き上がった。司も、興味深げに身を乗り出す。

「その理由は……」

僕も司も、息を吞んで次の言葉を待つ。

「分からなかった」

ガツクン

二人して、ずっこける。

「お、おいおい。そこまで言つといて、分からないかよ。肝心なのはそこだろ!?!」

僕が抗議すると、みゆきは両手をあげて“お手上げ”のポーズをとる。

「駄目駄目。言つたじゃない。あの娘、一線から先は全然見せないのよ。裕ちゃんの事は、その一線の向こうの事みたい。こんなに大騒ぎになってるし、興味もって訊いた子は何人かいたけど、可愛いからとかタイプだからとかであしらわれて、まともな答えは返つてこなかったってさ」

そ、そりやないぞ。

そこが分かんないや、今後の対策の立て様がないじゃないか。

脱力して再び畳にへたり込む僕を嫌そうに見ながら、みゆきは溜息をつく。

「全く、そんなに知りたいたんだつたら自分で訊けば?裕ちゃんにだつたら、本当の所言うかもよ?あの娘」

それが出来りや世話はない。

とにかく、僕は如月蓮華とは係わり合いを持ちたくなかった。大体、二人で話なんかしてたら、今度はどんな噂をたてられるかわかったものじゃない。

「しかしねえ、里香といいあの娘といい、こんなの何処が良いんだ

か

みゆきが唐突にそんな事を言い出す。

「ホントだよね」

司も、それに相槌を打つ。

「馬鹿なのに」

「うん。馬鹿」

「へたれなのに」

「うん。へたれ」

ツーカーの息で頷き合う二人。

ちくしよう。好き勝手言いやがって。

二人っきりの時間邪魔した報復か？

陸揚げされた蛸の様に伸びながら、僕は泣きたい気持ちでいっぱいだった。

「司ー、もういいかー？」

「うん。いいよ」

そう言って、家に鍵をかけた司がかけよってくる。

もう、夜の七時近く。僕達の会合はさしたる成果もなく、解散の運びとなっていた。僕は家に帰るし、司はみゆきを家まで送って行くらしい。

「じゃー、ごっそさん」

「うん。また明日」

「気をつけてね」

そして、司の家の前で僕達は別れた。

夜七時の空は、よく晴れていていっぱい星と細い三日月が浮かんでいる。その明るい夜空の下を一人歩きながら、僕はさっきのみゆきの言葉を思い出していた。

(まるで、他の皆から一歩引いて事を見てるって感じで、そういう所が、少し気味悪いつていう声もあったな……)

意外だと、司は言った。

だけど僕は、妙に合点がいつていた。  
確かに僕らが見た如月蓮華は、軽い。

けれどその軽さが、僕には不自然だった。

それは他でもない。あの娘の目を見たからだ。

暗く沈んで、それでいてめらめらと燃え立つ様な瞳。

里香と真正面から向き合って、怖気ず怯まず、逆に飲み込もうとする様な目。

そんな目、普通の小娘には到底出来っこない。

それは僕でなくとも、少し感の鋭い連中なら容易に気付くだろう。  
だからこそ、気味悪いなんて言葉が上がってくる。

そう。あれは「異質」なのだ。

人は異質に引かれ、そして恐れる。

例えば、里香だつてそうだ。

常に死と隣り合わせの生活の中で研磨され、澄み透り、強くなった  
その瞳。

その強さに、異質さに、皆は時に魅了され、また時には威圧される。  
蓮華が持つのは、そんな里香とはまた別の強さ。

凜と研ぎ澄まされた里香のそれに対極する様に、どこまでも暗く、  
落ち沈んでいく。

里香は、あの生と死の狭間の経験で、その強さを手に入れた。

なら、如月蓮華は？

一体、どんな経験をしたら人間はあんな瞳を持つ様になるのだら  
う。

初めてあの目を見たとき、思った事。

―前にも、見たことがある―

それがいつたい、誰のものだったのか、僕はいまだに思い出せない  
でいた。

「誰だつたっけな……？」

ポソリと呟いてみる。

だけど、答えは浮かんでこない。

それが分かれば、今のこの状態を打破するきつかけが掴めそうな気



がするのだけれど。

そんな事を考えているうちに、直接本人に聞いてみようか、なんて考えが浮かんできた。

何言ってるんだ!!

僕は一人で頭を振る。

それはさつき、自分で冗談じゃないと否定した手段ではないか。

「ああ、もう!!」

一人でワシヤワシヤと頭をかきむしる。

(何か、“一線”があるみたいでさ、誘われれば答えるけど、そこから先は触れさせないっていうか……)

みゆきの言葉が、頭の中でリフレインする。

一線か。

それを超える事が出来れば、あいつの事が少しは理解できるのだろうか？

グルグルと回る思考。

でも、答えには行き着かない。

と、その回転に引つかかってくる様に、もう一つ、みゆきの言葉が頭に浮かんできた。

(裕ちゃんの事は、その一線の向こうの事みたい)

僕の事は、一線の向こう？

どういう事だろう。

僕はもう一度、如月蓮華の目を思い出す。

仄暗く揺らめく、黒い瞳。

あの目で、彼女は僕の何を見ているのだろうか？

彼女にとって、僕は一体どんな存在なのだろうか？

また、思考が回り出す。

グルグル　グルグル

一度勢いのついた思考は止まらない。

グルグル　グルグル

エンドレスに頭の中を回り続ける。

(初めまして。戎崎先輩)

(如月蓮華ですよ。先輩)

(ウソウソ。そんなに驚いた顔しないでください。可愛いなあ、もう)

(人を好きになるのに、理屈をこねるなんて不粋ですよねえ)

(先輩は、あたしがもらいますから)

(休憩時間に、下級生が上級生の教室に来ちゃいけないなんて校則、ありましたっけ?)

(ちゃんと食べてくださいね。でないと、午後の授業に響きますよー)

頭の中に浮かんでは消える、蓮華の言葉と声。

……結局、その日眠りにつくまで、僕の思考は彼女の事から離れる事は出来なかった。

続く

―想い歌―・⑧

その日、吉崎多香子は己の人生において、もつともらしくない行動を、もつともらしくない動機によって行っていた。その行動とはズバリ、『尾行』である。もつとも、そうは言ってもさして広くもない学校内での話ではあるのだが。

話は、その日の昼休みにまでさかのぼる。

吉崎多香子がいつも通り自分の席で弁当を開いていると、誰かがポスンと彼女の前の席に座った。また、綾子あたりと一緒に食べようとか言っただろうか。いささかうざったく思いながら、顔を上げる。そして驚いた。彼女の前に座っていたのは誰であろう、かの秋庭里香だったのだ。

「吉崎さん、ハニー、いい？」

「え？あ、は、はい。」

慌てて机の上に、秋庭里香が弁当を置くスペースを空ける。

「ありがとう」

秋庭里香はそう言うと、そのスペースに自分の弁当を広げて食べ始めた。吉崎多香子も、戸惑いながら自分の弁当を食べ始める。

確かに、今までも綾子が間に入って（半ば強引に）昼食を一緒にする事はあったが、秋庭里香の方から持ちかけてきたのは初めてである。

一体どうしたことだろう。

当の秋庭里香は何も言わず、もくもくと弁当を食べている。

仕方なく、吉崎多香子ももくもくと食べる。

もくもく。

もくもく。

やがて、お互いの弁当箱が空になった頃――

「ねえ、吉崎さん……」

初めて秋庭里香が口を開いた。

「はい？」

パックの烏龍茶を啜りながら、吉崎多香子は返事を返す。しかし、続きの言葉はなかなか出てこない。どうやら、何か躊躇しているらしい。これは、秋庭里香としては非常に珍しい事である。

しばしの間。

吉崎多香子が烏龍茶を啜る音だけが、昼休みの教室の喧騒の中に消えていく。

このままでは、らちがあかない。

こっちから発言を促してやろうかと吉崎多香子が思い始めた時、秋庭里香は意を決したかの様に息を大きく吸い、そして言い放った。

「男の子って、やっぱり胸が大きい方がいいのかな？」

ブッフ

思わず、口に含んでいた烏龍茶を噴出しそうになった。

辛うじてそれは耐えるものの、逆流したお茶が気管に入り、酷くむせ込んでしまう。

「ゴホツゴホゴホツ!!」

「大丈夫？」

そう言っただけで背中をさすってくる秋庭里香に向かって、咳き込みながら手で大丈夫の合図をおくる。

それにしても、藪から棒に何を訊いてくるのだ。この女は。

こんなラブコメで定番の台詞を、実際に耳にする日が来ようとは思ってもみなかった。

「何なんですか？急に」

「目尻に浮いた涙を拭きながら、改めて訊き直す。

「実はね……」

頬を薄く染めながら、秋庭里香は昨日の事の顛末を話した。

「……それで、ね。ちょっと、気になっちゃって……」

そう言っただけで、恥ずかし気にうつむく。

対して、吉崎多香子は絶句していた。

秋庭里香の問いに対してではない。事の張本人、如月蓮華に対して

である。

件の女と戎崎裕一の噂については、勿論彼女も耳にしていた。何せここ数日、学校はそれに関する噂で持ちきりだったのだから。それは、噂の一角である秋庭里香のいるこのクラスも例外ではない。いや。むしろ当事者がいる分、それはよりヒートアップしていた。

根も葉もない暴論推論が飛び交い、休み時間の度に秋庭里香は質問詰問の嵐に晒されていた。

その中で、吉崎多香子はその噂に関しては冷静に………というか、まるで本気にしていなかった。

バスデイ・プレゼントの件以来、秋庭里香と戎崎裕一の絆の深さはよく知っている。そこに第三者が入ろうとしたところで、その絆の固さに跳ね返されるのがオチだ。

人の噂も七十五日。

この騒ぎも、後数日で日常の喧騒の中に埋もれていくだろう。そう思っていた。

しかし、当事者本人から聞いてみると、なかなかどうして。如月蓮華という女、一筋縄ではいかないらしい。大体にして、この秋庭里香という女と真正面から向き合って事を構えられるという事事態、吉崎多香子には驚きである。

秋庭里香は強い。そして、恐ろしい。

確かに、肉体的にはその内に抱える病の事もあって、他者よりはるかに脆弱である。しかし、その脆さを補って余りあるほどに、精神が、心が強かった。

その事を、吉崎多香子は身をもって知っている。

このクラスが始まったばかりの頃、彼女は自分の立ち位置を確立するための術として、愚かにも秋庭里香を敵にするという手段を選んできました。

その結果は周知の通り。

立ち位置の確立どころか、一時クラスでの居場所さえなくしてしまいう結果となった。あの出来事は、なんやかんやあって和解した今でも、ちよつとしたトラウマである。

そんな吉崎多香子にとって、如月蓮華という女の所業は実に驚愕の一言だった。

かつての自分ですらしなかった、秋庭里香に対しての明白な宣戦布告。

二人の関係を知った上で行われる、戒崎裕一へのあからさまなアップローチ。

そして、昨日の放課後の出来事。

皆は、それらを如月蓮華の軽い性格故の所業と思っている。

しかし、現実はずう。

もしそれらの事を、何の考えもなしに行っていたのなら、如月蓮華は当の昔に強烈なしっぺ返しを食らっていた筈だ。秋庭里香は抜け目なく、かつ狡猾である。敵対する相手に隙があれば、それを見逃しはしない。しかるに、かの如月蓮華はまだその隙すら見せず、なおも攻勢を強めている。それはすなわち、彼女が秋庭里香に対抗出来る程の精神力と狡猾さを持ち合わせているという事に他ならない。

全くもって、驚きである。

「ねえ、あたし、胸、小さいかなあ……？」

しかし、それはそれとして、今回の秋庭里香のめげっぷりは以外である。

どうやら、よつぽど痛い所をつかれたらしい。

ああ、この人も女なのだな……等と思ったりする。

「……まあ、その……そりゃ、大きいとは言い難いですけど……良いんじゃないんですか？別に。形は良いみたいです……」

適当にそんな事を言ったら、ずずいと身を乗り出してきた。

顔が近い。

目が怖い。

「本当!?!」

「え……あ、は、はい。形なりばかり大きくてもってのもありますし……。大体、戒崎先輩は言ってくれたんでしょう？小さい方が好きだ……」

「そうだよね!!そうだよね!!」

肩を掴まれて、ガクガク揺すられる。

ああ、あたしは何でこんな会話してるんだ……。

涙目で「そうだよね!!」を繰り返す秋庭里香に揺すられながら、吉崎多香子は途方にくれてそう思うのだった。

そんな事があつた日の放課後。

さて帰ろうと思つて廊下に出た吉崎多香子は、同じ廊下の向こうにユラユラと揺れるサイドポニーを見とめた。それが如月蓮華の後姿だと察するのに、時間はかからなかった。

途端、妙な心境が頭をもたげて来る。

別に、秋庭里香を友人として認識している訳ではない……つもりではある。

しかし……。

頭に浮かぶのは、一緒に戎崎裕一のバースデイ・プレゼントを選びに行った時に見た、一生懸命な顔。

この世で一番大切な人との時を、万感の想いを込めて語る顔。

プレゼントに込めた想いが届いた時の、嬉しそうな顔。

それに、さっきの柄でもないしよぼくれた顔が重なる。

「……ああ、もう!!」

何をしようとしてかは、自分でも分からない。それでもいつしか、吉崎多香子の足は如月蓮華の後を追っていた。

スタスタスタ……

スタスタスタ……

数メートル先を歩く蓮華の後を、吉崎多香子について行く。

別に足音を忍ばせているつもりはないのだが、後ろの多香子の存在に気付く様子もなく如月蓮華は真っ直ぐに歩いていく。

何処に行くつもりなのだろう。

また、自転車置場で秋庭里香と戎崎裕一を待ち伏せるつもりなのだろうか。

このまま行けば、その場に居合わせる事になる。

その時、さて自分はどうするつもりなのだろうか？

秋庭里香の側に立って、如月蓮華を糾弾するのか。

秋庭里香に、相手にするかと諭すのか。

どちらにしろ、面倒な事になるに違いない。

出来るなら、面倒事は遠慮したい。

やっぱり、ここで戻ろうか。

しかし、そんな考えとは裏腹に吉崎多香子の足は止まらない。

そんな吉崎多香子の葛藤をよそに、如月蓮華は四階の階段にさしかかる。

と、その時――

横から出てきた数人の女生徒が、如月蓮華を取り囲んだ。

「――!!」

吉崎多香子は、反射的に手近な教室に隠れる。

聞こえてくる、何やら争う声。

隠れた教室から覗いてみると、如月蓮華を取り囲んだ女生徒達は、そのまま屋上へ向かう階段を上っていく。人目につき難い、屋上の踊り場に連れて行くつもりらしい。何人かの生徒が通りかかるが、面倒事を恐れてか見て見ぬふりをして通り過ぎていく。吉崎多香子は教室を出ると、如月蓮華が連れて行かれた階段の上り口に身を潜めた。

ドンツ

突き飛ばされた身体が、壁にぶつかる音が聞こえた。

見上げてみると、その周りを6人の女生徒に取り囲まれた如月蓮華の姿が見える。

如月蓮華を取り囲んでいる連中に、見覚えがあった。

一年二組の瀬良姫子と、その取り巻きだ。

一年生にいくつかあるグループの中で、特に柄が悪い事で定評がある。

吉崎多香子自身、入学してしばらくは取り巻きを引き連れてグループを作り、不良気取りをしていた。それでも、件の瀬良姫子と張り合う事は避けていた。それは、彼女が自分達とは違い、もう一線を踏み越えた場所にいると感じていたからである。簡単に言ってしまうと、



自分達が「不良気取り」だったのなら、瀬良姫子は本当の「不良」だったのだ。

それも、派手な格好で派手な真似をして粹がるタイプの不良ではなく、もつと狡猾に、そして陰湿に立ち回るタイプの不良だった。先生や上級生の同類には目を付けられる事なく、それでいて影では反モラルな事を平然と、そして好き放題に行う。

実際、噂はよく聞いていた。酒や煙草はもちろん、常習的に万引きやカツアゲを行い、中には援交さえも行っているという話もあった。けれど、そのどれに關しても彼女達は尻尾だけは出さなかった。その所業はみな噂の域を出ず、生活指導の先生達も手を出しあぐねていた。

普通の格好をしているのに、すれ違うと微かに煙草の残り香を漂わせる。

瀬良姫子とその一派とは、そんな連中だった。

そんな連中が今、明らかに如月蓮華を攻撃していた。

確かに、その容貌のみならず、現在学校中を騒がしている噂の張本人である如月蓮華なら、瀬良姫子の癪に障ってもおかしくない。

それともう一つ、吉崎多香子には心当たりがあった。

それは、当時の吉崎多香子と瀬良姫子における決定的な違い。

秋庭里香である。

吉崎多香子が秋庭里香を敵視したのに対して、瀬良姫子は「神聖視」していた。

それが、自分の持たないものを持つ者に対しての羨望なのか、それとも単に、美しいものに対する憧れなのか。それは分からない。

とにかく、瀬良姫子は秋庭里香を神聖視していた。

その入れ込み様はとかく異常で、写真部員を脅して撮らせた写真を常に持ち歩き、廊下ですれ違う時などは、気付かれない様にいつまでもその姿を目で追っていた。一部では、恋愛感情でも持っているのではないかという話まで流れていた。その恋人である戎崎裕一が、攻撃対象にならないのは一重に彼が男子であり、上級生であるからに他ならない。

もし彼が二年生ではなく一年生だったら？もし彼が男でなく女  
だったら？

その答えが今、吉崎多香子の目の前にあった。

続く

―想い歌―・⑨

「あんた、ちよつと調子に乗りすぎじゃないの?」

瀬良姫子は、目の前の少女に向かって声を張り上げた。

「少しくらい顔が良いからってさあ、気取ってんじやないわよ!!」

お定まりの様な台詞とともに、目の前の少女——如月蓮華の身体を突き飛ばす。

しかし、如月蓮華の表情は揺るがない。

ただ真つ直ぐな瞳で、姫子一同を見つめ返す。仄暗く、冷めていて、それでいて心の底まで突き通す様な鋭い眼差し。

その瞳が、姫子一同を困惑させる。

今まで、気に入らない生徒をこうやっていたぶった事は何度もある。ターゲットにされた生徒は戸惑い、戦慄き、怯えた目で視線を逸らしたものだ。

なのに、今日の前にいる少女はその目に怯えの片鱗さえ見せない。

こんな事は始めてだった。

そんな一同の困惑を知ってか知らずか、如月蓮華は言う。

「あのさ、どいてくれないかなあ? あたし、用があるんだよね。早くしないと、戎崎先輩と秋庭さん、帰っちゃう」

この状況など、全く意に介していない。そう言わんばかりの口調。それが、瀬良姫子の苛立ちに油を注いだ。

「『秋庭さん』なんて、馴れ馴れしく呼んでんじやねーよ!!」  
ピシィッ

踊り場に響く、鋭い音。

瀬良姫子が、如月蓮華の頬を打ったのだ。

しかし、如月蓮華はそれでも揺るがなかった。

打たれた頬を気にする事もなく、相変わらぬ鋭い視線で瀬良姫子を見返す。

その事に、姫子一同はますます困惑の度を深める。

「あんたさ……」

その戸惑いを見透かすかの様に、如月蓮華が口を開いた。

「秋葉さんの事、好きって本当？」

「んな……!!」

あからさまにうろたえる瀬良姫子。

そのうろたえを、如月蓮華は嘲笑う。

「ふふ、本当なんだ」

言いながらつつ、と瀬良姫子に近づく。

「そんならさあ、邪魔しないでくんない？あたしが戎崎先輩盗っちゃえば、秋庭先輩はフリーだよ。あんたにも、チャンス巡ってくるかもよ？」

もつとも、秋庭先輩にそんな趣味があればの話だけど、と付け加え、如月蓮華はケラケラと笑った。

「——っ!!」

それに激昂した瀬良姫子が、再び右手を振り上げた。

そのまま、如月蓮華の頬へと振り下ろし――

パシッ

しかし、今度はその手首を如月蓮華の手が受け止める。

「……く……っ!!」

狼狽する瀬良姫子を前にほくそ笑むと、その手を掴んだまま、如月蓮華はその目を細めてこんな事を言った。

「ねえ。こんな事してもらちがあかないでしょ？だからさ、いいよ？あんた達がしろって言った事、何でも一つ、してあげる」

「なっ……!?」

突然の提案に、驚く姫子一同。

「何言ってるのよ!?あんた!!」

一同の一人、佐藤広美が言った。

「言ったまんま。あんた達がしろって言った事、何でもしてあげる。そしたら、あたしの事、解放してちょうだい」

ニコニコと微笑みながら、如月蓮華は瀬良姫子に迫る。

その手はまだ、瀬良姫子の手首を掴んだままだ。

「さて、どうする？裸で校内一周しようか？それとも、放送室占拠して校内中に歌でも流そうか？」

「うっせえ!!放せよ!!」

瀬良姫子が叫んで、如月蓮華の手を振りほどいた。よほどの力だったのか、その手首は赤く染まっていた。

「上等だよ……!!」

そう言うと、瀬良姫子は視線を壁に走らせる。そこには、いつ刺されたものかも分からない、赤錆びた画鋏が数本。瀬良姫子の手が、それを抜き取る。

ジャラリ

そんな音とともに、それを如月蓮華の前に差し出す。

「……吞めよ!!」

瀬良姫子は如月蓮華に向かって、そう言った。

「コイツを呑んだら、あんたの事、許してやるよ!!」

ここに至って、ようやく姫子一同は余裕を取り戻しかけていた。

錆びた画鋏を呑む？

そんな事、出来る訳がない。

この娘も、そんな事出来ないと言うに決まっている。

そうすれば、それが決壊線。そこから、この娘を突き崩せる。後は、こつちのもの。思う存分、今までの鬱憤を晴らす事が出来る。

姫子一同はそう確信していた。

しかし――

「ふうん。そんな事でいい訳ね」

「え？」

ポカンとする瀬良姫子の手から、如月蓮華が画鋏を奪い取る。

そして――

ジャラリ

口に入れた。

驚く間も、制止する間もなかった。

啞然とする皆の前で、如月蓮華の喉が、ゴクリと動く。

「これでいい？」

そう言つて、舌を出してみせる。暗い口の中に、画鋏は見えない。姫子一同に、今度こそ決定的な動揺が走る。

「な……何なんだよ!!コイツ、おかしいよ!!」

取り巻きの一人、阿部京子が悲鳴の様な声を上げた。

「あ、あたし関係ない!!知らないからね!!」

そう言つて、佐藤広美が逃げ出した。

他の取り巻き達も、一様に同じ様な声を上げつつ、逃げ出していく。最後に残ったのは、瀬良姫子ただ一人。

青ざめた顔で戦慄しながら、それでも最後の意地なのか、如月蓮華の前から立ち去ろうとしない。

そんな瀬良姫子の前で、如月蓮華は薄ら笑いを浮かべた。

ゾツとする様な笑みだった。

綺麗だけど、人形の様には酷く無機質な、そんな笑み。

そして、薄く上がった口角から朱いものが滲み出す。

それが細い顎をツウと下り、ポツリと床に朱い点を描いた。

それが、限界だった。

「——っ!!」

声にならない悲鳴を上げ、瀬良姫子は後ろを振り向く事無く、階段を駆け下りていった。

吉崎多香子は、一部始終を見ていた。

そして、目の前を瀬良姫子達が自分に気付く余裕もなく走り去っていった後も、啞然と立ち尽くしていた。

と、

「何、突っ立ってんの?」

そんな声が、上から降ってきた。

如月蓮華が降りてきたのだ。

反射的に、逃げ出しそうになる。けれど、その衝動を必死に押さえると、吉崎多香子はその場に留まった。

「あんたも酷いねえ。人が苛められてんのに、ずっと見物してるんだから」

どうやら、見られている事に気がついていたらしい。

「あ、あんた、あの……今の……」

「ん？ああ、〝これ〟？」

そう言うと、如月蓮華はペツと口の中のものを吐き捨てた。

カランッ

廊下に、血と唾液に濡れた画鋲が転がる。

「〝ふり〟しただけよ」

そして、口元についた血をグイツと拭う。

「笑つちやうと思わない？ちよつとそれっぽく見せただけで、ビツツ逃げやがんの」

そう言つて、ケラケラと笑う。

その様を、吉崎多香子は絶句しながら見つめる。

この娘は一体、何なのだろう。

あの多対一の状況下において、この娘は相手の心理を完全に手玉に取っていた。

最初のやり取り。瀬良姫子はあの軽い、だけど身体を狙った攻撃で相手を萎縮させようと企んでいた筈である。事実、あそこで如月蓮華が少しでも弱みを見せれば、そのままずると姫子一同のペースに引き込まれていた筈だ。しかし、如月蓮華は決して隙を見せなかった。それどころか、逆に姫子一同を威圧した。こういう時の、如月蓮華の様な種類の人間の目の怖さは吉崎多香子自身がよく知っている。

“あの時”の、秋庭里香の目がそうだった様に。

案の定、姫子一同はこれで出鼻を挫かれてしまった。次にどうすればいいのか分からず、うろたえてしまった。そして、その隙をつかれた。

（いいよ？あんた達がしろつて言った事、何でも一つ、してあげる）  
如月蓮華が言った言葉。

この言葉に、姫子一同は飛びついてしまった。この機会を逆手にとれば、主導権を取り返す事が出来ると思つてしまった。自分達が、すでに如月蓮華の手の内で転がされているとも知らずに。

そして次に、如月蓮華はこう言った。

(裸で校内一周しようか?それとも、放送室占拠して校内中に歌でも流そうか?)

冗談ではない。そんな事をすれば教師達の目に止まらない訳がない。事が表沙汰になる事を恐れる瀬良姫子達が、そんな事をさせられる訳がない。それを承知の上で、あえて如月蓮華はそう言った。自分が、"それ"をやる覚悟があるのだと、錯覚させるために。

この時点で、姫子達は一連のカードを使えなくなった事になる。

それでもまだ、姫子一同には勝機はあった。土下座をさせる等々、簡単に精神的ダメージを与えられる手はいくらでもあった筈である。しかし、瀬良姫子はそういった手には目を向ける事が出来なかった。散々にコケにされたという思いから、そんな、容易な手で済ませる訳にはいかないと思つてしまった。

これで、瀬良姫子は残りのカードも自ら放棄する事になる。

残ったのは、極々限られた数枚のカード。

そこで、如月蓮華は本当の覚悟を見せた。

躊躇する事なく、示されたカード―画鋏を口に放り込んだ。

口からこぼれた血の量を見ると、飲み込んだ様に見せるために、含んだ画鋏を頬の裏にでも突き刺して隠していたのかもしれない。

普通に考えたら、常軌を逸した行動である。

異質である。

人は、異質を恐れる。

そして事実、散々弄ばれた姫子一同の心はそれに耐え切れなかった。

振り向きもせずに逃げていった、瀬良姫子の顔を思い出す。彼女達にはきつと、如月蓮華が得体の知れない化け物の様に見えていた事だろう。

生半可な狡猾さではない。そして、それにともなう覚悟も。

「あくあ、口の中ザクザク。後で口内炎になりそう」

ブツブツ言いながら口元の血を拭うその様子は、自分のした事に対する後悔など微塵も感じさせない。

これがもし、髪を切れという注文だったら、彼女は何の躊躇もなく



切り落としただろうし、靴底に画鋏をばら撒いてそれを履けと言われれば、躊躇いもなく履いたことだろう。

もちろん、その顔には無機質な薄笑みを浮かべたまま。

ああ、この娘はいつたい何なのだろう。

また、吉崎多香子は思う。

話で聞いた限りでは、如月蓮華と言う少女は秋庭里香の同類なのだと思います。

しかし、違う。

今、秋庭里香との関わりを少なからず持つ吉崎多香子にはよく分かる。

秋庭里香は強い。この娘も、強い。

しかしそれは似ている様で、まるで違う強さ。

秋庭里香の強さは、常に光の中にある。

それは命の瀬戸際で磨かれた強さであり、限りある時間を精一杯に輝こうとする。そんな強さだ。

己の命を守り、己に寄り添う者を守り、自分達の歩く場所を守るための力。

だからこそ、秋庭里香の周りは明るい。

時に、それがどんなに狡猾でも。

時に、それがどんなに容赦なくとも。

秋庭里香の周りは、光に満たされている。

それに対して、如月蓮華の強さは暗かった。

そう。それこそまるで、秋庭里香のそれに相反するかの様に。

そこに、守るべきものは何もない。

他者も、自分さえも、目的のためなら平気で傷付ける。

それで人に忌まわれようが、それで自分が孤独になろうが、一向に構わない。

自分と、自分に関わる者全てを暗闇に引き込む。如月蓮華の強さは、そんな強さだった。

何が彼女をそうせしめたのかは分からない。

しかし、吉崎多香子は直感していた。

これ以上、如月蓮華を秋庭里香と戎崎裕一に関わらせるべきではない。

いや、関わらせてはいけない。

「ちよつと……」

吉崎多香子が話しかけようとしたその時、如月蓮華の首がグルンと吉崎多香子の方を向いた。

暗い瞳が、吉崎多香子の姿を映す。

瞬間、足が竦む。出かかった言葉が、喉に詰まった。

「あんた、吉崎さんだよねえ。秋庭さんと同じクラスの」

そう言いながら、近づいて来る。

「今日は余計な邪魔が入ったから、自転車置場行きそこねちゃった。もう先輩達、帰っちゃってると思う」

暗い瞳が近づいて来る。乾いた喉が、ごくりと大きな音を立てるのが分かった。

「だからさ、秋庭さんに伝えといてよ」

如月蓮華の手が、ポンと吉崎多香子の方に置かれる。耳に寄せられる口。微かに、鉄錆の匂いが香った。

『戎崎先輩、あたしのお弁当、美味しいって言ってくれましたよ』  
……つて」

その言葉を聞いた途端、軽い目眩が吉崎多香子を襲った。

「じゃあね。頼んだからね」

一方的にそう言うと、如月蓮華は身を翻し、ケラケラと笑いながら階段を下りて行く。

その後姿を、ただ呆然と見送る吉崎多香子。  
と、

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

不意に階下から流れて来る歌声。

鈴音の様に澄んだそれが、かの少女のものだと気づくのに、時間はかからなかった。

ハミングしているのだろう。

メロディーだけで、歌詞は分からない。

けど――

（―君を守るその為ならば 僕は悪にだってなってやる―）

一瞬、そんなフリーズが頭を過ぎる。

この曲は……。

一瞬の戸惑い。

吉崎多香子が我にかえった時、もう、歌声は聞こえなかった。

続く

― 想い歌 ― ・ ⑩

— 10 —

その日、僕は大変な失敗を犯してしまった。  
今思い返して見ても、何であんな事をしてしまったのか。自分でもよく分からない。

昨夜考えていた事が、尾を引いてしまったのだろうか。

ひよっとしたら、そこを見抜かれてつけこまれたのかもしれない。  
とにかく、普通に考えたら絶対にはいけない事を、僕はしてしまったのだ。

事は、今日の昼休みに起こった。

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

耳に響くチャイムの音を聞きながら、僕はまた頭を抱えていた。

僕の目の前には、椅子に座ってニコニコと僕を見つめる悪魔、もと  
い如月蓮華がいた。左手で僕の机に頬杖をつき、右手には例の自称愛  
妻弁当をプラプラさせている。どういう訳か知らないが、今日は授業  
終了のチャイムが鳴り終わらないうちに教室に入って来やがった。  
お陰で逃げ出す暇がなかった。というかちゃんと授業受けてるのか  
コイツは。

「せーんーぱーいー!」

ニコニコと笑いながら、蓮華は僕にすり寄ってくる。

おいコラ、これは僕の机だぞ。勝手にひじをつくな。

横を見れば、蓮華が座っている椅子の本来の持ち主が困った顔で所  
在無さげにモジモジとしている。

おいお前、一応上級生でおまけに男だろ! 「そこは俺の席だどきや  
がれ」くらい、ガツンと言ってやる気概つてもものはないのか!? 気概つ  
てもものは!? お前がそんなだから、コイツがこんな所でのさばっている  
んだぞ!!

無駄な事とは知りつつ、心中で見当違いな恨み言など述べてみる。

そんな僕の苦悶を知ってか知らずか、蓮華は目の前で「自称」愛妻弁当をプラプラさせる。

「今日こそ食べてもらいますよ。あたしの愛妻弁当」

「食わないいつてんだろ!!そんなもん!!」

「そんなもんだつて。酷いなあ。これでも心を込めて作ってるんですよ? 毎朝5時に起きて」

心が込もっていいようがいまいが、朝の5時起きだろうが3時起きだろうが知った事か。

「食わないいつつうの!!」

「食べてもらいます!!」

「食わない!!」

「食べて!!」

十巡ぐらいそんなやり取りをした後、蓮華はポスンと弁当を机の上に落とした。

細い両手が上がり、顔へと向かう。

ひよつとして、泣くつもりか。女の最後にして最大のカードをここで切るつもりか。

上等だ。受けて立とうじゃないか。

確かにこんな所で泣かれたら、僕の男としての評判はガタ落ちだろうけど、それがどうした。そんなモン、この数日でとつくに地の底まで堕ちている。

泣くなら、泣け!!

僕は大きく息を吸って、肝を据えた。

しかし――

蓮華は泣かなかった。

上げた両手を机の上で組むと、その上に顎を乗せた。

そして目を細め、ニンマリと笑って見せた。

「な、何だよ!」

その笑いに不穏なものを感じながら僕が問うと、蓮華はこう言った。

「先輩は知りたくありませんか?」

「だから、何をだよ!？」

「あたしにとつて、先輩が何なのか」

「——!？」

思わず息を飲む僕の反応を、思ったとおりとでも言う様にその笑みを深めると、蓮華はツツツと“自称”愛妻弁当を僕の方に押しつけてよこした。

「取引しましょう」

囁く様な声で、蓮華は言う。

「お弁当、食べてください。そうしたら、教えてあげますよ。先輩が、あたしにとつて何なのか。あたしが先輩に、何を求めているのか」誘う様な笑み。

(あの娘、一線から先は全然見せないのよ)

昨夜のみゆきの言葉が、頭の中でリフレインする。

(裕ちゃんの事は、その一線の向こうの事みたい)

如月蓮華が持つという、先を見せないその一線。その一線が今、僕の目の前にある。たった一つの、弁当箱という形をとつて。

ゴクリ

自分の生唾を飲み込む音が、やけに大きく頭の中に響いた。

「どうします?先輩」

蓮華が囁く。

酷く、蠱惑的に、微笑みながら。

……頭の中では分かっていたんだ。

これは、罠だと。

僕の堤防に、穴を開けるための一手だと。

だけど。

だけど。

弁当の向こうで、黒い瞳が面白そうに僕を見つめている。薄く微笑んだその向こうは、僕には見えない。黒い、黒い、闇色の瞳。その奥に在るものを、僕は知りたかった。

何で僕に、これほどまで執着するのか。

何で里香に、あれほどまで敵意を向けるのか。

それを知りたかった。

そして、その答えが、この弁当の向こう側。あの瞳の奥にある。知りたい。知りたい。

やがてその欲求は、手が付けられないほど僕の内で膨らんでいた。そして――

……気がつけば、僕は弁当箱を掴んで席を立っていた。

「どこ行くんです?」

「教室こんな所で食えるかよ!!屋上に行く!!」

その言葉に蓮華はほくそ笑むと、僕の鞆に手を伸ばした。

「じゃ、あたしはまたこっちを」

そう言つて、蓮華は鞆から僕の弁当を引つ張り出した。

「ああ、美味しかった。ご馳走様」

そう言つて、蓮華は空になった弁当箱を置いた。

「本当に、お料理上手ですね。お義母さん」

「お義母さんじゃねえよ……!!」

同じように空になった弁当箱を前に、僕は呟く様にぼやいた。

「まあ、良いじゃないですか。前にも言つたけど、いずれそうなるんですから」

役目を終えた弁当箱をきれいに包み直しながら、いけしやあしやあとそんな事を言う。

「前にも言つたけどな、そうならねえよ!!」

そう言いながら、僕は乱雑に包んだ弁当箱を突つ返した。

「さあ、食つたぞ!!今度はお前の番だ!!」

と、凄味を効かせて言つたら、

「美味しかったですか?」

などと返してきた。

「はあ!?!」

「聞こえませんでしたか?美味しかったですか?って訊いてるんです」

「そんなの関係ねえだろ!!さっさと……」

「答えてくれなきゃ、言いません」

「……この・女・は……!!」

ここまで一人の女に翻弄されるのは、僕の人生において里香以来二人目だ。もつとも、その方向性は全く違うけど。

「さあ、答えてください。でなきゃ、取引は反故ですよー」

お前にどんな権限があつて、んな事決めてんだ!!

喉まで出かかると言葉、必死に飲み込む。伊達に里香で経験を詰んだ訳じゃない。この手の女は、迂闊に逆らうと全て裏目に出る。じゃあ、どうするか。

答えは、一つだ。

「……美味かつたよ……」

僕はボソリと答えた。

「はいー?何ですかー?」

蓮華は聞こえないという風に、耳に手を当てる。

「美味かつたよ……」

「はい?聞こえませーん」

ニタニタと笑いながら、そんな事を言う。

完全に楽しんでやがんな。コイツ。

「ほらほら、もう一度。大きな声で」

ああ、くそ!!もう自棄だ!!

「美味かつたよ!!」

僕は半ば悲鳴の様な声で、そう言った。

それを聞いた蓮華が、一気に破顔する。

「あは、あははは、言った言った!!言ってくれた!!」

そう言って、ケタケタと笑う。

その様は、嬉しいのか、可笑しいのか、それすらもはっきりしない。何から何まで、コイツの事は分からない事だらけだ。

「……満足かよ!?!」

腹の中で煮えくり返る憤りを無理やり飲み込むと、僕は低い声でそう言った。



「はい。満足です」

満面に笑みを浮かべながら、そう言って頷く蓮華。  
なら、今度はこっちの番だ。

「じゃあ、教えるよ!!お前は何だ!?何だって、オレ達にちよっかい出して来るんだ!?!」

「……いいでしょう。約束ですし、お教えします。」

それまでの笑みを引つ込めると、蓮華は真顔に戻ってそう言った。  
その顔の真剣さに、逆に僕の方が怯んでしまう。

そんな僕に、蓮華はズイツと顔を寄せてきた。

「——!?!」

距離が近い。

お互いの顔に、お互いの吐息が届く。

シャンプーだろうか。微かに甘い香りがする。

……不覚にも、心臓がバクバクした。

「あたしは……」

間近で僕の瞳を見つめながら、蓮華は言う。

「あたしは……」

深い深い、漆黒の瞳。

ともすれば、それに吸い込まれそうになる意識を、僕は必死で立て直した。

と、突然真顔だった蓮華の相好が崩れた。

180度、クルリと反転するその表情。

「へ……?」

思わず唾然とする僕に向かって、黄色い声でこう言った。

「戎崎先輩に恋する、一人の乙女です!!」

……は?

「……」

「……」

お互いが、その格好のまま、しばし固まる。

そして——

「……っぎげんなー!!」

キレた。

そりやもう、盛大にキレた。

「てめえ、人が大人しくしてりやいい気になって!!何が「恋する、一人の乙女でーす!!」だ!!」

僕は、これでもかと言うくらいの大声で怒鳴った。実際、ここまで頭に血が上った事は近年、覚えがない。だけど、僕の剣幕にも蓮華はまるで動じない。

「やだー、先輩、ホンキで怒ってるー」

などと言いながら、軽くステップを踏むようにして僕から離れる。

「おいコラ、待て、ちゃんと約束守れよ!!」

「守ってますよー。ほら、如月蓮華は戎崎裕一に恋してまーす。戎崎裕一は如月蓮華にとつて一生の伴侶になる人でーす」

そんな事を大声で喚きながら、蓮華は逃げ回る。

だんだん、別な意味で顔に血が上ってきた。

「如月蓮華の心は戎崎裕一のものでーす!!如月蓮華は戎崎裕一の全てを求めてまーす!!」

おいコラやめろ!!そんな事大声で喚くなつて!!

僕は別な意味でむきになって蓮華を追い回すが、その動きは速い。さっぱり捕まらない。

そうやって散々僕を引つ掻き回すと、蓮華は空の弁当箱を手に取りつつ屋上の出口へと向かった。

「お……おい……!!」

そして、開け放たれたドアの前でクルリとターンすると、息も絶え絶えになった僕に向かってこう言った。

「怒った顔もチャーミングですよ。せ・ん・ぱ・い・♡」

絶句する僕の前で、ケタケタという笑い声と軽い足音が遠ざかっていく。

「——っ!!」

僕はその場に座り込むと、汗だくの顔で空を仰いだ。仰いだ視線の先で、僕を嘲笑うかの様に鳥が鳴いた。

……これが、今日僕が犯した失敗の一部始終だ。

散々手の上で踊らされた挙句、残ったのは蓮華の弁当を食ってしまっただけ（美味かったと言う感想付き）という「既成事実」だけ。

馬鹿である。

愚かである。

浅慮と言われても、阿呆と言われても、反論のしようがない。

僕は、何処かで如月蓮華という女を甘く見ていたのだろう。

所詮、自分より歳の浅い小娘と甘く見ていたのだ。

相手は、あの里香と向こうを張って譲らなかった相手だと言うのに。

……などと、今更後悔しても仕方ない。

その後の、午後の授業の記憶が僕にはない。

周りの視線がより痛いものになっていた様な気もするが、それも問題にはならなかった。

何故か。

怖かったのだ。恐ろしかったのだ。

自分が犯した愚行の結果が。

事実が。

里香に知れてしまう事が。

正直、放課後など来なければ良いと思った。放課後が来れば、里香はいつも通り僕を待っているだろう。里香と会えば、やっぱりいつも通り一緒に自転車置き場に向かう事になる。そして、そこには間違いなく、「アイツ」がいる筈で――

ああ、もういつそ全てを放り出して、逃げてしまおうか。

――出来る筈もない。

里香が待っている。

僕の事を微塵も疑わず、里香は待っているのだ。

せめて僕は、残りの時間がゆっくりと流れる事を祈った。

だけど、時間という人事不介入の代物が、一高校生の小僧相手に都合を変えてくれる筈もない。

結局、終業の時間はいつもどおりに来てしまったのだった。

続く

カツ カツ カツ

廊下に響く、僕の足音。

ドクン ドクン ドクン

それに同期する様に響く、僕の鼓動。

今は放課後で、周りには沢山の生徒達がいて、それなりに騒々しい筈。

なのに、その喧騒が全然耳に入っていない。

頭の中に響くのは、僕自身の足音と鼓動だけ。

いつもと同じ廊下の筈なのに、酷く長く感じる。

どうせなら、いつそのまま永遠に続けば良いのにか思ってしまう。

だけど、現実是非情だ。

やっぱり廊下には終わりがあり、その続きの階段にも終わりがあ  
る。

階段を降りる時など、この階段が奈落の底まで続いていればとか思  
えたものだけど、結局何という事もなく下についてしまった。

後はもう、昇降口に向かうしか道はない。

僕は一人溜息をつく、残り僅かな道程を歩き始めた。

昇降口に着くと、そこではもう里香が待っていた。

乾いた喉が、ゴクリと鳴る。

「お、おう、待ったか？」

務めて平静を装いながらそう言うと、

「うん。待った」

などと返された。

相変わらず、遠慮がない。

「遅かったね。どうしたの？」

「いや、いや、今日は日直でき、帰り際に先生に用事頼まれちゃってよ。まいったよ、ホント」

事前に用意していた言い訳を口にする。

自然に自然にと思っていたが、かえってそれがいけなかったらしい。空気が喉で絡まって、裏声みたいな変な声が出てしまった。マズイ。不審に思われたか!?!と全身冷や汗もので里香の反応を待ったが、里香は「ふーん」と気のない返事を返してくるだけだった。

どうやら、感づかれなかったらしい。内心で胸を撫で下ろす。その後も当たり障りのない話題で場を持たせるが、里香は「ふーん」とか「そう」などと言った話題の中身に相応しい気の抜けた返事を繰り返した。

この様子から察するに、昨日の出来事がまだ尾を引きずっている様だと僕は考えた。これなら、今日の昼の事は里香の耳には入っていないと考えて差し支えないだろう。

とりあえず、僕はホツとする。

しかし、こんな事で間を稼げるのもあとほんの少しの間だろう。もう少しで自転車置場に着く。着けば、ほぼ確実に蓮華あいつが待っている。そして蓮華あいつの事だ。昼の出来事を洗い浚いぶちまけてくるに違いない。それも、得意気に。その時に見せられるであろう、蓮華の勝ち誇った悪魔の様な笑顔がリアルに浮かんできて、頭がクラクラした。

もしそうになったら、里香はどんな反応を示すのだろうか。

怒るだろうか。

それとも、呆れるだろうか。

まさか、泣きはしないだろう。

とにかく、僕にとって決して愉快な事にならないのは確定事項だ。

もういつそ、自転車置場に行く事を止めてしまおうか。

そうすれば、(多分)蓮華あいつには会わずに済むだろう。

そうだ!!そうしよう!!里香には健康の為だからたまには歩いて帰ろうとか言って……。

いいや、駄目だ。唐突にそんな事を言い出せば、里香が不審に思う

に決まっている。

自分で藪を突いて蛇を出してたら世話もない。

しかし、このまま行ったら行つたで、待っているのは悪魔蓮華の待つ本当の修羅場。

行くも地獄引くも地獄。八方塞とはこの事だ。元はと言えば自分で撒いた種とは言え、一体何の因果でこんなに寿命を削る様な思いをしなければならぬのか。もし運命の神様なんてものがいるのなら、その胸倉を掴んで10回ぐらいぶん殴ってやりたい気分だ。

そんな事をとりとめなく考えている内に、とうとう自転車置き場に着いてしまった。

もうどうしようもない。

僕は覚悟を決めた。

——だけど、奇跡は起きた。

理由は分からない。

ひよつとしたら、さつき10回ぶん殴ると脅しをかけた運命の神様が、そりゃ敵わんと気を利かせたのかもしれない。

とにかく、奇跡は起きたのだ。

そう。その日、如月蓮華は自転車置き場に現れなかった。

僕は浮かれていた。

有頂天になっていたと言ってもいい。

とにかく、目の前まで迫っていた地獄。それが、向こうから避けてくれたという事が嬉しくて仕方がなかった。

落ち着いて考えれば、事が先延ばしになっただけ。事態そのものは全く解決していない。けれど、今の僕には当座の問題がなくなっただけで御の字だったのだ。

「いやあ、変な奴も出なかったし、今日は良い日だったなあ」

自転車置き場から校門への道程をカラカラと自転車を押しながら、僕は傍らを歩いている里香に言った。

「……………うん……………」

「全く、いい加減蓮華あいつにはウンザリだったもんな。」

「……うん……」

「だけど、本当どうしたんだらうな。今日に限って」

「……」

「ひよつとしたら、あんまりはしやぎ過ぎて鬼大仏に目でもつけられたんじゃねえか？今頃、生徒指導室で絞られてたりして」

狭い個室の中、鬼大仏と差し向かいで座らせられている蓮華の姿が頭に浮かんだ。

何をしでかしたは知らないが、とにかく鬼大仏の逆鱗に触れた蓮華は椅子の上に小さくなつて座っている。いつもの小生意気な雰囲気はスツカリ影を潜めて、目印のサイドポニーも見る影もなくしよぼくれている。鬼大仏がドンと机を叩き、バツカモーンと怒鳴る。その剣幕に蓮華はすくみあがり、すいませんすいませんと頭を下げまくるのだ。

いいぞ!!鬼大仏!!いや、ここは敬意を込めて近松覚正と呼ばせてもらおう。もつとやれ!!その悪魔をもつと凹ませてやれ!!

その様子を想像して、僕はウハハと笑った。

……全く、僕は浮かれまくっていた。

浮かれて浮かれて、周りが目に入っていないかった。

だから、気付かなかった。

傍らを歩く里香の様子が、いつもとは違う事に。

校門についた僕は自転車にまたがると、里香に荷台に乗る様に促した。

「ほら、乗れよ」

でも、里香は動かない。

「どうした？乗れってば」

だけど、やっぱり里香は動かなかった。

さすがに不審に思った僕が、もう一度言おうとしたその時、

「……裕一、言わないんだね……」

里香が唐突に口を開いた。



「え、な、何をだよ?」

戸惑う僕を悲しげに見つめると、里香ははつきりと次の言葉を口にした。

「今日のお昼、あの娘と何してたの?」

それを聞いた途端、僕の浮ついていた気持ちは、真つ逆さまに地へと落ちていった。

ガシャンツ

うろたえた僕の手から離れた自転車が、派手な音とともに地に倒れた。

「ど、どうしてお前……」

「今日のお昼、あの娘と一緒に行ってたよね? 屋上」

「ま、まさか……」

嫌な予感が、僕の胸を過ぎる。

「うん。見てた」

「——っ!!」

確かに、里香達一年生の教室は僕達二年生の上の階にある。屋上に行くにはどうしても通らなきゃならない。という事は、当然一年連中にはその姿を見られる可能性がある訳で——

——迂闊だったとしか言い様がない。蓮華の事ばかりに気を取られて、周囲の事にまで気が回らなかった。

「あ、あれは、その……」

まともに答える事も出来ず、しどろもどろになる僕に向かって里香はさらに言い募る。

「食べたんだね。あの娘のお弁当」

僕は、全身の血が下がるのを感じた。

「い、いや、あれは蓮華あいつに迫られて無理やり……」

「でも、美味しかった」んでしよう?」

「んな……!?!」

息を呑む僕。

里香は表情を変えず、淡々と語る。

『聞こえたもん。『美味かった!!』って』

「き……聞いてたのか……!?!」

そこで初めて、里香は僕から目を逸らす様に顔を伏せた。

「……あたし、いたもの。屋上の、ドアの裏に……」

冗談でも比喻でもなく、本気で目眩がした。

……当然と言えば、当然かもしれない。里香だって、一人の女の子なのだ。

いくら、他の女子より知恵が回るとしても。

いくら、他の女子より精神が成熟してるとしても。

その本質は、一人の少女に過ぎないのだ。

つきあってる男が、他の女と、それもその男に好意があると公言している女と一緒にいるのを見て、気にするなと言う方が無理というものだ。

「聞いちゃった。全部。あの娘が言ってた事も」

「……!!」

里香の言葉に、僕は愕然とする。

「あの娘、大好きなんだね。裕一の事」

「そ……それは……」

最悪の事実だった。

これならむしろ、自転車置場で蓮華に遭遇した方がまだ良かったかもしれない。

それなら、いくら蓮華が騒ぐのが所詮口だけの話。

幾らでも誤魔化しようがあっただろうに。

「嬉しかった? あの娘に “恋してる” って言われて……」

「ち、違うぞ!! あれは蓮華が勝手に……!!」

言いながら、僕はこれでもかと言うくらい混乱していた。

どういう事だ!?

これでは、まるで蓮華が里香がそこにいるのを知りながら、あんな言動をとっていた様ではないか。

そこまで考えて、僕は心底ゾツとした。

そう。 “知っていた” のだ。

蓮華は、あの場に里香がいる事を知っていた。

だからこそ、あんなに執拗に僕に「美味かった」と言う様に仕向けた。

だからこそ、あんなに派手に自分が僕を好きだという事を喚き散らした。

自分が聞きたいからではない。そして、僕に聞かせる為でもない。

全ては、〃里香に聞かせる〃為。

最初から計画していた事とは思えない。

多分、僕と一緒に屋上に行く途中で、里香が見ている事に気がついたのだろう。

それだけでその後の里香の行動を読み、即興でこんな計略を練り上げたのだ。

……狡猾なんて生易しいもんじゃない。それこそ、本当に悪魔の如き奸智だ。

「勝手にしては、随分嬉しそうだったよ？あの娘……」

「違う!!違うって!!ほ、ほら、そこまで聞いてたんなら、あれも聞いてただろ？オレがキレてあいつに怒鳴ったの……」

溺れる中で藁を掴む様に、僕はその事実にすぎた。だけど――

「じゃあ、何で話してくれなかったの？」

「――!!」

里香の言葉に、今度こそ僕は言うべき事を失った。

「話してくれれば、それで良かったのに。裕一、そうしなかった。隠そうとしたよね？触れないようにしたよね？どうして？」

怒鳴るでもなく、泣きじやくるでもなく、ただ淡々と語る里香。

返す言葉が、僕にはない。

「……やましかったんだよね？後ろめたかったんだよね？だから、隠そうとしたんだよね？」

……そう。僕はやましかったのだ。後ろめたかったのだ。

くだらない好奇心に負けて、見え見えの罠にはまってしまった自分が。

どんな形であれ、里香を裏切ってしまった自分が。

賢しい里香の目には、さぞ滑稽に、そして情けなく映っていた事だ

ろう。

ただ自身の保身の為だけに、事実を隠そうと必死で言葉を言い繕う僕の姿は。

「……………」

「……………」

里香はもう、何も言わなかった。

僕はもう、何も言えなかった。

カツン

何処か重い足音を響かせて、里香が歩き出す。

「お、おい……………!!」

「着いて、来ないで」

慌てて追いつけずがろうとした僕を、里香の声が遮る。

「二人で、帰るから……………」

能面の様に表情のない顔でそう言うと、里香は振り返りもせずにつカツカと歩き出す。

どンドン遠ざかるその後姿を、僕はただ見送る事しか出来なかった。

周りで事の成り行きを見守っていた生徒達が、ザワザワとざわめき出す。

そのざわめきの中で、僕はボンヤリと考えていた。

あの時、蓮華が屋上から校舎の中に戻った時。

開け放たれたドアの裏に、里香はまだいたのだろうか。

もしそうだとしたら、蓮華はそこにどんな表情を向けていったのだろうか。

優越？

嘲り？

それとも悪意？

僕の内に浮かぶどの顔も、怖気を振るう様な表情をしている。

あの綺麗な顔を歪に歪めて、ケタケタケタと笑うのだ。

その笑い声に、周りの連中のざわめきが重なる。

ああ、うるせえ。

うるせえよ。

耳を塞いでも、喧騒に混じる笑い声は消えはしない。

いつまでも止まないざわめきの中、僕はただただ、立ち尽くすだけだった。

続く

―想い歌―・⑫

— 1 2 —

……一体あたしは、どうしてしまつたんだろう。

部屋の中、畳の上に寝転がりながら、あたしは今日の事を思い返していた。目をつぶると浮かんでくるのは、情けない顔で途方に暮れている裕一の姿。

ゴロリ

身を転がす。

だけど、網膜に焼きついたその顔は、いくら転がってもしつかりとついてくる。

何であたしは、彼にあんな事をしてしまつたんだろう。

何であたしは、彼にあんな事を言ってしまったんだろう。

(そこまで聞いてたんなら、あれも聞いてただらう？オレがキレてあいつに怒鳴つたの……)

耳に蘇る、彼の言葉。今にも泣き出しそうな、必死な声。

そう。あたしは聞いていた。

分かっていたのだ。

裕一に、あの娘に対する下心なんてありはしないと。

だけど。

だけど。

屋上で、二人で連れ立って屋上に向かう姿。

「美味かった」という裕一の言葉。

それらに被さる様に頭に響く、*“あの娘”*の声。その声はだんだん大きくなって、アタシの内で割れ鐘の様に響き渡る。

「ああ、もう!!」

それを振り払う様に、ガバリと身を起こす。乱れて顔にかかる髪を振り払って大きく息をつくとき、外に薄闇が堕ちた窓が目に入る。立ち上がって窓の外を見ると、夕日はもうその峠を越えて遠くの山の向こうに消えかけていた。いつもなら、あたしが裕一に送られて帰ってく

る頃合だ。

今日、彼はこの薄闇の中を一人で帰ったのだろうか。

そう、たった一人で。

後悔に苛まれながら。

胸の奥が、チクリと痛む。

けど、それ以上に重苦しく押し掛かるのは、彼に付きまとう“あの娘”の存在。まるで、胸の中に大きな蛇がとぐろを巻いている様。

こんな気持ちは、初めてだ。

病院で、裕一がエツチな本をたくさん隠してるのを見つけた時も。

文化祭で、変な映画を見てた事を知った時も。

こんな気持ちになった事はなかった。

一体、この気持ちは何なのだろう。

……いや。かまとどぶるのは止めよう。

あたしは知っている。

この気持ちは、“嫉妬”だ。

あたしはあの娘に、如月蓮華に嫉妬しているのだ。

彼女が、一人で騒いでいるだけだと知っているのに。

彼が、さんざんそれに辟易していると知っているのに。

それでもあたしは、彼に別の女が付き纏っているのが許せないのだ。

……自分が、こんなにも独占欲が強いとは知らなかった。

裕一も、きつと驚いているに違いない。

自分ですら、よく理解出来ないこの感情。他の人に、彼に理解してくれと言うのは酷だろうか。

それに、一抹の不安がない訳でもない。今日、裕一は不本意だとしても、如月蓮華の誘いに乗った。それはどんな形であれ、彼が少なからず彼女に興味を持ったという事だ。

彼が、他の女に興味を持つ。

それを考えただけで、胸の中でとぐろを巻く蛇が蠢いた。

妙な胸苦しさを覚えて、胸に手を当てる。

心臓が苦しい訳ではない。そんな物理的な痛みとは違う、別の痛

み。

はあ、と息をつくと傍らの本棚に目をやる。

本棚の中。『杜子春』の隣の“それ”を手取る。

ペラペラとめくって、そのページを開いた。

そこに書かれた文字。

他の人が見ても、多分何の事か分からない。

本好きな人が見たら、「本に落書きするなんて」と怒るかもしれない。

い。

でもそれは、あたし達にとって代え様のない“2冊”の片割れであ

る証。

そこに書かれたのは、彼と交わした誓いの言葉。

“それ”を見つめている内に、胸の中の蛇がその鎌首を収めてい

く。

そう。

あたし達の真実は、確かにここにある。

本を閉じ、胸に抱く。

薄く目を閉じ、思う。

明日、彼にあったならいつも通り、おはようと言おう。

そして、いつも通り、いっしょに学校に行こう。

それで、みんな元通り。

「大丈夫……大丈夫……」

あたしは“それ”を抱き締めながら、自分に言い聞かせる様に呟い

た。

「馬鹿ね」

開口一番、そう言われた。

「馬鹿だよ」

返す言葉もない。

「お前、ホントにバカな」

こいつに言われるのは非常に癪に障るが、本当の事だからどうしようもない。



ここは僕の家の、僕の部屋。その、大して広くもない中に僕をいれて四人がひしめいている。少々、いや、大変に息苦しい。

今日の夕方、里香に置いてきぼりを食った僕が一人寂しく家まで帰ってくる、そこにみゆきと司、そして余計な事に山西までが押しかけてきた。

三人が三人、今日の事態を知って心配して来たらしい。

今の心情的にはつきり言っておりがた迷惑だったけど、心配して来たと言われた以上、そう無碍にする訳にも行かない。

しかし、部屋に上がらせたのはいいが、そこでしょっぱなから吊し上げを食らう事になった。

まず、事の経緯を説明する事を求められた。

正直、思い出すのも嫌だったが、皆は容赦なかった。その執拗な追及に屈して、とうとう洗い浚い吐かせられてしまった。

その後にかけていたのは、沈黙だ。

三人とも、何も言わずに僕を見つめてきた。

よく「冷たい視線」と言う表現があるが、そんな生易しいもんじやなかった。正しく、「絶対零度の視線」と言うやつだ。部屋の体感温度が、間違いなく2、3℃下がった。

お茶とお菓子を運んできた僕の母親の視線まで、心なしか冷たかった様に思う。

そんな息もつまる様な沈黙の後、襲ってきたのが先の三人による「馬鹿」の連続コンボだったのだ。

「前から馬鹿だとは思っていたけど、ここまで真正の馬鹿だとは思わなかったわ」

みゆきが溜息をつきながら頭を振る。

「そんなに馬鹿馬鹿言うなよ。これでも結構凹んでんだぞ」

僕は、半分涙目になりながらそう抗議する。

だけど、

「そう言うの、『後悔先に立たず』って言うのよ!!馬鹿!!」

などとバツサリ切って捨てられた。って言うか、また馬鹿って言いやがった。

「司、何とか言ってくれよ!!」

と、司に助けを求めると、

「さすがに擁護出来ないよ。裕一」  
こっちもけんもほろろだ。

全く、四面楚歌とはこういう事を言うのだろう。さっきの里香の態度で、大概十分過ぎるダメージを受けているのに、こいつらと来たらその傷口に入念に塩をすり込んでくれやがる。

「しかしなあ……」

そんな僕の様子を面白そうに見学していた山西が、ふと真顔になつて言う。

「えらく抜け目のない子だな。その如月蓮華つての」

その言葉に、みゆきと司も相槌をうつ。

「本当。頭の良さなら里香に匹敵するかも」

「うん。裕一が相手するには、ちよつと荷が重すぎるんじゃないかな」

何だそれ。それって暗に僕が馬鹿だつていつてないか？ブルータス……じゃなかった。司、お前もか。

「でも、このままじゃマズイよね……」

「だよね……。このままじゃ裕一、ズルズルペースに巻き込まれて、その気もないのに既成事実を重ねられそうだもんね……。つてあ、いや、そういう意味じゃ……!!」

口に出してからその言葉の意味する所に気づいたのか、司は顔を真っ赤にして弁解する。つて言うか、ペースに巻き込まれて既成事実つてなんだ!?!人をさかりのついた犬みたいに言うなよ!!

「でもよ、案外これつて、良い機会なんじゃね?」

茶菓子の煎餅をバリバリ齧りながら、山西が言う。

「良い機会つて、何がだよ?」

「お前と里香ちゃんの関係さ。そもそもお前みたいなのが、里香ちゃんみたい娘とつきあつてんのが間違いなんだ。この際、キツパリと別れてその蓮華ちゃんとかくつついた方が里香ちゃんの将来のため……ガモツ!?!」

皆まで言う前に、その口に煎餅を数枚まとめて突っこんでやった。呼吸が出来ないらしく、のたうち回って悶絶しているが知った事か。

全く、山西こんな奴にまで好き勝手言われるなんて、僕の人生最大の汚点だ。

「とにかく、今後はあの娘の誘いには絶対に乗らない事!!」

みゆきが、僕にビシツと指を突きつけながら言ってくる。

「……分かってるよ……」

「分かっているつもりで、はまっちゃったんでしょ!?今回は!!」

「そ……それは……」

グウの音も出ない。

「だから、これからは如月蓮華には一切関わらない事!!絶対に、どんな理由があつたって、近づいちゃ駄目」

「……んな事言つたって、向こうから来るんだぞ……」

「大体、どんな時に来るのか見当つくでしょ!?これだけ付き纏われれば!!」

「ま……まあ……」

おずおずと頷く、僕。

「だったら、先手をとって回避する!!いい!?繰り返して言うけど、絶対に虎穴に入らずんば……とか思っちゃ駄目だからね!?相手は自分より頭がいい事をしつかり自覚しときなさい!!でないと、本当に里香との仲、裂かれちゃうかもよ!?!」

里香との仲を裂かれる?

冗談じゃない!!そんな事絶対に御免だ。

でも、蓮華あいつの立ち回りを見ると、そんな事在り得ないと言う自信が持てなくなりそうなのも、また事実だったりする。それほど、今日の出来事は僕の心胆を寒からしめていた。みゆきの言葉に、僕は水飲み鳥の様にブンブンと首を振る。

そんな僕を見て、また一つ溜息をつくともみゆきはパンパンと手を打った。

「じゃあ、今日の話はお終い。もう遅いし、お開きにしよう」

やっと、この針の筵から開放される。僕はやれやれと息をついた。

「裕一、明日ちゃんと里香ちゃんと仲直りしてね」

空になった湯飲みを御盆の上に乗せながら、司が言う。

「ああ、分かっている」

「裕一、ぐれぐれも」だからね？」

すかさず釘を刺してくるみゆき。

「分かっているって!!」

そう言つて、僕は今日何度目かも知れない相槌をうった。

ちなみに、その頃山西は口に煎餅を詰めたまま、ピクピクと部屋の隅で痙攣していたけど、僕を含め気にする者は誰もいなかった。

皆が帰った後、僕は一人部屋の中でやっと訪れた開放感に浸っていた。

気がつくくと、窓の外にはもうすっかり夜の闇が落ちている。カーテンを閉めようと思ひ、立ち上がる。窓に近づくと、闇の中に明りの灯った町並みが浮かんで見えた。

ふと、今日の放課後の里香の顔が目には浮かぶ。

僕にすら見せた事のない、寂しげな顔。そんな顔を、僕は彼女にさせてしまったのだ。今更の様に、後悔の念が頭をもたげる。今日、この薄闇の中を、彼女は一人で無事に帰れただろうか。

途中で、具合が悪くなったりしなかっただろうか。

柄の悪い連中に、絡まれたりしなかっただろうか。

こんな事を言ったら「子ども扱いするな」と怒るだろうが、心配なものには仕方がない。

どうして、こんな事になってしまったのだろうか。

原因は確かにあの如月蓮華である事に間違いはないのだが、こんな事態にまで陥ってしまったのは、皆に散々言われた様に僕の浅はかな考えのせいだ。考えれば考えるほど、自分の馬鹿さ加減が身に染みてきた。何か、さつきまで散々馬鹿馬鹿言われていたのも、むしろ加減されてたんじゃないかって気までしてくる。

(そもそもお前みたいなのが、里香ちゃんみたいな娘とつきあつてるのが間違いないんだ)

さつきの山西の言葉が、耳に蘇ってくる。

あいつの言う事も、一理あるのかもしれない。こんな下らない事で里香を傷付けてしまうなら、いっそ……。

そこまで考えて、僕はブンブンと頭を振った。

何を馬鹿な事を考えてるんだ!!

約束したろう!!里香と!!

ずっと一緒にいるって!!

決めただろう!!

彼女を守って生きていくって!!

僕は本棚に突進すると、一冊の本を手にとった。

その表紙をジツと眺め、ペラリとページをめくる。

しおりを挟んであった“その”ページが、一発で開く。

そのページには、その本に元々印字してあったものとは別の一文字が書き加えられている。

他の人が見ても、多分何の事か分からないだろう。

本好きな人が見たら、「本に落書きするなんて」と怒るかもしれない。いい。

でもそれは、僕達にとって代え様のない“2冊”の片割れである証。

そこに書かれたのは、里香と交わした誓いの言葉。

“それ”を見つめている内に、胸の中のざわめきが収まっていく。

そう。僕達の真実は、確かにここにある。

本を開いたまま、窓から里香の家の方角を眺める。

明日、里香にあつたら、一番に「ごめん」と謝ろう。直ぐには許してくれないかもしれないけど、許してくれるまで謝ろう。そして、いつも通り、いっしょに学校に行こう。それで、みんな元通りだ。

「大丈夫……大丈夫!!」

僕は“それ”を手にしたまま、自分に言い聞かせる様に呟いた。

続く

―想い歌―・⑬

『♪……君は王女 僕は召使い……♪』  
灯りが落とされ、常夜灯だけになった部屋の中に、微かな歌声が響く。

薄暗い自室の中、如月蓮華は卓上のPCから伸ばしたヘッドフォンを耳につけ、その“歌”を聴いていた。

机の上に投げ出された指が、時折トントンとリズムを刻む。

口の中で歌を口ずさみながら、如月蓮華は今日の首尾を思い返していた。

どうやら、事は万事思った通りに進んだらしい。

どうしてどうして、秋庭さんも所詮は一人の乙女ということか。

好きな男の事は、それなりに気になるものらしい。

それにしても、わざわざ自分から“はまり”に来てくれるとは思わなかった。

全く、ありがたい事だ。

それにしても、あの馬鹿達のお陰でその場に入れなかった事は残念でならない。

もしその場にいれば、そこで“どどめ”を刺す事も出来ただろうに。

けどまあ、それはいい。

その機会はこれからいくらでもある。

精々、“残り”の時間を大事にすればいい。

「……先輩、もう少しですよ……」

薄い唇がポソリと呟く。

そして――

「♪……君を守るその為ならば 僕は悪にだってなつてやる……」

♪

薄暗い部屋の中、そのフレーズを口にしながら、如月蓮華は冷たく

微笑んだ。

昏い。

昏い。

夜闇の様な笑みだった。

キイキイ キイキイ

錆びの浮いたペダルが、気の重たそうな音を立てながら回る。まるで、今の僕の心を代弁しているかの様だ。僕は今、いつもの登校路の緩い坂を自転車を押しながら登っていた。

里香とは昨日、あんな別れ方をしてそのまんまだ。実に情けない話だが、昨夜は怖くて電話をかける事も出来なかった。

こんな事で、今日仲直り出来るのだろうか？

そんな不安を抱えてるせいかな、通いなれている筈の坂道がいつもよりきつく感じる。いや。きついのは坂ではない。足が重いのだ。

この先のカーブを曲がると、いつもの里香との合流地点だ。いつもなら心躍らせて登る筈のその坂を、今日の僕はひたすらノロノロと登る。あのカーブの先で、彼女は待つていてくれるだろうか。ひよつとしたら、昨日の事をまだ許してくれてなくて、僕を置いてとっくに学校に行ってしまったりしているかもしれない。

そんな事を考えると、どんどん不安が募り、それに比例して足もどんどん重くなっていく。まるで、鉛の入った靴でも履いてる様だ。それでも、歩いている以上、どうしたって終わりは来る。

僕はいつしか、すっかりカーブの手前まで着いてしまっていた。

僕はしばし躊躇したが、結局は腹を据えた。どうせ、この道を通らなければ学校にはいけないのだ。

それに、昨夜決めたではないか。里香にあつたら、一番に「ごめん」と謝ろうと。直ぐには許してくれないかもしれないけど、許してくれるまで謝ろうと。

それが、今の僕達の関係を修繕する唯一の手だ。

僕達の間に来たひび割れはまだ浅い。修繕は容易な筈だ。逆に、今逃げてしまえば、それは決定的な亀裂となってしまう。そんな事

は、絶対に避けなければいけなかった。

僕は大きく息を吸い、腹にためてから、ゆっくりと吐いた。

そして自分の両頬をパシパシと叩くと、「よしっ!!」と気合を入れる。

一拍の間。そして、僕は一気にカーブを曲がった。

果たして、その先に――

里香はいた。

「おはよう」

目を合わせた途端、里香は何でもないかのようにそうやってきた。まるで、いつもと変わらない調子で。

「お、おう、おはよう」

釣られて、思わず僕も言う。

「遅かったね。早く行こう。遅刻しちゃうよ」

里香が本当に何でもない事のように言うものだから、僕もつい「おう、じゃあ、急ぐか」なんて言ってしまうそうになる。

一瞬、この調子なら「あの事」には触れないで済むんじゃないか？なんて考えが浮かんだけど、僕はそんな自分の考えを打ち消した。

昨日、馬鹿な真似をして里香を傷つけたのは僕なのだ。

その僕が、里香に甘えて問題をうやむやにするなんて、許される筈がない。

僕は自転車のスタンドを立てると、里香の前で気をつけをした。

「？」と言った顔で僕を見る里香。

そんな里香に向かって僕は、「すいませんでしたー!!」と思いつきり頭を下げた。

「昨日は馬鹿な真似をしてしまって、本当にすいませんでした!!二度とあんな真似はしません!!許してください!!」

頭を下げたまま、僕は一息にそう言った。

「……………」

里香は何も言わない。

僕はその体勢のまま、彼女の答えを待つ。



「……………」

「……………」

流れる沈黙。

だんだん、お辞儀の姿勢が疲れてきた。だけど、里香の許しが出るまでは頭を上げない。

僕は、そう決めていた。

「……………」

「……………」

反応は、一向に返ってこない。何だか腰がメリメリ言ってきた。額から、汗がダラダラと流れてくる。

それでも、頭を上げる訳には行かない。

「……………」

「……………」

続く沈黙。

もう、腰が限界だ。このまんまじゃ、腰が落ちて尻餅をついてしま  
う。

冗談じゃない。

里香の前で、そんな醜態は御免だ。

僕が汗だくで歯を食い縛ろうとした、その時――

「ぶっ!!」

唐突に、里香が吹き出した。

「あははははは、裕一、何?その必死な顔。おっかしい!!」

そう言って、腹を抱えて笑っている。僕は啞然として、里香を見つめた。

「あの……………」

「何?」

笑いながら訊き返してくる、里香。

「怒って、ないのか…………?」

「何を?」

「その……………昨日の、弁当の事…………」

その言葉に、里香は笑うのを止めると僕をジッと見つめてきた。

「……怒ってるよ？」

その言葉に、僕の心臓が飛び上がる。だけど――

「でも、いい」

次に飛んできた一言が、クッションとなつて僕の心臓を受け止めた。

「……今、何て……？」

確かめる。

「いいって言った。もう、いい」

里香は澄ました顔でそう言った。

「……許して、くれるのか……？」

「許さないよ。でも、いい」

訳が分からない。

でも、里香の顔に怒りの色はなかった。

「ほら、早く行こう。本当に、遅刻しちゃう」

そう言つて、僕に手を差し出してくる。

「お、おう」

内心、僕はホツとしていた。

どうやら里香は、昨日の問題を保留……と言うか棚上げにしてくれるつもりらしい。

『許さないけど、もういい』

つまりはそういう事なのだろう。

僕は差し出された手を掴もうと、自分の手を上げる。

この手を取れば、みんな元通り。

僕の手が、里香の手に近づく。

二人の手が触れようとした、その時――

「そうは烏賊の真薯揚げーっ!!」

そんな声と共に、伸びてきた手が、今まさに里香の手に触れようとしていた僕の手を横から搔っ攫った。

「んなっ!?!」

驚く僕。

里香も目を丸くしている。

「あくん。先輩の手、暖かい♡」

そんな事を言いながら、僕の手に頬ずりしているのは誰だろう、如月蓮華だった。

「な……何だよ、お前!!何でこんな所に……!!?」

「決まってるじゃないですか。先輩と一緒にラブラブ登校するためです」

その答えに、僕は絶句した。

こいつ、僕と一緒に登校するためにわざわざこの道まで遠回りして来たって言うのか!?

馬鹿だろ!!いくらなんでも!!

「何なんだよ!?!お前!!ホントに馬鹿なのか!?!」

「あく、ひつどく!!少しでも愛しい男ひとと一緒にいたいって言う乙女心をそんな風に言うなんて」

「うっせえ!!離れる!!遅刻するだろ!!」

「先輩と一緒になら、遅刻してもいいです」

妙に艶っぽい声を上げながら絡み付いてくる蓮華を必死に引き剥がそうとしながら、僕は里香に向かって言った。

「ちよ、里香、違うんだって!!これは、その……」

「秋庭さん、とつくにいませんよ」

「……へ……?」

そう。そこにはもう、里香の姿はなかった。

「里香……」

呆然と佇む僕の耳に、遠くで授業開始のチャイムが響いてきた。

「——っ!!やべえ!!遅刻だ!!」

僕が慌てて自転車にまたがろうとすると、

「えへへ。じゃー先輩、行きましょう」

いつの間にか、荷台に乗った蓮華がニパリと笑いながらいけしやあしやあとそう言った。

「何やってんだよ!?!お前!!降りろよ!!」

「いやです」

「ぶざけんな!!マジで遅刻だぞ!!どうするんだよ!？」

「どうも(うも、急いで行くしかないんじゃないですか?それとも、いつそのままサボってデートでもしまししょうか?あたしはぜんぜん構いませんけど」

いくら喚いても、柳に風だ。

蓮華は微塵も、その態度を崩さない。

ついでに、荷台からも降りない。

くじけそうになりながら、それでも僕は最後の力を込めて怒鳴った。

「どけよ!!そこは里香の場所なんだ!!」

その瞬間、蓮華の顔から表情が消えた。

能面の様な顔が、人形の様な暗い目が、僕を見据える。

「——!?!」

怖気が走り、僕は出かけていた言葉を飲み込んでしまった。

でも、それは一瞬。

その顔に、ニパリとした笑みを戻すと、蓮華はキツパリとこう言った。

「じゃあ、今日からこの場所、あたしが貰います」

僕は、全身の力が抜けるのを感じた。

結果。

その日は、前日にもまして最悪だった。

あの後、結局僕は頑として荷台から降りない蓮華を乗つけたまま、登校する羽目になった。

お陰で、朝から鬼大仏に遅刻だの不純異性交遊だのと怒鳴られるわ、戎崎がとうとう秋庭を捨てて如月に乗り換えたのだ、如月といちやついてたせいで遅刻したのだと言った噂が飛びまぐるわで、僕は全学校関係者から吊し上げを食らっている様な気持ちだった。

そして、肝心の里香とはその後も連絡とれず。

……休み時間、僕はトイレの個室でちよつと泣いた。

「……先輩、ちよつと」

その日の昼休み、沢山の同級生に囲まれて、質問攻めに会いながら弁当を食べ終えた秋庭里香は、新たにかけられてきた声に些かウンザリしながら顔を上げた。しかし、その声の主が吉崎多香子だと知ると、少なからずホツとして席を立った。

「何？吉崎さん」

吉崎多香子が秋庭里香を引っ張って来たのは、あの屋上への踊り場。学校の中でも人気のない場所だった。そんな所に自分を連れてきた吉崎多香子の真意を図りかね、秋庭里香は彼女に向かってそう問うた。

すると、吉崎多香子はくるりと秋庭里香に向き直り、こう言った。

「先輩。今日の噂、本当ですか？」

いきなり、何をつまらない事を聞いてくるのだろう。

吉崎多香子はこんな噂に興味を持たないと思っていた秋庭里香は、少なからず失望した様な気持ちで答えた。

「知らない」

しかし、その答えと秋庭里香の表情から、噂がまだ噂の域を出てない事を察した吉崎多香子は、秋庭里香に詰め寄る様にして言った。

「先輩、これ以上如月蓮華の娘に関わっちゃ駄目です!!先輩も、戎崎先輩も!!」

今までに見た事もないほど真剣な顔でそう言い迫ってくる吉崎多香子に、少なからず驚きながら、秋庭里香は問い返す。

「吉崎さん、どうしたの？如月蓮華の娘が、どうかしたの？」

訝しがる秋庭里香に、吉崎多香子は昨日自分が見た事を、包み隠さず話した。

昨日の放課後、なぜ如月蓮華が自転車置場に現れなかったのか。

その時、ここで何が起こっていたのか。

吉崎多香子の言葉を聞く内に、秋庭里香の顔にも驚愕の表情が広がっていく。

そして最後に、吉崎多香子は念を押す様にこう言った。

「とにかく、如月蓮華の娘は何処か普通じゃありません!!もう絶対に関

わからない様に!!戒崎先輩にも言っておいてください!!いいですね!」  
「うん、うん……」

その迫力に押される様に頷く、秋庭里香。それに安堵したのか、吉崎多香子は一息つくくと教室に戻っていった。

一方、後に残された秋庭里香は、何か思案に暮れるかの様にその場に佇んでいた。

……いつまでもいつまでも、佇んでいた。

この時、吉崎多香子は自分が致命的なミスを犯した事に気付いていなかった。

それは、この事を秋庭里香だけに伝えてしまった事。

そして、その秋庭里香の性格を、考慮に入れていなかった事である。

……事態はゆっくりと、回り始めていた。

続く

―想い歌―・⑭

— 14 —

「♪君は王女 僕は召使い♪」

綺麗な夕焼けに照らされる、放課後の屋上。誰もいないその空間に、涼やかな歌声が流れる。

歌の主は如月蓮華。

彼女は転落防止用のフェンスの上に座り、足を外に投げ出して歌っていた。

先にも言った様に、場所は屋上。投げ出された足の先には当然、何もない。しかし、そんな事は意も介さず、如月蓮華は朱に染まる空を見上げながら歌っていた。

宙に浮かんだ足をトントんとフェンスに打ちつけてリズムをとりながら、如月蓮華は歌い続ける。  
と、

「歌、上手なんだね」

不意にかけられた声に、如月蓮華は歌うのを止め、後ろを振り向いた。

「だけど、そんな事してると、危ないよ」

屋上を通る風に、長い黒髪が舞う。

「少し、話したい事があるの」

降り注ぐ朱光の中、如月蓮華を見上げる様に立った秋庭里香が、静かな声でそう言った。

それより少し前、一年三組の教室では吉崎多香子が下校準備をしていた。

教科書やノートを鞆に詰め、さて帰ろうと廊下に出たところ、その廊下で困った様にウロウロしている一人の女生徒が目に入った。知らない顔ではない。一年二組の大森芳子だ。吉崎多香子とは家が割合近く、小学校の時からクラスこそ違えど、同じ学校に通い続けてい

る腐れ縁の仲でもある。

「何してんの？あんだ」

吉崎多香子がそう声をかけると、大森芳子は初めて気がついた様にこちらを向いた。

「あ、多香子く。ちよつと、聞いてよ」

大森芳子は情けない声を出して、話し始めた。

彼女が帰ろうとしていた時、教室に顔を出した担任の田島に声をかけられたのだという。彼は教室に入ってくるとキョロキョロし、如月蓮華はもう帰ったのかと聞いてきた。教室の中に姿がなかったのも、多分そうなんじゃないですかと答えたのがまずかった。田島はそれならと彼女に話をふってきたのだ。

何でも、如月蓮華に渡す書類（転校関係の何からしい）を、彼女の家に届けて欲しい、との事だった。何であたしが、と大森芳子が訊くと、彼女の家は君の帰り道の近くだから、と住所を書いた紙を書類と一緒に渡されたらしい。

その紙を見せてもらうと、なるほど。大森芳子の家と学校の間辺りの住所だ。

「参っちゃったよ」

と、大森芳子は溜息をつく。

何がそんなに「参った」なのかを訊くと、「だって、あたし、あの娘苦手なんでもん。」などと言ってきた。

確かに、生徒の間における如月蓮華の評判は良いとは言えない。仲の良いカップルの片割れを略奪愛しようとしている事に対して、道義的な憤慨を抱く者もいるが、それ以上にその普段の所作から滲み出る得体の知れなさを気味悪がる声が多かった。

無理もないかもしれない、と吉崎多香子は思う。

そもそも、学校という集団生活の空間において、一人の人間がその本質を隠し通すのは至難の業だ。何しろ、何百人と言う人間の目に毎日晒されるのだ。遅かれ早かれ、多かれ少なかれ、その人間の本質は知れていく。

そしてその暴かれた本質を通して、同じ方向性の本質を持った者同



士は友人やカップルとなり、全く反対の本質を持つ者同士はただの他人となっていく。学校というのは、そうやって出来た無数のコミュニケーションの塊だ。つまり、その本質が同調を得難いものであればあるほど、その人物は学校の中に出て来た無数のコミュニケーション体の中から弾かれ、孤立していく。

かつて、そう言ったコミュニケーションの形成に入念だった吉崎多香子は、その事を良く知っていた。

普通に隠そうとしていてさえ、そうなのだ。

それが、如月蓮華に至ってはそれを隠そうすらしない。むしろ、その特異性をさらけ出し、自分の武器として使っている。昨日の、瀬良姫子達の化け物でも見る様な目が思い出される。あの類の視線を、如月蓮華は自ら望んで受けているのだ。

如月蓮華は、孤独だった。

そして、それを凌駕するほどに、強かった。

「あくん。もう、どうしよう〜!？」

真剣に悩んでいる、大森芳子。

まあ、あたしには関係ない事だ。とそのままスルーしかけた吉崎多香子だが、ふとその足が止まる。

自分と大森芳子の家は近い事は先に言った。と言う事は、その役目は自分でも担えると言う事である。

一つの考えが、思いつく。

それが頭に浸透すると同時に、吉崎多香子は大森芳子に向かって手を伸ばしていた。

「それ、ちょうだい」

「え?」

「あたしが、届けてあげる」

そう言つて、吉崎多香子は微笑んだ。

「……何しに来たんですか? 秋庭さん」

肩越しに秋庭里香を見下ろしながら、如月蓮華は言う。

「言ったでしょ? 話したい事があるの」

その視線を真っ直ぐに受け返ししながら、秋庭里香も言う。

「話したい事?」

クルリ

フェンスの上で、平行棒でもやる様に手で身体を反転させると、如月蓮華はポンと3mの段差を飛び降りた。

「だから、危ないよ。落ちたらどうするの?」

「大丈夫ですよ。慣れてますから」

そう言って、着地の態勢から立ち上がると如月蓮華はパンパンと制服についた埃を掃う。

「……で、話って何ですか?わざわざそっちから来なくても、今から自転車置き場に行くつもりだったんですけど。あ、それともひよつとして……」

如月蓮華、両手を合わせて目をキラキラさせる。

「敗北宣言ですか?とうとう戎崎先輩を渡す気になったとか……」

「あたし、真面目に話してるんだけど……」

「心外な!あたしはいつも真面目です!!」

そんな、どこまでが本気か分からない如月蓮華の視線を、しかし秋庭里香は真正面から受け止める。

その様子に、如月蓮華の顔からもふざけた調子が消えていく。代わりに張り付くのは、あの能面の様な、無表情な顔。

「……何なんですか?一体……」

「歌、ほんとに上手だった。習ってたの?」

「習ってないですよ。独学……って程でもない。下手の横好きってやつです」

「聞いた事ない歌だった。何て歌?」

「『悪ノ召使』……ボカロの歌ですよ」

「ボカロ?」

「ボーカロイド……。人の代わりに歌ってくれるPCソフトです。知らないんですか?」

「パソコン、持ってないから」

「はあ、そうですね」

「声楽部とか、入ればいいのに」

「嫌いなんですよ。群れるの。ウザッたいから」

「もったいないなあ……」

「余計なお世話です。何ですか？世間話しにきたんですか？」

苛立つ如月蓮華を見つめると、秋庭里香は静かに、だけど声に力を込めて言った。

「これ以上、裕一に付き纏わないで」

「！」

その言葉に、如月蓮華は目を細める。

「以外ですね。秋庭さんがともあろう人が、そんなそこらの一般女性みたいな面白味のない台詞、口にするなんて」

その嘲る様な調子の言葉にも構わず、秋庭里香は話を続ける。

「別に、今の話を面白くしようなんて思っていないし」

「そうですか？」

「聞いたよ。昨日の放課後の事……」

細まった目が、ますます細くなる。薄い唇から、ククツという笑い声が洩れた。

「ああ、アレですか？誰から聞きました？そういうえば、一人見学者がいたつけ。あの娘、秋庭さんと仲よかったですよね？そこですか？漏洩元は」

ククツツと笑う如月蓮華。

その様子に、秋庭里香は眉をひそめる。

「……本当なんだ」

「本当ですよ？それがどうかしましたか？何か悪い事でも？振りかかった火の粉を払っただけです。被害者なんですけど？あたし」

「悪いとは言わない。だけど、やっぱり裕一には近づかないで」  
重ねられる言葉。

如月蓮華が、秋庭里香をじつと見つめる。

「……その心は？」

「やりすぎだよ。何もかも。そんな事してたら、あなたの周りには誰もいなくなっちゃう」

「構いませんよ。言ったでしよう？群れるのは嫌いだって」

「あなたはそうでも、裕一はそうじゃない!!」

語気を強めた言葉が、如月蓮華を打つ。

「あなたが側にいたら、裕一からも人が離れていつちやう!!それは駄目!!裕一はこれからもつと沢山の人と関わって、友達になって、世界を広げていくの!!それを、あなたは一人で無茶苦茶にしちやう!!」  
投げ付けられる言葉を、如月蓮華は全て受け止めた。しかし、その能面の様な表情はピクリとも動かない。

「裕一の事、好きなんでしよう?」

「……………」

「だったら、分かるよね?」

「……………」

「それでも離れないっていうなら、あたしが許さない」  
突きつける、最後通告。

二人の間に、しばしの間流れる沈黙。

それがどれ程の間だったのかは、分からない。

いつしか辺りを朱に染めていた夕日は山の陰に隠れかけ、屋上を薄い夜闇が覆い始めていた。

と、

「ク…………クク…………」

続いていた沈黙に、異音が混じる。

「…………?」

怪訝そうな顔をする秋葉里香。

その彼女の前で、如月蓮華の肩が震えていた。一瞬、泣いているのかとも思ったが、そうではない。

「クク…………ククク…………クツクツクツクツ…………」

笑っていた。

その細い肩を震わせ、如月蓮華は笑っていた。

「ククク…………何ソレ?心配してるって訳?戎崎先輩の将来を…………?  
よりもよって、"アンタ"が…………?」

沈みかけ、色の濃くなった陽光を背に受けたその顔は、暗く沈んで

表情を読み取る事は出来ない。けれど――

「クク……ククク……」

歪な笑みの形に歪んだその口だけが、闇に沈んだ顔の中で妙にハツキリと見えた。

そして――

「アハ!!アハハハハハハツ!!」

――闇が、弾けた――

その頃、吉崎多香子は住所を片手に如月蓮華の家を探していた。

「え……と、多分この辺り……」

と、その目が一軒の木造建屋の貸家に止まる。

表札には、「如月」の文字。

「……ここか」

正直、自分が何をしたいのかよく分からない。

ただ、ここになれば、如月蓮華の事が何か分かるかもしれないという漠然とした思いがあった。

じゃあ、如月蓮華の事を知ってどうしたいのかと問われれば、やっぱりそこに明確な答えはない。

秋庭里香のため？

戎崎裕一のため？

それともその二人のため？

馬鹿げてる。

自分が、あの二人にそうまでしてやる義理などあろうか？

昼休みにした、あの忠告で十分ではないか。

そうは思うものの、吉崎多香子の足は止まらない。疑問符を繰り返す頭に反して、足はスツスツと進んでいく。家の玄関は、もう目の前だ。

吉崎多香子は腹を決めた。

どうせ、請け負った仕事を放り出す訳にはいかないのだ。入ってしまえば、自分が何をどうしたいのか、見当くらくらいつくだろう。そう自分を納得させ、吉崎多香子は目の前の戸に手をかけた。

ガララ……

古びた引き戸が、重い音を立てて開く。

「ごめんくださいーい」

薄暗い、家の中に呼びかける。

しばしの間。

もう一度叫ぼうかと思ったその時、家の奥の方から「はいーい」という声が返ってきた。

やがて、出てきたのは一人の女性。

年恰好から察するに、如月蓮華の母親だろう。

「どちら様？」

そう訊かれて、鞆の中から件の書類を取り出し、差し出す。

「如月さんの……えと、〃友達〃です。先生からお使いを頼まれてきました」

その言葉に、如月蓮華の母親の顔が綻んだ。

「まあ、蓮華の……」

嬉しそうな声で言うその様を見て、吉崎多香子はある種の手ごたえを感じた。

書類を受け取りながら、如月蓮華の母親は申し訳なさそうな顔をしながら言う。

「ごめんなさい。蓮華、まだ帰ってきてないの。良かったら、上がって待っていてくれない？もう少しで帰ってくると思うから」

予想通りの言葉だった。

「そうですか？じゃあ、お言葉に甘えて……」

そう言つて玄関に上がると、「さあ、どうぞ」と来客用らしいスリッパが差し出された。

如月蓮華の母親が、心から歓迎している事がよく分かる。娘に友達が出来たという事が、よっぽど嬉しいらしい。後ろめたい気持ちもチクリと胸を刺したが、とりあえず気付かないふりをした。実際、途中で如月蓮華本人が帰ってきたら少々面倒な事になりそうだが、その時はその時である。

これも全てはうら若き恋人達の平穏を護るため……と言う事にし

ておこう。

全くもつて、柄ではないが。

いずれ、この貸しはキツチリ払って貰おう。

心にそう決めながら、吉崎多香子は案内されるまま廊下を歩く。

よく掃除が行き届いているのか、家の見た目のわりに綺麗な廊下がスリッパに擦られる度、キュツキュツと音になる。その代わりの様に家の壁からは、見た目通り古い木の匂いが微かにした。

やがて通されたのは、小さな客間。

そこに入ると、隣にもう一つ部屋がある。

客間よりもこじんまりとしたそこは仏間らしく、仏壇が置いてあった。

何気なく見ると、その仏壇にはまだ真新しい遺影が飾られている。

(あ、誰か最近、亡くなったんだ。)

そんな事を思いながら、その遺影を見る。

——瞬間、吉崎多香子は硬直した——

「アハ、アハハハハ、アハハハハハハ!!」

薄暗い屋上に、甲高い笑い声が響き渡る。

何かのタガが外れたかの様に笑うその様を、秋庭里香は茫然と眺めていた。

「アハ、ハハ、あー可笑しい……」

一頻り笑うと、その眦に浮かんだ涙を指で拭い、如月蓮華は秋庭里香に向き直る。

「……何が可笑し……!!」

言いかけた言葉が、思わず飲み込まれる。

如月蓮華の眼差しが、変わっていた。

それは戎崎裕一に見せる軽い小娘のものでもなければ、先ほどまで見せていた色のない、無表情な眼差しでもなかった。それは、暗い、どこまでも暗い焰に彩られた眼差し。そこに込められるのは、紛れもない憎悪の念。

秋庭里香の背筋に、怖気が走る。

如何に秋庭里香と言えど、その生きてきた時間は短い。いくら密度が高いとは言え、経験した事のない事象はいくらでもあ

る。  
妬みでも嫉みでもない。

そんな薄っぺらな感情など、ものの数に入らない。

明確な、憎悪。

それを向けられるのは、彼女の人生においてまさに初めての事。

冷たい雫が頬を伝うのを感じながら、秋庭里香は乾いた口で唾を飲み下す。

と、如月蓮華の左手が上がり、サイドで纏めていた髪へとかかった。  
シュツ

鋭い音と共に髪を纏めていたりボンが引き抜かれ、長い髪がバサリと広がる。薄闇の中、暗い陽光を受けて烏の濡れ羽の様に輝くそれは、まるで黒い翼の様に見えた。

「あゝあ、もうヤメヤメ!!やーめたつと!!」

風に舞う髪を鬱陶しげに払いながら、如月蓮華は言う。

「つたく、折角人が幾らかでも傷つかない様になって気を使ってやってんのに、何で自分でぶち壊す様な真似するかなあ?」

「……どういう事?」

突然の豹変に驚きながらも、秋庭里香は問う。

「言ったままよ。大体、今まで何であたしが直接“アンタ”の所に乗り込んで行かなかったと思ってる?変じゃない?隣のクラスだつてのに」

「????」

混乱する秋庭里香に向かって、如月蓮華はズイと詰め寄る。その迫力に押され、後ずさる秋庭里香。

「自分を抑えるため。アンタとさしで向かい会っちゃあ、こういうるって分かってたから」

ドンツ

秋庭里香の背が、フェンスに当たった。その顔をかすめる様に腕が伸び、フェンスの金網をガシヤンと掴んだ。



「人の将来を心配する？アンタが？笑わせないで」  
己に向けられる憎悪の瞳に竦みそうになりながらも、秋庭里香は声を絞り出す。

「何を、言つて……!!」

絞り出そうとした声が詰まった。

フェンスを掴むのとは、反対の手が、秋庭里香の左胸をなぞっていた。

いや、なぞっていたのは胸ではなく――

「手術痕だよね？これ」

声のトーンを落として、如月蓮華は言う。

「!!」

その言葉に、秋庭里香は目を見開く。

「確認済みよ。この間、触った時」に

如月蓮華が、歪に笑う。心の底から、怖気を誘う笑い。

「ズンズン」にあるって事は、心臓だよね？九割方。」

胸に当てられた指が、ゆっくりとなぞる事を繰り返す。その感覚に、秋庭里香は思わず身を震わせた。

「病気は何？突発性拡張型心筋症？心室中隔欠損？それとも……」

そこで、如月蓮華は少し考える素振りを見せる。そして――

「『先天性心臓弁膜症』？」

パシッ

己の胸をなぞっていた手を、秋庭里香の手が払っていた。

「ビンゴ？」

払われた手を大きさにブラブラさせながら、嬉しそうに言う。

「手術、したんでしょ？どう？完治した？」

歪に歪んだ口が、歪んだ言葉を吐き出す。そこに満ちる悪意を隠す事無く。

「治ってないよね？だから、あんなに『大事に生きてる』んだよね。色んな意味で」

クツクツ、と笑う如月蓮華。絶句する、秋庭里香。

「じゃあ、訊くけど……」

如月蓮華の顔が、ぐっと寄せられる。耳朶に、吐息がかかる。それを酷く冷たく感じたのは、気のせいだろうか。

「訊くけどね……」

もう一度、言う。念を押すように。いたぶる様に。そして――

「アンタは、いつ『死ぬ』の?」

最後の言葉を、その口はゆっくりと紡いだ。

続く

―想い歌―・⑮

— 15 —

♪ ―君は王女

僕は召使い

運命分かつ哀れな双子

君を守るそのためならば

僕は悪にだってなつてやる ―♪

吉崎多香子は、硬直していた。

友達を装つて訪れた、如月蓮華の家。

通された客間の隣。

小さな仏間に置かれた仏壇。

そこに飾られた、真新しい遺影。

それに目を向けたまま、吉崎多香子は固まっていた。

脳内は、混乱の極み。呆けた様に立ち尽くし、ただ目の前の信じがたい事実を見つめるだけ。

無理もないかもしれない。

なぜなら、その遺影の人物に吉崎多香子は大いに見覚えがあつただから。

綺麗に磨かれたガラスの中に収められた写真。

そこに、穏やかな笑みを浮かべて写っている人物。

それは、誰あろう如月蓮華本人だった。

赤黒い夕焼けの中で、長い黒髪が風に舞う。

まるで、夜闇に羽ばたく魔物の様に。

バサバサと、虚ろに乾いた音を立てて。

暗がりに沈む顔。表情が分からない。

だけど、これだけは分かる。

彼女は今、笑っている。

「——アンタは、いつ『死ぬ』の?——」

耳に寄せられた唇が、もう一度その言葉を紡ぐ。

秋庭里香は何も言わない。

何も、言えない。

「10年?5年?それとも、もっと——」

バンツ

秋庭里香の手が、如月蓮華を突き飛ばす。

しかし、その身体はビクとも動かない。

「ケホ……あー、痛い。けど、やっぱり力、弱いねえ……?」

突かれた鳩尾をさすりながら、ほくそ笑む。

「そんなんで、戎崎先輩の将来の心配ってか?よくもまあ……」

クツクツクツ……

笑う。嘲り笑う。

「先輩の未来、台無しにするのはあたしとアンタ、どっちかしら?」

「……ツ!!」

長い髪の間から覗く、真っ黒い瞳。

それが、燃えている。

ゆらゆらと、揺らめく様に、暗く、冷たく燃えている。

「……アンタ『達』は、いつもそう……」

薄い唇が言葉を紡ぐ。

綺麗に、けれど残酷に。

「今生きてる人の……これから生きてく人の……何もかもをかつき

らっていつてしまう……」

その『真実』を、言葉に紡ぐ。

「心も、夢も、希望も、未来までも奪い去って、それで自分だけ消え

てしまう!!」

冷たい、そして切り裂く様な、叫び。

それが孕む憎悪が、暴風のように秋庭里香の心に吹きつける。

「……でもね」

カシャン

フェンスを掴んでいた手が、鈍い音を立てて外れる。

「……まだ、間に合う……」

フェンスから外れた右手が、秋庭里香の頬を撫でる。屋上を通る風に晒されていたせいかな。

それとも、もっと別の理由か。

それは、酷く冷たく感じた。

「そう。今ならまだ間に合う。今、アンタの呪縛さえなくなれば、我崎先輩の未来には、まだ充分に間に合う……」

薄闇に沈む顔。

パクパクと動く口だけが、やけにはつきりと見える。

「心配しなくてもいい。アンタが抜けた後の穴は、あたしが埋める。

あたしが先輩を支えてあげる……。だから……」

いつの間にか、その顔から嘲りの色が消えていた。

冷たい、ただ冷たい視線だけが、秋庭里香の心を射る。

そして――

「……『戎崎裕一』を『解放』しなさい」

秋庭里香の頬を撫でながら、如月蓮華は通告する。

まるで、罪人に判決を下す裁判官の様に。

だけど。

だけど――

秋庭里香は頷かない。

竦み上がる身体のせいかな。

せめてもの抵抗なのか。

それは分からない。

ただ、その様を見た如月蓮華は大仰な溜息をついた。

「……戎崎先輩とアンタがどんな『誓い』を交わしたのかは知らない。関係ない。興味ない。けど……」

スウと上がってきた、もう片方の手。それが、秋庭里香のもう片方の頬を包む。固定される顔。

まるで、逃げる事は許さないと言う様に。

「どう頑張ったって、『有限』の時間しかもたないアンタと、『無限』の未来を持つてる先輩と……」

翔る様に。

いたぶる様に。

言葉は続く。

「釣り合うと、思ってるの？ホ・ン・ト・ウ・に」  
それが、目の前の少女の心を確かに切り削っている事を確信しながら。

如月蓮華は言葉が続ける。

カタカタ……カタカタカタ……

フェンスが、小さな音を立てて震えている。

否、震えているのはフェンスではない。

震えているのは、それに預けられた小さな身体。

「秋庭里香の、小さな身体。」

「……どうしたの？寒い？」

わざとらしく。

白々しく。

瞳を歪ませながら。

「そうだね……。日も沈んだし、風も出てきた……」

そんな言葉とともに、秋庭里香の頬から冷感が消える。

「そろそろ止める？風邪でもひいたら、面倒だし」

捕えた獲物を啜り尽くした蜘蛛がそうする様に、如月蓮華が秋庭里香から離れる。

暗い闇に落ちていた顔が、ニコリと笑む。

「秋庭さんも、早く帰った方がいいですよ。何せ……」

そして如月蓮華は言う。

切り開いた傷口に、鈍い刃物を捻じ込む様に。

「二人の人間の未来より、〃大事な身体〃ですもんね」

「……!!」

そう言い捨てると、クルリと踵を返す。

そのまま、スタスタと屋上の入り口に向かって歩いていく。

もう、振り向きもしない。

やがて、その姿は入り口の向こうの闇の中へと消えていった。

微かな歌を、響かせながら。

秋庭里香は動かなかった。

否、動けなかったと言う方が正しいか。

カタカタと震える身体を、自らの腕でかき抱く。

寒い訳ではない。

そんな、単純な生理現象ではない。

心が、心の奥底が、戦慄していた。

ズル……ズルズルズル……

フェンスに預けていた背が下がっていく。

そのまま、力なく床に座り込む。

ポタ……ポタポタ……

床に投げ出されたスカートの上に、温かい水滴が幾つも落ちる。

両目から溢れるそれを拭う事もせず、秋庭里香は両手で顔を覆った。

「驚かせちゃった？」

「——っ!？」

唐突に後ろからかけられた声に、混乱の体にあつた吉崎多香子は飛び上がらんばかりに驚いた。

声の主——如月蓮華の母親は彼女の脇を通り、仏壇の前に座って遺影を手取る。

「この娘はね、鈴華って言うの……」

そう言つて、愛しげに遺影を撫でる。

「りん……か、ですか？」

「ええ……。あの娘の……蓮華の双子のお姉さんだったのよ……」

その言葉に、吉崎多香子は再び驚きに目を見開いた。

続く

―想い歌―・①⑥

— 16 —

―何か嫌な予感がしていた。

今日の放課後、いつもの場所に里香は来なかった。

最初は、今朝の事を怒っているのかと思った。

それなら、出てくるまで待とう。出てくるのを待って、今度こそ許してくれるまで謝ろう。

そう思い、僕は待った。いつまでも、いつまでも待った。だけど、いつまで待っても里香は出てこなかった。

一瞬、僕の目を盗んで帰ってしまったのかとも思ったけど、昇降口こを通らずに帰れる筈もない。

一体、どうしたのだろう。

ひよつとして、具合でも悪くしているのではないか。そう思って保健室にも行って見たが、やっぱりいいない。保健の先生にも聞いてみたけれど、今日は来ていないと言う。

そうこうしている間に、だんだんと日が暮れてきた。

だけど、里香の姿はない。

薄闇に包まれて行く校内で、僕の内に異様な不安感が頭をもたげて来ていた。

酷く、嫌な気持ちだった。

何かが。

何か良くない事が、起こっている。

そんな気持ちだった。

どんだん闇色に沈んでいく校内で、僕は必死に里香を探し回った。一つ一つの教室、職員室、図書室、体育館、果ては資料室やゴミ捨て場まで。

でも、その何処にも里香の姿はなかった。

残った場所は、ただ一つ。

屋上。



僕はそこを目指して、階段を上り始めた。

二階を過ぎ、三階も過ぎた。

そして、四階の踊り場に差し掛かった時――

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

どこからともなく、綺麗な歌声が聞こえてきた。

「？」

それに促される様子上を見上げる。

途端――

「あれえ？先輩、どうしたんですかあ？」

聞き覚えのある声が、頭の上から降ってきた。

♪――期待の中僕らは生まれた

祝福するは教会の鐘

大人達の勝手な都合で

僕らの未来は二つに裂けた――♪

「如月さん、お姉さんがいたんですか……？」

その頃、吉崎多香子はアルバムを見せられながら話を聞いていた。

「ええ……。とても……。とても仲の良い姉妹だったわ……」

そう言つて、如月蓮華の母親は手にした遺影を撫でる。

「本当に、そっくりですね」

アルバムをめくりながら、吉崎多香子は言う。

赤ん坊の頃から、鈴華と蓮華は、いつも一緒に写真に写っていた。その手は常に握り合わされ、その絆の強さを表しているかの様だった。

「そうでしょう。いくら一卵性双生児だからって、限度つてもものがあるわよね。あんまり似すぎてて、親のわたし達でさえ区別がつかないくらいだったわ。だから、ほら……」

クスクスと笑いながら、如月蓮華の母親はアルバムの写真を示す。

「鈴華は髪を右で結つて、蓮華は左で結う様にしてたの。そうやって見分けがつく様にしてくれたのよ」

そう言えば、如月蓮華はいつも左で髪を結っていた。なるほど、そういう意味があったのか。

と、そこで吉崎多香子はある違和感に気付く。

家族のアルバムや箒などの、そこにはあるべき人物の姿がない。

「……あの、失礼ですが、ご主人は……？」

その問いに、如月蓮華の母親は苦笑いを浮かべた。

「わたしね……離婚してるの。二人が小学生の時に」

「え!? あ、す、すいません……」

慌ててあやまるが、当の本人はどうと言う事もないと言う体で話す。

「気にしないで。世間じゃ、よくある事でしょ?」

「はあ……」

そうは言われても、気まずい感は否めない。それを誤魔化す様に、出されていたお茶を啜る。

「ただ、二人には可哀想な事をしたと思ってる……。鈴華は向こうが、蓮華はわたしが引き取ったんだけど、二人には酷く反対されてね。当たり前よね。生まれてからずっと一緒だったのを、大人の勝手な都合で裂かれちゃったんだから。蓮華なんか、分かれてから一年間、ろくに口も聞いてくれなかったわ……」

何かを思い出す様な口調。それに、どこか後悔の気配が感じられたのは、気のせいだろうか。

「それでも、二人はしょっちゅう会ってたのよ。日曜日や祝日、夏休みに冬休み……。休みの時には必ずって言っていいくらい、二人で出かけていたわ」

休みの時はいつも? 分かれて住む様になってなお、そんな関係を続けていたのか。生半可な依存度ではない。

「二度ね、学校の友達とも遊んだらって言ってみたのよ。そうしたら、『友達なんていらない。あんたなんか言われる筋合いはない』って、言われちゃった」

そう言って、如月蓮華の母親は自嘲気味にフツツと笑う。

「当たり前よね。二人を裂くきっかけを作ったのは、わたし達親なんだから

……」

そうか。と吉崎多香子は思う。如月蓮華にとって、自分達を裂いた親も敵意の対象だったのかもしれない。その事が、彼女達二人の相互依存をより高くしていったのだろう。

「そんな二人だったから……、鈴華が亡くなった時の蓮華あの娘の悲しみ様はなかったわ……。それこそ、手がつけられない程だった。」  
当然だろう。

それほどに依存度の高い二人だったのだ。

如月蓮華にとつては、自分の半身が、いや、世界の半分が失われたに等しい程の喪失感だっただろう。

「あの……差し障りがなければ、お訊きしたいんですが……」

おずおずと切り出す吉崎多香子に、如月蓮華の母親は何？と聞き返した。

「鈴華さんは……どうして……」

「……………」

その言葉に、如月蓮華の母親の顔から表情が消えた。

ス……

冷たい感触が、吉崎多香子の手を包む。

音もなく伸びてきた如月蓮華の母親の手が、彼女の手を掴んでいた。

驚く吉崎多香子に、如月蓮華の母親は表情の無い顔で言った。

「吉崎さん。貴女、嘘はついていない……?」

その言葉に、吉崎多香子は息を呑んだ。

♪——たとえ世界の全てが

君の敵になろうとも

僕が君を守るから

君はそこで笑ってて——♪

最初、僕にはそいつが誰だか分からなかった。

周囲が薄暗かった上に、目印のサイドポニーを下ろしていたから、

すぐに分からなかったのだ。

「どおしましたあ？先輩い？あたしですよお」

声を聞いて、初めてそいつが如月蓮華だと分かった。

「何だよ!?どうしてお前、こんな所に……」

「別にいい。ただ屋上でえ、風にあたってただけですよお?」

言いながら、トントンとステップを踏む様に階段を下りてくる。

「風にあたってたって、お前……」

その時、僕は蓮華の異常に気づいた。

顔が、妙に紅潮している。

声が、妙に上ずっている。

その様はまるで、何かに興奮している様に見えた。

「……何だよ?お前。何そんなに興奮して……」

そこまで言って、僕はハツとした。

僕はここに、里香を探してきたのだ。

なのに、そこに蓮華がいた。

どういう事だ?

「……おい、お前、里香と一緒にじゃなかったか?」

「えー?秋庭さんですかあ?知りませんよお?」

いつもの様に、ヘラヘラと笑いながら蓮華は人を食った様にそう答える。けれど、その白々しさが、逆に僕に確信を与える。

「……一緒だったんだな?里香と……」

「……」

蓮華は答えず、ヘラヘラと笑っている。まるで何かに酔っている様だ。その異様に、感じていた不安感がはつきりと形をとり始める。

間違いなく、蓮華は屋上で里香といっしょだったのだ。

なのに、蓮華は出てきて、里香は出てこない。

今や形をとった不安が、胸の中でグルグルと蛇の様に渦を巻き始める。

「お前……里香に何したんだよ……?」

答えはない。ただヘラヘラと笑うだけ。

「何したんだって訊いてんだよ!!」

僕は蓮華の肩を掴み、怒鳴りながら揺さぶった。

「やだあー、先輩いー。そんなに激しくしたら痛いですうー」  
らちがあかない。

僕は、蓮華を放して屋上に向かおうとした。

「だけど——」

「せくんばい♪」

僕の腕に、蓮華が絡みついて来た。

「何だよ!!放せよ!!」

「いやです〜」

振り払おうとする僕に、蓮華はますます身体を密着させてくる。腕に柔らかい膨らみが押し付けられ、僕の心臓を飛び跳ねさせた。

「ねえ、先輩……」

僕の腕に胸を押し付けながら、蓮華が見上げてくる。下ろされた髪がサララと流れ、甘い香りが散る。

「あたしと、『いい事』しません？」

「え……?」

その言葉の意味が頭に染みるのに、数秒がかかった。

「ば……何言ってるんだ!?!お前!!」

「いいじゃないですか。ほら、周りはこんなだし、誰も見ていませんって」

言いながら、制服のスカートを外す蓮華。

「そういう問題じゃ……」

もつれ合ううちに、僕の背中が壁に当たった。蓮華はそのまま、僕を壁に押し付ける様にしなだれかかってくる。

「どうせ、秋庭さんとも『まだ』なんでしょう? いいですよ。あたしなら、何でもさせてあげるし、してあげます」

柔らかい身体と、甘い息。火照った体温が制服越しに伝わり、蠱惑的な言葉が耳をくすぐる。

一瞬、意識が吞まれそうになる。

僕はブンブンと頭を振って意識を立て直すと、蓮華を押し返そうと視線を戻す。

と、その視線が僕を見上げる蓮華のそれとかち合った。  
……酷く、暗い瞳だった。

火照っている身体とは裏腹に、その目は冷たく冷えていた。  
暗く、冷たく燃える、黒い瞳。

それに、僕はいつか感じた既視感を再び感じる。

ああ、やっぱり僕はこの瞳を見た事がある。

何処で見たのだろうか。

誰の瞳だったのだろうか。

「ねえ、先輩……」

蓮華が囁きかけてくる。

「楽しい」でしよう？」

熱く、だけど冷たく。

「やめちゃいましょうよ……あんな女は……」

声が、囁く。

「綺麗ですよね……可愛いですよね……。秋庭さん……。でも

……」

蛇の様に絡みつく、蓮華の身体。

「儂いですよ……あんなの……直ぐに消えちゃいますよ……？」

冷たい吐息が、耳朶にかかる。

「やめましょうよ。樂觀も、目をそらすのも。泣いても喚いても、病

気は治りません……。希望なんか……」

そして、最後の一言が――

「ゴミみたいなものです」

「――っ!!」

その言葉を聞いた途端、僕の脳裏で一つの記憶がフラッシュユバツク  
した。

暗い屋上。

漂う、酒の臭い。

顔を殴ってくる、拳の硬さ。

腹を蹴ってくる、鈍い衝撃。

転がったコンクリートの、冷たい感触。

そう、これは、この目は——  
我に帰った瞬間、口を塞がれた。

……蓮華の唇が、僕の唇を塞いでいた。  
固まる身体。

止まる時間。

頭がクラリとしたその瞬間——

ガタンツ

上の方で音がした。

ハツとして蓮華の身体を押し戻す。

見上げた視線の先、屋上への入り口に——

目を見開いて僕らを見つめる、里香の姿があった。

♪——君は王女 僕は召使

運命分かつ 哀れな双子

君を守る その為ならば

僕は悪にだってなつてやる——♪

——僕は 悪にだってなつてやる——

続く

― 想い歌 ― ⑰

— 17 —

頭の中が、グチャグチャだった。

(……アンタ「達」は、いつもそう……)

(今生きてる人の……これから生きてく人の……何もかもをかつき  
らつていつてしまう……)

(心も、夢も、希望も、未来までも奪い去って、それで自分だけ消え  
てしまう!!)

(「有限」の時間しかもたないアンタと、「無限」の未来を持つて  
る先輩と……)

(釣り合うと思ってるの? ホ・ン・ト・ウ・に)

あの娘の言葉が、壊れたスピーカーみたいに頭の中でくわんくわん  
響いては消えていく。いくら耳を塞いでも、いくら目を瞑っても、そ  
の声は響くのを止めてくれない。

やめて。

やめて。

まるで嵐の夜、風の音に怯える子供の様に、あたしはただただ、身  
を縮こませる事しか出来なかった。

そうしているうちに、冷たい風が吹いてきて身体が冷えてきた。

このままでは、本当に風邪をひいてしまう。

そんな、半分現実逃避的な考えが浮かんできた。

それでもいい。

とにかく思考を逸らさないと、どうにかなってしまいそうだった。

ふらつく足で、立ち上がる。

学校の中に戻ろうと、屋上の戸をくぐったら、踊り場に誰かがいた。

薄暗い校舎の中じゃあ、それが誰なのか、何をしているのかすぐに  
は分からなかった。

誰なのだろう。



一人じゃない。

二人？

この暗い中、くつついて何をしているのだろう。

分からない。

ただ、何か近寄りがたい雰囲気だけが漂っていた。

その空気に押されて、あたしは降りていく事を躊躇する。

そうこうするうちに、暗さに目が慣れてきた。

目を凝らす。

…裕一と、あの娘が一緒にいた。

あの娘は裕一の首に手を回して、いつぱいに背伸びをして、そして

自分が何を見ているのか、分からなかった。

けれど、時間が経つにつれて“それ”は頭に染みていく。

そして――

身体から、力が抜けていくのが分かった。

崩れる体勢。

腕が、開いたまんまのドアに当たった。

ガタンツ

腕が当たったドアが、大きな音を立てる。

二人の顔が、いつせいにこつちを向いた。

裕一は驚いた顔。そしてあの娘は――

「――っ!!」

何かを考える前に、身体が動いていた。

ドンツ

自分の肩が、二人のうちのどちらかにぶつかる。

裕一の叫ぶ声が聞こえる。

けど、それに構う余裕もない。

今までに経験した事がない位の速さで、視界が過ぎていく。

もう、何がどうなってもいい。

いつそ、何もかも壊れてしまえ。

そんな事を考えながら、あたしは走っていた。

そう。あたしは「走って」いた。

「……気付いて、いたんですか……?」

自分の手を握る如月蓮華の母親に向かって、吉崎多香子は茫然と呟いた。

「……一応、あの娘の親よ。あの娘が転校してこんなに早く、友達を作れる様な娘かくらい、分かってるわ」

そう言うと、如月蓮華の母親は掴んでいた手を離す。

「……ぐめんなさいね。急に変な事言っ……」

「いえ……最初に妙な事をしたのはこちらですから……」

よほど強く握られていたのか、赤く痕のついた手を見ながら吉崎多香子は姿勢を正す。

「だまそうとして、申し訳ありませんでした」

そう言っ、頭を下げる。

「……あの娘、何かをしようとしてるのね……」

「……はい」

「それは、誰かを……傷つける様な事……?」

「そうなるかも、しれません」

頷く吉崎多香子を見て、如月蓮華の母親は大きく息をついた。

「分かったわ」

「!」

その言葉に、吉崎多香子は思わず顔を上げる。しかし、

「だけど……」

如月蓮華の母親は、そんな吉崎多香子の顔を見つめ、こう言った。

「二つだけ、お願いがあるの……」

「え……?」

そして紡がれた言葉に、吉崎多香子は息を呑む。

「……」

「どう……?聞いて、くれるかしら……?」

一瞬の逡巡。けれど、もはや選択肢はなかった。

躊躇いがちに頷く、吉崎多香子。

それを見て薄く微笑むと、如月蓮華の母親は手の中の遺影に視線を落とす。

「何の助けになるかも、分からないけれど……」  
そして、話は始まった。

何も考えられなかった。

気がつけば、僕の首には蓮華の腕が回され、唇は蓮華に塞がれていた。

密着する身体の柔らかさと、鼻腔を満たす甘い香りに、ただただ、頭が真っ白になった。

その時――

ガタンッ

大きな音が響いて、僕を現実に戻した。

ハツとして蓮華の身体を突き放すと、音のした方を見た。

……上を向けた視線の先に、大きく目を見開いた里香の姿があった。

「り……」

思わず声をかけそうになった時、僕の前に立つ蓮華の顔が目に入った。

瞬間、怖気が走る。

笑っていた。

嘲るでも。

勝ち誇るでもなく。

その顔は、笑っていた。

「邪悪」という言葉がある。

その言葉を、寸分の違いもなく体現する。

そんな、笑顔だった。

だけど、僕が蓮華に気をとられたその瞬間――

ドンッ

何かが、僕の肩に当たった。

我に帰って見ると、階段を「駆け下りて」いく里香の姿が見えた。

そう、里香は「走って」いた。

その事を理解すると同時に、僕は叫んだ。

「ぼっ……里香、走るなっ!!」

だけど、里香の足は止まらない。

その姿は、見る見る階下へと消えていく。

「くそっ!!」

急いで後を追おうとすると、ガクンと身体が止まった。

振り返って見れば、僕の右腕に蓮華が絡み付いていた。

「何処行くんですか?先輩」

その顔にあの笑みを張り付かせたまま、蓮華は言う。

「ねえ、どこにも行かないで。ここにいて」

甘く誘うような言葉。

僕は、それを振り切る様に怒鳴る。

「うるせえ!!放せ!!」

「いやです。放しません」

そう言つて、腕にぶら下がったまま離れない。

苛立ちと、焦りがつのる。

「里香は心臓が悪いんだぞ!!それで手術もしてるんだ!!走ったりしたら、どうなるか分からないんだぞ!!」

「それが?」

なんでもない事のように、そう言われた。

絶句する僕に、蓮華は言う。

「良いじゃないですか。別に。もし「そうだった」ら何も考えずに

走った秋庭さんが悪いんです。先輩の事を責める人なんて、誰もいな

いし、あたしがさせません」

「……お前、何言ってるんだ……?」

「いい機会だと思いませんか?この際、秋庭さんにはいなくなっても  
らいましょう」

平然と言い放つその言葉には、微塵の躊躇もない。

「先輩、今なら間に合います」

何?何を言ってるんだ?こいつは?

「今なら間に合います。先輩の未来には。だから、だから……」  
——「今度こそ」、あたしを選んで——  
薄い花卉の様な唇が、確かにそう紡いだ。

続く

― 思い歌 ― ⑱

「二人の関係がおかしくなったのは、あの娘達が中学に入ってから  
の時の事だったわ」

お互いの湯飲みに二杯目のお茶を注ぎながら、如月蓮華の母親は静  
かに話す。

「それまでには、休みの日には欠かさず会ってたのに、だんだんとそ  
れが途切れ途切れになって、ついには全然会わなくなってしまった  
……」

時折お茶で喉を湿らせながら、如月蓮華の母親の話は続く。

二人で会う事がなくなってから、如月蓮華は目に見えて塞ぎ込む様  
になってしまった。

心配した母親は、双子の片割れである如月鈴華の保護者。つまり二  
人の父親に連絡をとった。

返って来た答えは驚くべきものだった。

鈴華に、恋人が出来たのだという。

相手は、通っていた中学の同級生。

ただし、その少年は普通の少年ではなかった。

彼は、病を患っていた――

訳が分からなかった。

蓮華こいつの言っている事が。

蓮華こいつの求めている事が。

僕には、全く分からなかった。

選ぶ？

今度こそ？

一体何の事だ？

何を言っているんだ？

狼狽する僕の目を、蓮華はじつと見つめてくる。

まるで、何かを求める様に。まるで、何かにすがる様に。けれど、その暗く燃える瞳はそのままに。

僕らの時間が、凍った様に止まる。

その間は、どれほどだっただろう。

10秒？5秒？それとも、もっと――

ハッと気付いた時、僕の耳に飛び込んできたのは、カツカツカツという靴が床を蹴る固い音。

――里香が、走っている――

その事が頭に浸透したその瞬間、僕は力いっぱい蓮華を突き飛ばしていた。

床に突き倒された蓮華が短く悲鳴を上げたが、そんな事に構っていない暇はなかった。

僕は蓮華を顧みる事もなく、里香の足音を追って走り出していた。

如月鈴華がその少年に会ったのは、中学に入学して最初の週末。

先生に頼まれて学校のプリントを届けに行った時の事。

行き先は、少年の家ではなく市立病院の一室。

ノックをして入った先で、その少年は待っていた。

「二目惚れだったらしいわ」

手にした茶碗をコトリ、と置きながら、如月蓮華の母親はそう言つてフフ、と笑った。

「本人に会った事があつたけど、別にどうって事のない子だったのよ。特別に美形だった訳でもないし。本当、何処にでもいる様な、普通の男の子。でも、あの娘は、鈴華は夢中だった」

少年は、心臓の病を抱えていた。

小学生の時にリウマチ熱に罹り、それによつて「大動脈弁狭窄症」を併発したらしい。

手術の必要があつたが、幼い頃から病と闘ってきた少年の体力は弱

く、手術に耐えられる見込みは少なかった。

そして何より、長年の闘病生活に少年自身が疲れきり、手術という大事に向き合う気力を失っていた。

そんな少年を、如月鈴華は懸命に励ました。

学校の放課後、休日、夏休みに冬休み。足しげく病院に通い、少年の側に寄り添い続けた。

そんな二人に、やがて変化が現れる。

塞ぎ込みがちだった少年が、如月鈴華に興味を持ち出したのだ。

少年は鈴華の話に耳を傾け、鈴華が笑えば、笑顔でそれに応じた。

そうして二人の間は、急速に縮まっていった――

「……そんな二人の事を、蓮華は良く思っていないかったわ。何度も、そんな明日をも知れない相手に入れ込むのはやめろって言ってた。自分で心臓病の勉強をしては、その事を教えたりもしてたみたい。だけど、それでも鈴華の気持ちは変わらなかった……」

当然だろうな、と吉崎多香子は思う。

人が人を想う気持ちは、そんな事で変わるものではない。

秋庭里香と戒崎裕一が良い例だ。

第三者がどれだけ口を挟もうが、どんな事実が立ち塞がろうが、一度つながった二人の心を分ける事など、出来はしない。

たとえ、それが同じ血を分けた片割れの言葉であったとしても。

一人の人間が持つ心は、あくまでその人間のものなのだ。

青臭い考えだと思われるかもしれないが、今のあの二人を知る吉崎多香子にとっては、それはまごう事なき真実だった。

そして、事態は少なからずの進展を見せ始めた。

何に対しても消極的だった少年が、行動を起こし始めたのだ。

自ら進んで体力作りに励み、出される食事も全部食べる様になった。

そしてその傍らには、いつも伴侶の様に寄り添う如月鈴華の姿があった。



時間はゆつくりと過ぎていき、やがて彼女達が三年生になる頃、少年の身体は手術に耐えうるだけの体力があると判断されるまでに持ち直していた。

そして、手術の日が決まった。

「よっぽど、嬉しかったのね。わたし達の所にも、電話をかけてきたわ。彼が治るって。治ったら、一緒にいっぱい遊ぶんだって。海にも、動物園にも、遊園地にも行くんだって。本当に、子供みたいにはしゃいでた」

同じだな、と吉崎多香子は思った。

秋庭里香も、戎崎裕一という存在を得てから「生きる」という事に対して貪欲になったのだと聞いた。

人が人を想う気持ちは、それほどまでに強い。一人の人間を、死の影から引つ張り上げるほどに。

吉崎多香子は、その事を再確認した様な思いでいた。

如月蓮華の母親の、次の言葉を聞くまでは。

「……良い話だと思った……?」

「え……あ、はい、その……」

不意に飛んできたその問いに、吉崎多香子は思わず頷く。しかし――

「でもね……神様って、そんなに優しくもないのよ……」

能面の様に無表情な顔で、如月蓮華の母はそう言った。

その手の中の湯飲みが小さく震えて、カタタ、と鳴った。

“それ”は、あまりにも唐突に訪れた。

手術まであと数日という日の朝、彼の心臓は突然その動きを止めた。

緊急の処置が、それこそ考えられうる全ての手が施された。

けれど、彼の心臓が再び動く事は二度となかった。

「大動脈弁狭窄症」による心不全。

それが、医者から遺された者達に告げられた、最後の言葉だった。

僕は必死で走っていた。

耳には、相変わらず走る里香の足音が響いている。

その音が、僕には終わりを告げるカウントダウンの様に聞こえていた。

馬鹿な!!

そんな事、あつてたまるか!!

僕は、走る足に力を込める。

どれくらい走っただろう。

実際の時間にしたら、ほんの数秒くらいのもんだろう。

それでも僕には、とてつもなく長い時間の様に感じられた。

やがて、僕の目に走る里香の後姿が見えてくる。

それから、あつという間だった。

いくら先に走り出したとはいっても、里香の足は僕よりずっと遅い。

僕達の距離はどんどん縮まっていく。

僕は里香に向けて、いっばいに右手を伸ばす。

そして――

僕の右手が、里香の肩を掴んだ。

そのまま、力いっぱい抱き寄せる。

「放して!!」

腕の中で荒い息をつきながら、里香がもがく。

身体越しに、彼女の鼓動が伝わってくる。

速い。

まるで、今にも破裂しそうな程に激しく波打っている。

それを押さえ込もうとする様に、僕は抱き締める腕に力を込める。

「落ち着けよ!!里香!!落ちつけたら!!」

「うるさい!!放してったら!!放せ!!」

怒鳴る僕に、里香が怒鳴り返す。

こんなに錯乱した里香を見たのは、初めてだった。

伝わってくる心臓の鼓動は、相変わらず早い。

とにかく、落ち着かせなければ。  
しかし、どうすればいいのだろう。

言葉で言っても、今の里香は聞いてはくれない。  
それなら、どうすればいい？

分からない。

僕には、分からない。

だから、僕は抱きしめる腕に一層腕を込めた。

それしか、分からないから。

それしか、出来ないから。

里香はもがくが、僕は放さない。

ただ、ただ、ありったけの力で抱きしめる。

一分。

二分。

腕の中で、里香の抵抗が弱まってくる。

それに合わせる様に、早鐘の様に波打っていた鼓動が静かになっていく。

やがて、里香がすっかり大人しくなると、僕はやっと力を抜いた。

「はあ……」

二人同時に、大きく息をつく。

僕は廊下の壁に背中をつけると、里香を抱き締めたまま、ズルズルと床に崩れ落ちた。

当然、里香の身体もそれについてくる。

「里香……大丈夫か？どうも……なっていないか？」

僕は、当然の様に問う。

「……」

けれど、返事は返ってこない。

「おい、里香？」

不安にかられ、もう一度問う。

「……」

やっぱり、答えはない。

「おい!!里……!?!」

たまらず、もう一度かけようとした声が途切れた。  
首にかかる重み。

口を覆う、温かくて柔らかい感触。

里香が僕の首にしがみつき、ぶつける様に唇を合わせてきていた。  
「……!!」

不意の事に、崩れる体勢。

そのまま、僕達はもつれる様に床に倒れ込んだ。

酷く、長く。

そして艶かしいキスだった。

思考が。身体が。硬直する。

里香は、離れない。放そうと、しない。

すっかり日が落ちて暗くなった廊下に、僕達の息遣いだけが響く。  
これ以上続いたら、何か壊れる。

そんな恐怖に耐えかねて、僕は里香の身体を押し戻した。

ハアツ

二人の口から漏れる、熱い息。

「な、何だよ、里香!! どうし……」

半ば咳き込む様にしながら、里香にかけようとした言葉が詰まる。  
僕に覆い被さる様になつた里香の目が、僕を見つめていた。

昏い、熱のこもった瞳だった。

息を呑む僕の右手を、里香が掴む。

その力は、本当に彼女のものかと思える位に強かった。

里香の手は、強く。けれどぎこちなく。僕の手を引き上げる。  
そして――

そのまま、自分の左胸に押し当てた。

一瞬、本気で呼吸が止まった。

柔らかかなふくらみの奥で、命を刻む鼓動を感じる。  
それはとても温かくて、優しく、そして轟動的な感触だった。

僕の全身で、血液が一気に沸騰した。

「り、里香!! お前、何やって……!!」

「裕」……」

里香が、眩く様に言った。

「……あの娘にも、されたの……う……こんな事……」

「え……？」

答えに窮する僕の胸に、里香が顔を埋めてくる。

甘い香とともに、長い髪が顔をくすぐった。

「……いい、よ……」

微かな艶を絡めた声が、静かに囁く。

「……裕一になら、いい……」

「——っ!!」

思わず見上げると、見下ろす里香の瞳と視線が合った。

里香の目。強さと儂さを併せ持った瞳。

それが、ユラユラと揺れていた。

艶っぽい熱をもって潤む眼差し。

ドクン

里香の意図を察した瞬間、心臓が大きく跳ねた。

「……暗くなったわね」

如月蓮華の母親はそう言うのと、立ち上がって部屋の電灯の紐を引いた。

カチリ

小さな音が鳴って、薄闇に沈んでいた部屋がパツと明るくなる。

けれど、それでも部屋に漂う闇は消えない。

むしろ、中途半端な光はそこにある闇をより濃く浮き上がらせる。

客間の隣、深い闇に沈んだ仏間。

それを視界の隅に入れながら、吉崎多香子は知らず知らずのうちにその身を竦ませていた。

「吉崎さん……」

電灯を点けたその姿勢のまま、如月蓮華の母親が言う。

その声につられて、吉崎多香子は顔を上げる。

こちらを見下ろす如月蓮華の母親。

電灯の光を背に受けるその顔も、闇に彩られていた。

闇。  
闇。  
闇。

いつしか、この家の全てに闇が満ちていた。

空気。空間。そして、人間ひとに至るまで。

「吉崎さん、知ってる……？」

人の形をとった闇が囁く。

「神様って、酷いのよ……」

闇色の声が、闇の中に響いて消える。

「本当に、本当に、酷いの……」

悲傷とも、怨嗟ともとれる声。

吉崎多香子は、その声に不吉なものを感じる。

それは、この後語られる事がどんなものなのか、薄々感じ取っていたからかもしれない。

如月鈴華が愛した少年は、もうこの世にいない。

けど、その如月鈴華も、もうこの世にはいない。

何故、彼女はその命を失ったのか。

何が、彼女の命を奪ったのか。

一つの「答え」が、頭を過ぎる。

その「答え」に身体の芯から、震えが沸き起こる。

聞くべきなのだろうか。

いや、聞く事は許されるのだろうか。

自分が。

この家族に。

この姉妹に。

何の縁もゆかりもない自分が。

恐らくは彼女達が孕む、もつとも深い闇の事を。

知ってしまった、いいのだろうか。

それが、酷く罪深い事の様に思えて、吉崎多香子は思わず席を立とうとした。

しかし――

腰を浮かしかけたところで、その動きは止まった。

いつの間にか元通りに座った如月蓮華の母親が、こちらを見ていた。

じっと。

じっと。

逸らす事なく。

見つめてくる瞳。

それを見た瞬間、吉崎多香子は悟った。

もう、逃げられないのだと。

……こんな事を、想像した事がない訳じゃなかった。

いつかはこう言う時が来るかもしれない、と思っただ事もあった。

けど、それはいつも霞がかかった様に曖昧で。

手を伸ばしても、届きそうで届かない所にあった。

何より、実際に里香を前にすると、そんな荒々しい衝動は形を潜めた。

それくらい、里香は神聖で大事な宝物だった。

汚しちやいけない。

壊しちやいけない。

里香と一緒にいる。

それだけで、全ては満たされていた。

その筈だった。

けど。

だけど。

僕は、気づいてしまった。

自分の中で、燃えている“それ”に。

焰だった。

それは、“あいつ”の中にあつたもの。

蓮華の身体に灯っていた、焰。

昏く、熱く燃える灯火。

彼女と身体を重ねた、ほんの一時。  
それが。

僕の中にも、燃え移っていた事を。  
まずい。

そう思いかけた瞬間、それが僕の脳漿に引火した。

嫌だった。

絶対に、嫌だった。

彼を。

裕一を。

失う事が、嫌だった。

今なら分かる。

“彼女”の想いの形が。

それは、巨大な蛇だった。

虚ろにのたうつそれは、あたしの心に巻き付き、締め上げる。

責め立てる。

いいのかと。

奪われて、いいのかと。

心が軋む。

悲鳴を、上げる。

耐えられなかった。

耐えられる筈がなかった。

だから、決めた。

何をしても。

何を壊そうとも。

つなぎ止めると。

「裕一……」

里香が、言う。

「いいから……あたしは、いいから……」

脳が、熱に浮かされる。



「だから……」

腕が、華奢な身体を抱き寄せる。

「だから……」

そのまま、ゴロリと転がる。

体勢が入れ替わって、僕が里香を組み敷く形になった。

視界に入る、白い首筋。

「お願い……」

次の言葉を聞く事なく、僕はそこに顔を埋めた。

口付けた舌尖に広がる、甘い肌の味。

「んっ……!!」

か細い声とともに、里香の身体がビクリと震える。

首に絡まる腕が、戦慄く。

戦慄きながら、抱き寄せる。

まるで、すがり求める様に。

耳元で、今にも絶えそうな声が言った。

「いけないで……」、と。

続く

闇の帳が降りた校舎。

冷たい夜気が満ち始めた舎内。

その中で、僕は熱に浮かされた様に里香を抱きしめていた。

欲しかった。

里香が、欲しかった。

ここが学校だという事も。

誰かに見られるかもしれないという懸念も。

もう、どうしても良かった。

僕は、貪りたかった。

里香の身体を。

里香の心を。

里香の全てを。

貪り尽くしたかった。

里香の身体。

細くて華奢な、精巧なガラス細工の様な身体。

それが砕けんばかりの力で抱きしめ、白いうなじに唇を押し付ける。

舌を這わせる度、腕の中で里香が震える。

彼女の吐息が、耳に触れる。

それだけで、ゾクゾクする様な快感が走った。

もう、止める事は叶わなかった。

闇に満たされた部屋。

その中で、吉崎多香子は身動きする事もままならず、ただ「彼女の言葉を聞いていた。」

「ねえ、吉崎さん……」

手にした遺影を愛しげに撫でながら、如月蓮華の母親は言う。

「あなた、分かっているんじゃない？」

「……………」

吉崎多香子は答えない。

否、答えられない。

如月蓮華の母親の目が、それまで遺影に落とされていた視線が、再び彼女の方を向く。

「ねえ、分かっているんでしよう……………」

繰り返される言葉。

その「答え」に行き着いてしまった事を、責める様に。

その「答え」に怯える事を、嘲る様に。

吉崎多香子は、大きく息を吸う。

呼吸が、苦しかった。

まるで、肺の中まで闇に満たされたかのように。

狭い鉢の中、空気を求める金魚の様に口をパクパクさせる彼女を見つめながら、如月蓮華の母親は、言葉が続ける。

「……………」

疲れたような、それでいてどこか高揚した様な、奇妙な声。

吉崎多香子は、心の内で叫ぶ。

聞きたくはなかった。

もう、分かっている。

もう、理解している。

だから。

だから、言わないで。

だけどその叫びは、言葉の体を成しはしない。

乾いた口が、ただパクパクと動くだけ。

「この娘は……………鈴華はね……………」

そして、「彼女」はゆっくりりと、噛み締める様に言った。

——「自分で、死んだ」の——

予想していた筈のその言葉は、酷くハッキリと耳へと突き刺さった。

熱が冷めるのは、一瞬だった。  
滾る衝動のまま、右手を里香の服の中に潜り込ませようとしたその時、

ポタン

か細い音が、微かに響いた。

ハツと我に返る。

そこで、僕は初めて里香の顔を見た。

綺麗な顔が、怯える様に震えていた。

ギョツと閉じた目尻に涙が浮かび、床に滴っていた。

瞬間、僕の内で猛犬の様に荒ぶっていた衝動が、それこそ水でもぶっかけられたみたいに静まった。

何だ!?

何をしようとしてたんだ!?

熱を急激に冷やされた頭が混乱する。

沸き起こる後悔と罪悪の念に引き剥がされる様に、僕は里香の身体を離していた。

そのまま、里香の視線から逃れる様に後ろを向く。

「裕一……………」

身を起こす里香。

戸惑う様な声で、訊いてくる。

「どうしたの……………」

問いかける声。

答えなんか、出やしない。

里香に背を向けたまま、「ごめん」と呟く。

「……………」

里香は言う。

「いいって言ったのは、あたしだよ……………」

「違う……………」

「裕一は、ああしたかったんでしょ……………」

「違うんだ……………」

「だから……………」

「違うんだよ!!」

思わず、大きな声が出た。

背後で、里香がビクリと竦む気配がした。

「……………」

「……………」

僕達の間には、沈黙が降りる。

さつきまでの熱が嘘の様な、肌寒い沈黙。

頭の中が、ぐるぐる回る。

どうして、こんな事になったのだろう。

こんな事、望んでいた筈じゃなかったのに。

里香が、いいって言ったから？

違う。

僕が里香を。

彼女を、そこまで追い込んでしまったのだ。

蓮華なんか、関係ない。

結局は、僕が弱かったから。

その結果が、これ。

二回も、里香を傷つけてしまった。

心も。

身体までも。

馬鹿だ。

本当の、本当に、大馬鹿だ。

何だか、鼻の奥がツンとする。

目頭が、熱くなってきた。

気づくと、目から涙が溢れていた。

ああ、何泣いてんだよ。

そんな立場じゃないだろうが。

こらえようとすればするほど、こみ上げてくるものが止まらなくなる。

いつそ、舌でも噛んでしまおうかと思ったその時、  
ふわり

温かい感触が、背中を包んだ。

「抜け殻になる」という言葉がある。

少年を亡くした後の如月鈴華が、まさにそんな状態だった。

学校に行かなくなり、趣味だった歌や作曲にも興味を示さなくなり、一日中部屋に閉じ籠って虚空を見つめて過ごすようになった。

それはまるで、心も、気力も、残りの人生も、その全てを少年に持つていかれた様な有様だった。

そんな彼女を、周りの者も手をこまねいて見ていた訳ではない。

特に、如月蓮華は必死だった。

まるで鈴華自身が少年にそうした様に、毎日彼女の元に通ってはその隣に寄り添い続けた。

幼い頃の思い出を話し、かつて共に思い描いた未来の夢を語った。時には二人で作った歌を歌って聞かせ、そして部屋には小さい頃に一緒に摘み遊んだ花を飾った。

しかし、それでも如月鈴華の瞳に光が戻る事はなかった。

もう、このまま時の流れがその傷を癒してくれるのを待つしかないのではと、皆が思い出した矢先――

如月鈴華が、如月蓮華に家族一緒に遊びに行こうと誘いをかけた。

その事に、如月蓮華はもちろん、二人の両親も喜びに沸いた。

その日、昔家族で訪れた遊園地で、如月鈴華は久方ぶりの笑顔を見せた。

それを見て、如月蓮華とその両親も心から喜んだ。

この時、二つに解れていた家族の心は、如月鈴華を通して確かに繋がっていた。

懐かしい、そして暖かい一日だった。

――そしてその夜、如月鈴華は己の命を絶った。

冷たい浴槽の中。切り開いた手首に、真っ赤な華を咲かせて――

その温もりの正体は、すぐに分かった。

里香が、僕を背中から抱き包んでいた。

「裕一」

里香が、僕を呼ぶ。

答える声は、出せなかった。

「裕一」

また、呼ばれた。

でも、やっぱり声は出ない。

答える術もないまま、垂れる鼻水を拭おうとしたその時、

「裕一!!返事しろ!!」

バンッ

大きな声と一緒に、背中を思いつきり叩かれた。

「イッテー!!」

堪らず飛び上がる。

「な、何すんだよ!?!」

怒鳴りながら振り返ると、こっちを見つめていた里香と目があつた。

思わず、固まってしまう。

しばしの間。

そして――

「アハ、アハハハハ」

里香が、笑いだした。

「裕一、顔すごい。ぐちゃぐちゃ」

言いながらハンカチを取り出すと、僕の顔を拭う。

「ほら、これでよし」

そう言つて微笑む顔はとても綺麗で、思わずドキリと心臓が鳴つた。

「ほら、ハンカチ、ちゃんと洗って返してよね」

里香の手が、ベトベトになったハンカチを握らせてくる。

「わ、分かった……」

ハンカチを受け取る瞬間、手が重なる。

瞬間、

クンッ

そのまま、里香の手が僕の手に絡んできた。  
ハンカチが、床に落ちる。

僕達は、自然と抱き合っていた。

さっきの、荒々しい感情はもう湧かなかった。

とても静かで、優しい抱擁。

すぐ近くに、里香の鼓動を感じる。

里香もきつと、僕を感じている筈だった。

「……裕」

里香が言った。

眩く様に。

小さな声で。

「……何だ？」

「そんなに、長くはないよ……」

その言葉を聞いたとき、僕はまたドキリとした。

それは、あの夜の言葉。

あの半月の下、暗い病室で交わした、あの言葉。

「でも、短くもないよ……」

僕の腕の中で、僕に身を委ねながら里香は続ける。

「あたしのために、何もかも諦めなくちやいけなくなるよ……」

「……」

「いいの？」

それは何かを恐れる様な、そして何かに怯える様な、そんな細かい  
声だった。

「本当に、いいの？」

また、言った。

細い肩が、震えていた。

里香は屋上で、蓮華に何をされたのだろう。

蓮華に、どんな言葉をぶつけられたのだろう。

その心が、酷く傷ついている事がその肩の震えから察せられた。

僕の心に、改めて怒りが湧き起こる。

今すぐ蓮華のところに戻って、ぶん殴ってやりたい衝動に駆られ



る。

だけど、今はその時じゃない。

今しなきゃいけない事は、たった一つだった。

里香を抱き締める腕に、もう一度力を込める。

その肩が、ビクリと震えた。

その耳元で、僕はささやく。

「わかってる」

里香と同じ様に、僕もあの時の言葉を繰り返す。

「全部、わかってる」

俯いていた里香の顔が、僕の方を見る。

僕を見つめる目が、濡れていた。

「ずっと、いっしょだよ。里香」

「……うん」

細い腕が、僕の背に回る。ギュツと抱きしめられる感覚。

里香が目を閉じ、顔を寄せてくる。

それに答える様に、僕も顔を寄せる。

廊下の窓から差し込む月明かりの中で、僕らの影が重なる。

いつの間にか、窓の外には大きな半月が浮かんでいた。

秋庭里香と戎崎裕一は気付かない。

自分達を包む月の光の外。

廊下の端。階段。その、踊り場。

暗い、暗い闇の澱み。

その中から、自分達を見つめる目があった事を。

如月蓮華。

闇の中、彼女は光の中の秋庭里香と戎崎裕一を見つめていた。

その目に、暗く冷たい炎を燦らせながら。

ジツと。

ジツと見つめていた。

空には、大きな半月が浮かんでいた。

「月明かりの差し込む廊下。

その光の中で、僕達は抱き合っていた。

里香の細い腕が、僕の身体をギュウと抱き締めてくる。

トクン

トクン

ピッタリとくっついた身体を通して、里香の鼓動が伝わってくる。

さつきまで、千々に乱れ、早鐘の様に鳴っていたそれは、今はすっかり平穏を取り戻している。

それを確かめる様に、僕もギュウと里香を抱き締める。

「里香……大丈夫か？」

さつきから何度もした問いを、僕はまた繰り返す。

「……うん」

里香も、何度も繰り返した答えを繰り返す。

「裕一、少ししつこいよう？」

半ば呆れた様な顔で、里香が言う。

「だってさ……」

僕の言いたい事を悟る様に、里香はコツンとおでこを僕の胸につけた。

「ゴメンね……」

「……お前があやまることじゃないだろ」

「……そうかな？」

「そうだろ」

いつになくしおらしい里香。それがたまらなく愛おしくて、僕は彼女の頭をクシヤクシヤと撫でた。

すると、里香がウフフ、と笑った。

くすぐったかったのか、それとも別の理由なのかは分からないけれど、とにかく笑った。

それは、ここしばらく見たことなかった里香の笑顔。

それが嬉しくて、僕もウハハ、と笑った。

ウフフ、ウハハと僕達は笑い合う。

笑いながら、僕は如月蓮華の事を考えていた。

蓮華に対する怒りは、まだ胸の中でグラグラと滾っている。けれど、今はそれ以上に、勝ち誇る気持ちの方が強かった。ざまあみろと言う気持ちだった。

これが、僕と里香だ。

お前なんかの割り込む隙間なんか、ありやしないんだ。

ふと、僕に突き飛ばされた時の、あいつの顔が目には浮かぶ。

親を見失った子供の様な、捨てられた子犬の様な、悲しげな顔。だけど、憐憫の情は少しも起きない。

あいつは里香を傷つけた。

あれくらい、当然の報いだ。

そう言えば、あいつはまだ、ここにいるのだろうか。

あいつの事だ。ひよつとしたら、またどこかで見ているかもしれない。

構うもんかと思った。

この様を見て、とことん思い知ればいいんだ。

僕は、何処かにいる蓮華を思いつきり嘲笑った。

「忘れ物、ないか？」

「うん。大丈夫」

教室から鞆を持って出てきた里香は、僕の問いにそう答えて頷いた。

「じゃ、帰ろうぜ」

そう言つて、僕は手を差し出す。

その手を、当たり前前の様にとる里香。

「暗いから、足元気をつけろよ」

「分かってるよ」

僕達の会話は、もうすつかりいつもの調子に戻っていた。

それがたまらなく嬉しくて、僕は月明かりの差し込む廊下を里香の手を取り歩きながら、ニタニタとわらった。

「裕一、何ニタニタしてるの？」

そんな僕の顔を見て、里香が気味悪そうに言う。

「そうか？ニタニタなんてしてたか？」

しれっとしながら、そんな事を言ってみる。

「してた。あ、ほら、またしてる。気持ち悪い」

里香がそう言いながら、顔をしかめる。

うん。いつもの里香だ。

さつきまでのしおらしい里香もいいけど、里香はやっぱりこうでなくちゃ。

僕はニタニタと笑いながら、気味悪がる里香の手を引いて歩いた。

「……………」

「……………」

話し終わった如月蓮華の母親が、冷めたお茶で口を湿らした。

「それ以来、蓮華もすっかり変ってしまった……………」

如月鈴華を、自分の半身を失った彼女は、次第に攻撃的になっていった。

外界からの干渉を拒絶し、否定し、侮蔑した。

そしてそれは、他人だけに納まらず、彼女自身の親、親類にさえも及んでいた。

如月蓮華は孤立し、そしてその孤独の中で、心の刃をますます研ぎ澄ませていった。

…………おそらく、と吉崎多香子は考える。

今の如月蓮華にとっては、この世の全てが敵なのだろう。

自分達姉妹を別つた両親も。

それを良しとした親類縁者も。

如月鈴華の全てを持ち去った少年も。

そして、愛する姉をこの世に繋ぎとめられなかった自身さえも。

自分から如月鈴華を奪った世界の全てを、彼女は敵視し、拒絶しているのだ。

孤独という、闇色の殻に閉じ籠りながら。

「ねえ、吉崎さん……………」

言いながら、如月蓮華の母親が、持っていた湯飲みをテーブルに置

く。

コトリ

湯飲みがテーブルに置かれる音が、妙に大きく聞こえた。

「わたし達は、一体何を間違っちゃったのかしら……？」

問いかけてくる、闇色の言葉。

「……あの夜、あの娘を一人にしてしまった事……？あの日、あの子の心を読み違えてしまった事……？あの娘が、〝彼〟を選んでしまうのを、止められなかった事……？あの娘を、あの学校に入れてしまった事……？あの娘達を、別けてしまった事……？両親が、別れてしまった事……？」

そう。この女ひとも同じ。

己の娘を、救えなかった自分。

もう一人の娘を、救えない自分。

それを嫌悪し、呵責し、苦しんでいる。

終わりのない自責と言う、闇の泥濘に溺れながら。

「ねえ、何？何かしら……？」

続けられる問いかけ。

答えはない。

答えられる筈もない。

吉崎多香子は思い知る。

死に寄り添われる者と共に生きる。

それが、何を意味するのか。

その事を、自分がいかに安易に考えていたのか。

吉崎多香子の前には、戎崎裕一と秋庭里香という存在がある。

彼らの物語を知ってから、秋庭里香と近い仲になってから、自分は〝その事〟に関して他の人間よりも理解があるつもりになっていた。

しかし、それはただの幻想だったのかもしれない。

丁度、世間を知らぬ小娘が、テレビの中のスターに憧れる様に。

その表の眩さだけに魅せられて、その影にある闇から目を逸らしていたのかもしれない。

そして、改めて認識する。

この闇は、あの戎崎裕一と秋庭里香の影にも、確かに潜んでいるのだ。

あの光の中にある様な輝きは、闇の上に置かれた平均台を、二人三脚で渡っている様なもの。

一步でも足を踏み外せば、闇は何の容赦もなく、*“彼ら”*を呑み込んでしまうのだろう。

背筋が震えた。

考えたくない。

考えたくもない。

けれど、それが事実なのだ。

どうしようもなく冷酷な、だけど歴然たる事実なのだ。

気付けば、如月蓮華の母親は泣いていた。

如月鈴華の遺影を、赤ん坊でも抱くように腕に持ち、その上にポロ

ポロと涙を落としながら。

そこにあるのは、平均台から落ち、闇に呑まれた者達の姿。

いつかは、*“彼ら”*がたどり着いてしまうだろう場所。

*“その時”*が来た時、彼はどの道を辿るのだろうか。

如月鈴華の様に、全てを捨ててしまうのか。

この母親の様に、ただ遺され、涙にくれるのか。

それとも……

そこで、吉崎多香子はある事に思い至る。

「——っ!!おばさん!!」

思わず、吉崎多香子は叫んでいた。

「?」

突然の呼びかけに、如月蓮華の母親が顔を上げる。

「さつき、言っていましたよね?!如月さんは、心臓病の勉強もしてたつ

て!!」

「ええ……。鈴華に教えるために、それはもう、一生懸命……」

「鈴華さんのお相手に、会った事は……!!」

「何度かあるわ……。鈴華が、あの娘達を馴染ませようとして……」

やっぱり。

吉崎多香子は確信する。

「彼女」は、学校の中では目立つ存在だ。

他の生徒から、病気を持つてるらしい事や、体育関係の授業や行事はいつも見学している事ぐらい、聞きだすのは容易だろう。

加えて。

それほど知識があるのなら。

それだけ近くで、実際の患者を見た事があるのなら。

分かるのかもしれない。

その所作から。

そのそぶりから。

そう。

彼女は、如月蓮華は気付いたのだ。

秋庭里香の病に。

戎崎裕一が選んだ運命に。

それが、意味するものに。

たどり着いた。

そう確信した。

如月蓮華の想い。その、彼女の真意に。

何故、あんなにも戎崎裕一に執着するのか。

何故、あんなにも秋庭里香に敵意を持つのか。

そう、彼女はやり直そうとしているのだ。

あの時、渡りそこねた平均台。

それをもう一度、たどり直すために。

「すっかり遅くなっちゃったね」

月明かりと外灯の光の中、自転車置き場から自転車を引っ張り出す僕に向かって、里香がそう声をかけてきた。

「そうだな」

自販機で買ったパックのジュースを啜りながら、僕は答える。

実際、全くもってその通りだった。いつもなら、そろそろ夕食の時

間。さつきから、腹がグウグウ鳴っている。ジュースでも飲まなきや、やってられない。

「叱られるかな」

「適当に誤魔化しちゃえよ」

ちよつと心配そうな里香に、僕はそう言った。

「適当って？」

「口直で先生に用事を頼まれたとか言ってさ」

「嘘つくの？」

里香が、少し嫌そうな顔をする。

里香は、あまり嘘が好きじゃないのだ。

「仕方ないだろ。本当の事なんて、説明のしようがないし」

「それでもないよ」

僕の言葉に、里香がニヤリと笑ってそう言った。

何か、嫌な笑いだ。

「……何て言うんだよ？」

「裕一に襲われてたって言う」

ブツ

思わず、含んでたジュースを噴出してしまう。

って言うか、少し気管に入った。

盛大にむせてしまう。

そんな僕を見て、里香はケタケタと笑う。

いやいや、笑い事じゃないぞ。

せきが止まらない。

マジで死にそうだ。

「い……いや、お前、あれは……その……その……」

涙目で弁解する僕に、里香が笑いながら言った。

「ウソウソ、そんな事、言わないから」

お前、嘘嫌いなんじゃないのかよ。

心の中で抗議しながら、僕はもう一つ、ゲホリとせきをした。

「遅くまで、お邪魔しました」



玄関口まで送りに出てきた如月蓮華の母親に向かってそう言うと、吉崎多香子はペコリとお辞儀をした。

「いいのよ。それよりも……」

如月蓮華の母親はそこで言葉を区切り、吉崎多香子の顔をじっと見る。

「わたしのお願ひ……聞いてくれる?」

その言葉に吉崎多香子はしばし逡巡し、そしてこう答えた。

「約束はできません……。でも、善処してみます……」

まるで、何処ぞの官僚の様な、見方によつては無責任とも言える返答。

しかし、その言葉に如月蓮華の母親はその表情を緩ませる。

「……十分よ。ありがとう……」

そうして、吉崎多香子の長い時間は終わりを告げた。

「じゃ、行くぞ」

「うん」

荷台に乗った里香に、そう声をかける。

しつくりと、落ち着く感触。

ああ、やっぱりここは「里香の場所」だ。

そんな事をしみじみと思いながら、こぎ出す前に僕はもう一度里香の方を確認した。

里香は、じつと校舎の方を見ていた。

夜闇の中、月明かりに浮かびあがるそのシルエットは、昼間とはまるで違う印象をうける。学校の怪談なんか信じるたちじゃないけど、なんて言うか気味が悪い。一階の、職員室の辺りはまだ灯りが点いているけれど、それ以外の場所はもう真つ暗だ。

そんな校舎を、里香はじつと見つめていた。

いや、見つめていたのは、校舎だろうか。

僕には何となく、校舎のもつと上の方。そう、屋上の辺りを見つめている様に見えた。

僕もつられて、目を凝らしてみる。

月明かりの屋上。そこを覆う転落防止用のフェンス。その上――

ちよこんと座る、人影が見えた様な気がした。

気付いた瞬間、その人影もこちらを見ている様な気がして、思わず総毛が立った。

まさか。

いくらなんでも。

けれど――

「里香、行くぞ!!」

里香の答えを待たず、僕は勢いよくペダルをこぎ出した。

驚いた里香が抗議の声を上げるが、それにも構わず無我夢中でペダルをこぐ。

背中に感じる視線。

それから逃げる様に、僕は必死にペダルをこぎ続けた。

人気の失せた学校。

月明かりに照らし出される、無人の屋上。

「♪……君は王女 僕は召使い……♪」

そこに、何処からともなく、たおやかな歌声が流れる。

「♪……運命分かつ 哀れな双子……♪」

青い月の下、白と黒の陰影だけに支配された世界。

その中で、如月蓮華は一人フェンスに座り、*“その歌”*を歌っていた。

「♪……君を守る そのためならば……♪」

誰が聞くでもなく、誰に聞かせるでもなく、歌はただ、無人の屋上に流れては消える。

「♪……僕は悪にだってなつてやる……♪」

無造作に投げ出された足が、テンポをとる様にカツンカツンとフェンスを鳴らす。

「♪……もしも……♪」

虚ろな眼差しが見つめるのは、*“彼ら”*が去っていったその方向。

けれど、見つめるその場所に、もう求める人の姿はない。

「♪……生まれ変わるならば……♪」

虚空を見つめる瞳。

一滴の雫が、その頬をすべる。

「♪……その時はまた遊んでね……♪」

言葉の結びと共に、こぼれた滴が闇の中へと落ちて消えた。

続く

その日、僕は相応の覚悟を決めていた。他にある筈もない。如月蓮華の事だ。

里香に対して、あれだけの事をしたのだ。

もう、許す事も見過ごす事も出来なかった。

その姿を見た瞬間、力の限り怒鳴り飛ばしてやろうと思っていた。場合によっては、頬を張り飛ばしてやろうとすら思っていた。

他人の目も、噂も気にしない。停学になったって、知るものか。

あいつとのしがらみは、今日をもつて終わらせる。

絶対に。

そう息巻いて、僕は学校に向かった。

だけど――

その日、如月蓮華は僕の前に姿を見せなかった。

登校時も。

昼休みの時も。

あれだけ毎日付き纏ってきたのがウソの様に、僕の目の前からその姿はパツタリと消えた。

少々肩透かしを食らった気分だったところに、風の噂が聞こえてきた。

今日、如月蓮華は欠席していたらしい。

ひよっとして、昨日の事がそれなりに効いたりしていたのだろうか。まあ、それならそれで、せいせいする事は確かだ。久しぶりの開放感に、僕は少し気を抜いていた。

「ねえ、吉崎さん」

昼休み、あたしは吉崎さんに声をかけた。

「え、何ですか？」

何か物思いにふけていたらしい彼女は、あたしの声に驚いた様に

振り向いた。

「どうしたの？何か、疲れてるみたいだけど？」

「いえ、別に。何でもないですよ？」

そう言いながら頭を振る彼女には、それ以上の詮索を拒む様な雰囲気があった。

訊かれたくない事は、誰にでもあるものだ。

あたしはそれ以上突っ込むのを止めて、自分の用をきり出した。

『悪ノ召使』って知ってる？」

あたしの言葉に、吉崎さんが目を丸くする。

『悪ノ召使』って、あの『悪ノ召使』ですか？ボカロ曲の？」

ひどく意外そうに、そう言われた。

「知ってますけど、それがどうしたんですか？」

「うん。ちよつと、どんな歌かなって思ってる」

「先輩、ボカロに興味ありましたっけ？」

「そういう訳じゃないけど……ちよつと……」

「はあ……？」

吉崎さんは今一つ腑に落ちないといった顔をしながら、机の脇にかけてあった鞆を手にとる。

ゴソゴソと中をまさぐって取り出したのは、小さなウオークマン。

それにつないだイヤホンを、あたしに向かって差し出してきた。

「聞いてみますか？」

「持ってるの？」

「入ってます」

「好きなんだ」

「特に、そういう訳じゃないですけど……」

「じゃあ、どうして？」

「流行ってますから」

「そうなんだ」

あまりピンとこない答えだったけど、それはお互い様と言った所だろう。

とりあえずそう答えて、ヘッドフォンを受け取る。

『悪ノ娘』は知ってますか？」

ウォークマンを操作しながら、吉崎さんが訊いて来た。

「何？それ」

『悪ノ召使』の姉弟曲です。これとセットで、一つの物語になっているんです。そっちから聞いた方が、歌の内容が良く分かりますと思いますけど」

「じゃあ、お願い」

「はい」

そう言つて、吉崎さんがスイッチを入れる。

一拍の間。

そして――

『オーッホッホッホ!!さあ、跳きなさい!!』

突然そんな声が響いて、少しビツクリした。

人間とは違った、キーの高い声。これが、ボーカロイドとやらの声なのだろうか。

先の台詞の後、音楽が鳴つて歌が始まった。

『♪むかしむかしあるところに……♪』

最初は、「悪ノ娘」という曲。

人間とは違った調子の声は最初聞き取り辛かったけど、その内慣れて気にならなくなった。

目を閉じて、歌の内容に集中する。

歌の舞台は、多分中世の欧州辺りをイメージしている。

主役はある国を治めていた、齢14歳の王女様。

傲慢な性格の彼女は、己の欲望の趣くままに、様々な悪政を行う。

自国の民には圧政を強い、刃向かうものは尽く粛清する。

想いを寄せる男性の心が他の女性にあると知れば、嫉妬に狂つて戦争を起こし、その女性の国を滅ぼしてしまう。

人々がどんなに苦しみの声をあげても、彼女が言う言葉は一つだけ。

「あら、おやつ時間だわ」

けれど、そんな暴政も長くは続かない。  
やがて、耐えかねた国民が革命を起こす。  
長い戦で疲弊した兵士達は敗走し、家臣たちも逃げ出してしまふ。  
広い城に、たった一人残される王女。  
彼女は民衆に捕えられ、投獄される。  
そして、〃その時〃がやって来る。  
教会の鐘が鳴る中、彼女は処刑される。  
その最期の言葉も、「あら、おやつの時間だわ」。  
その様に、後の人々はこう語る。  
彼女はまさに「悪ノ娘」と。

……よくある話だ。

悪政者はその所業に相応しい哀れな末路をたどる、勸善懲悪の話。  
筋書きもお手本にそって作ったような内容で、別に聞く者を驚かせ  
ようと捻った所もない。

歌としても物語としても、取り立ててどうと言うものではない。  
それが、正直な感想。

あたしがそう思っていると、曲が切り替わった。  
ぜんまいを巻く様な音。

先の「悪ノ娘」のメロディーを奏でる、オルゴールの音色。  
鳴り響く鐘の音。

そして――

「♪君は王女 僕は召使……♪」

聞き覚えのある旋律と歌詞。

「悪ノ召使」だ。

あたしはもう一度、歌に意識を向けた。

舞台は先の「悪ノ娘」と同じ、中世の欧州。

今度の主役は、王女に仕えていた召使。

彼は、王女の双子の弟だった。

期待の中、祝福されて生まれた二人。

けれど、周りの大人達の思惑で二人の未来は二つに裂かれる。

一人は一国の王女。

一人はその召使。

その時から、二人の運命の歯車は狂い始める。

悪逆非道悪の王国の中で、悪の娘と呼ばれて孤立していく王女。

彼女を護るため、姉弟の彼は自らも悪に染まる事を覚悟し、罪を重ねていく。

自身の良心も、淡い恋心すらも犠牲にして。

やがて起こる、あの革命。

それを報いと知りながら、彼はあえてそれに抗う道を選ぶ。

全ての家臣が逃げ出し、二人きりになった王宮の中で、彼は王女に言う。

「ほら、僕の服を貸してあげる」

「これを着てすぐ、お逃げなさい」

「大丈夫、僕らは双子だよ」

「きつと、誰にも分からないさ」

そして、彼は王女として捕えられ、処刑される。

自分が全てをかけて護った彼女の幸せと、来世での再会を願いながら……。

『♪……もしも、生まれ変われるならば その時はまた遊んでね

……♪』

そう言葉を結び、歌は終わった。

「ありがとう」

お礼を言いながら、イヤホンを吉崎さんに返す。

「どうでした?」

「……召使、死んじゃうんだね」

「そうですね。悲しい歌です」

ウォークマンを鞆にしまいながら、吉崎さんがそう言う。

でも……

「そうかな……?」

「……?」



あたしの言葉に、吉崎さんが小首を傾げる。

そんな彼女に、あたしは言った。

「あたしは、幸せな歌だと思う。」

「幸せ……ですか？」

目を丸くする吉崎さんに、あたしは頷く。

「これ……悲劇だと思うんですけど、どこが幸せなんですか？」

納得いかないと言う風に尋ねられて、それでもあたしは頭を振った。

確かに、これは悲劇だろう。

十人が聞けば、十人がそう答えるに違いない。

でも、あたしの耳の中には、「彼」の言葉が残っていた。

『——例え世界の全てが 君の敵になろうとも 僕が君を守るから 君は何処かで笑っていて——』

そう。彼は遺したのだ。

自分の姉弟に。

最も愛した片割れに。

笑う事が出来る未来を。

「今」は無理だろう。

それでも、いつかは必ず笑える日が来る。

彼女を縛っていたのは、「悪ノ娘」という名の悪しき形骸。

彼が己の命を代価に奪い去ったのは、その束縛。

彼女を縛る鎖は、もう存在しない。

あるのは、自由に羽ばたける未来だけ。

後に残る者に、確かな「未来」を遺す事が出来る。

こんなに、素晴らしい事があるだろうか。

「あの娘」の言葉が、頭を過ぎる。

(……アンタ「達」は、いつもそう……)

あの夕闇の中で、薄い唇が紡いだ言葉。

(今生きてる人の……これから生きてく人の……何もかもをかつき  
らっていつてしまう……)

耳元で囁かれた言葉。今でもはつきりと耳に残っている。

(心も、夢も、希望も、未来までも奪い去って、それで自分だけ消えてしまう!!)

彼女の言う事は間違いじゃない。

あたしは、奪うだけ。

裕一の夢を。

未来を。

彼は言ってくれた。

あの日の暗い病室で。

昨日の暗い廊下で。

「わかってる」と。

「全部わかってる」と。

だけど。

だけど。

愛する者に、未来を遺した召使。

彼の未来を、奪うだけのあたし。

その事に、羨望の想いを抱く事は罪だろうか。

「……幸せな、歌だよ……」

どうにも腑に落ちないと言った顔をしている吉崎さんに、あたしはもう一度そう言った。

昼食を食べ終えた後、あたしは机に頬杖をつきながら、ボンヤリとしていた。

(わたしのお願い……聞いてくれる?)

頭の中では、昨夜の如月蓮華の母親の言葉がリフレインしていた。

彼女には「善処する」と言ったものの、実際どうしたものだろうか。

絶対の条件として提示されたものではない。

“それ”がどんなに困難な事か、一番知っているのは誰でもない。彼女自身だ。

だけど、それを承知で彼女はこちらが求める“もの”を教えてくれた。た。

そこには、自分の娘の暴走を止めたいという想いと、彼女を救いた

いという想いが混在しているのだろう。

求める“もの”を教えてもらった以上、それに応えるのが人の道義というものかもしれない。

だけど、先にも言った通りそれは非常に困難極まる事だ。

あたしには、それを成す自信はない。

と言うか、正直ゴメンこうむりたい。

しかし、向こうはこちらの望みに応えて、おそらくは思い出すのも辛いであろう心の傷を自ら抉り返したのだ。

それをただ無理と拒絶するのも、正直気が引ける。

じゃあ、どうするのか。

そして思考は元に戻る。

結局、昨夜からこの繰り返しだ。

いい加減、ウンザリしてきた。

けど、だからといって棚上げする事も出来ない。

全く、自分はいっからこんなにお人好しになってしまったのだろう。

ちよつと前までの自分だったら、クラスでの立ち位置とか、今の流行ものとかそんな事だけが世界の全てで、正直自分に関わってきさえしなければ、他人の事なんかどうでも良かった。

それが、今はどうだ。

こんな自分には関わりのない事に自ら首を突っ込んで、今みたいに面倒事に巻き込まれている。

全く、どこで人生の分岐路を間違えたのだろう。

そんな事を考えていたら、

「ねえ、吉崎さん」

急にそんな声が聞こえて、あたしを我に返させた。

見れば、そこには件の分岐路であたしを惑わせた張本人―秋庭里香が立っていた。

「どうしたの？何か、疲れてるみたいだけど？」

一瞬、誰のせいかなどと言いたくなかったけど、そもそもこつちが勝手にやっってる事。恨み節を言う訳にもいかない。だから、「いえ、別

に。何でもないですよ？」などと行って、適当にお茶を濁しておいた。こちらの心情を察したのか、先輩はそれ以上の詮索はせずに本題に入ってきた。

『悪ノ召使』って知ってる？』

その言葉に、あたしは思わず目を丸くしてしまった。

この女の口から、そんな単語が飛び出してくるとは思わなかった。

『悪ノ召使』って、あの『悪ノ召使』ですか？ボカロ曲の？』

意外そうにそう言ったら、ひどく心外そうな顔をされた。

「知ってますけど、それがどうしたんですか？」

「うん。ちよつと、どんな歌かなって思ってた」

「先輩、ボカロに興味ありましたっけ？」

「そういう訳じゃないけど……ちよつと……」

「はあ……？」

先輩にしては珍しく、どうも歯切れが悪い。

あたしは今一つ腑に落ちないながらも、机の脇にかけてあった鞆を手にとる。

件の曲なら、丁度ウオークマンの中に入っている。

友達の中に何人かはまっている娘がいて、話を合わせるために聞いていたものだ。

ウオークマンを取り出して、それにつないだイヤホンを先輩に向かって差し出す。

「聞いてみますか？」

と訊くと、

「持ってるの？」

と訊き返してきた。

「入ってます」と応えようと、

「好きなんだ」と言われた。

あくまで周りと話を合わせるために聞いているのであって、あたし自身はさほどはまっている訳ではない。そう言うと、「じゃあ、どうして？」と不思議な顔をされた。「流行ってますから」と答えるとあまりピンとこないという顔をされた。

綾子といい、この女ひとといい、どうもこういう感性においては今だにすれ違いが多い。面倒な事だ。

まあ、向こうもそれ以上突っ込んでほなかったのも、とりあえずイヤホンを渡した。

一応、『悪ノ娘』は知ってますか？」と訊いてみると、「何？それ」などと返してきた。

この曲を知らなくて、なんで「悪ノ召使」を聞きたいなどと思いつたのか。今一つ理屈が分からないが、とりあえず説明すると「じゃあ、お願い」との事。よく分からないまま、あたしはウォークマンのスイッチを押した。

先輩は目を閉じ、一心に曲を聴いていた。

それこそ、声をかけるのとはばかられるくらいの真剣さで。

何か、あったのだろうか。この曲に、何か思う所でもあるのだろうか。

そんな事すら思わせる様子だった。

「ありがとう」

曲が終わったのか、先輩がそんな事を言いながらイヤホンを外して返してきた。

「どうでした？」とあたしが訊くと、「召使、死んじやうんだね」との言葉。

「そうですね。悲しい歌です」

ウォークマンを鞆にしまいながら、何気なくそう言うのと、

「そうかな……？」

そんな言葉が返って来た。

この曲を表現するのに、他に言葉があるのだろうか。怪訝に思っていると、先輩はこう言った。

「あたしは、幸せな歌だと思う……」

「幸せ……ですか？」

思いがけない言葉に目を丸くするあたしに、先輩は頷く。

「これ……悲劇だと思っただけですけど、どこが幸せなんですか？」  
さすがに納得がいかないのでそう尋ねると、先輩は黙って頭を振り、その視線を窓の外へと向ける。

その顔を見て、あたしは「ああ、まただ」と思う。

先輩は、時々こんな目をする。

話をしている時。

廊下を歩いている時。

授業中のふとした瞬間。

こんな目をして、外を見る。

そんな時の先輩の目は、とても優しく、そして澄み通っている。

その瞳が何を見ているのか、あたしには分からない。

ひよつとしたら、あたし達には見えない何かを見ているのかもしれない。

分かるのはただ、その時の先輩の瞳は、この上もなく綺麗だと言う

事だけ。

「……幸せな、歌だよ……」

空を見ている先輩が、呟く様にそう言う。

その声を聞いて、あたしは考えるのを止めた。

「ありがとう。吉崎さん」

そう言って、先輩が席を立つ。

「あ、先輩!! そう言えば……」

思わずその背に声をかけ、あたしは固まった。

「何? 吉崎さん」

先輩が訊いて来る。

あたしは最初、昨日如月蓮華の家で聞いた事を先輩に伝えるつもりだった。だけど、よくよく考えてみれば、あれは先輩に聞かせるべき話なのだろうか。

先輩と、戎崎裕一。二人によく似た境遇だった、蓮華の姉と少年。

その二人がたどってしまった、あまりにも救いのない結末。

それを先輩に教えるのは、余りにも残酷な所業の様に思えた。

先輩が、怪訝そうな顔で見つめてくる。  
どうしよう。

教えるべきか。否か。  
しばしの逡巡。

そして――

「いえ……何でもないです……」

あたしの答えに、先輩は不思議そうな顔をしながら立ち去って行った。

……耳の中で、あの曲が何度も繰り返される。

それを奏でるボーカロイドの声は、いつしか「あの娘」の声に挿し代わり、頭の中で反響する。

あの娘は何故、この曲を歌っていたのだろう。

あんなにも綺麗に。

あんなにも寂しげに。

一体、どんな想いを込めて歌っていたのだろう。

一体、どんな願いを込めて歌っていたのだろう。

いくら考えても、答えは出ない。

『♪……例え世界の全てが 君の敵になろうとも 僕が君を守るから 君は何処かで笑っていて……♪』

ただ、あのフレーズだけが、いつまでも響いては消えていった。

その時、教室には誰もいなかった。

その日、五時間目の授業時間。

科目は体育。

生徒も、そして教師も、授業のために校庭へと出払っていた。  
くりかえそう。

それは、五時間目の授業時間。

当然、他の教室の生徒達も授業中。

無人の教室は、ひっそりと静まり返っている。

――と、

カララ……

無機質な音が響き、教室の扉が開く。

カツ カツ カツ

誰もいない教室に、響く足音。

それは、いくつもの机が並ぶ中、迷う事無くその中の一つに向かつていく。

カツリ

机の脇で止まる足音。

その机の脇に下げられた鞆。

それに、スウと白い手が伸びる。

手は鞆の中に潜り込むと、その中から何かをつかみ出す。

それは、ピンク色をし、可愛いストラップのついた携帯電話。

パクリ

軽い音が響き、携帯が開けられる。

カチ カチ カチ

細い指が踊り、手早く携帯を操作していく。

やがて、その画面に浮かぶのはメールの作成画面。

カチ カチ カチ

踊る指。入力されていく文章。

そして――

ピッ

映し出される、メールの送信画面。

しばしの間。

パチリ

先と同じ様に、軽い音を立てて閉じられる携帯。

白い手が、携帯を再び鞆へと戻す。

カツ カツ カツ

響く足音。

ピシヤン

閉じられる、教室の戸。

そして無人の教室は、再び沈黙へと包まれた。



続  
く

―想い歌―・☒

―21―

……罪がある。

例え、万人がそれと認めなくとも。

例え、万人がそれを否定しても。

存在する、罪がある。

例えそれが、皆が賛美する美談であったとしても。

例えそれが、皆が涙する哀話だったとしても。

そこには必ず、罪がある。

日の光の下に、ひっそりと、だけど必ず影が出来る様に。

皆が見つめる光の裏に、必ずそれはあるのだ。

そして、例え当人達がそれを知らないとしても。

例え当人達がそれを承知で受け入れているとしても。

――罪は、罪――

ならば、裁かれねばならない。

なぜならそれは、罪なのだから。

まごうことなき、罪なのだから。

――罪は、罰せられなければならないのだから――

結局、その日は何事もないまま平穏に過ぎた。

過ぎる、筈だった。

けれど、それは間違いだった。

僕は。

僕達は。

それでもまだ、甘く見ていたんだ。

如月蓮華という少女が抱える、闇を。

「あれ？メールが来てる」

校門を出たところで、里香が自分の携帯を見てそう言った。

僕らと同じ様に、当然里香も携帯を持っている。里香の場合、もしもの時のための緊急コールとしての役目も担っている。その存在は、僕達よりも重要だ。

でも、そこは真面目な里香の事。

学校内では絶対に使わない。

こうして放課後、学校を出てからメールや着信記録を確認するのが日課だった。

とは言っても、里香のアドレスを知っているやつは少ない。

やたらめつたらアドレスをばら撒く性格ではないし、そこまで深い仲の相手が少ないと言う事もある。僕や母親の他には、みゆきや司、山西、そして後は数人の同級生。そのくらいだ。だから、こうやって確認をしてもメールなんてめつたに来てない。

珍しいな、と思いつつ僕は「誰からだよ」と訊いた。

「……吉崎さんから」

吉崎？吉崎って、吉崎多香子の事か？

アイツが里香にメールなんて、何の用だろう。里香とは同じクラスなのだから、直接話せばいいだろうに。

「何だっつてんだ？あいつ」

「ちよつと待って。今、読むから」

見ていると、メールを読む里香の顔が、だんだん真剣味を増している。一体、何が書いてあったのだろう。そんな事を考えながら見ていると、里香がパチンと携帯を閉じながら言った。

「裕一、あたし、ちよつと学校に戻る」

「え？何だよ？」

「吉崎さんからのメール。ちよつと話したいことがあるって」  
そう言いながら、自転車の荷台から降りる里香。

「明日じゃ、駄目なのか？」

「駄目。今日の内に話したいって」

「何なんだよ？一体」

「裕一には、関係ないよ」

そっけなく言いながら、里香は歩き出す。

「裕一、先に帰っていいよ?」

「そんな訳にいかないだろ。待ってるから、早く戻ってこいよ」

僕の言葉に微笑むと、里香は踵を返して夕闇の迫る校舎へと戻っていった。

携帯に表示された名前を見て、あたしは首を傾げた。

——吉崎多香子——

吉崎さんからのメールなんて、滅多にない。同じクラスだから、大抵の事はその場で話してしまう。今日だって、お昼休みに話している。

それが、今に限ってどうしたのだろうか。

とりあえず、メールの内容を見てみる。

『放課後、視聴覚教室で待ってます。来てください。by如月蓮華』  
思わず、息を呑んだ。

彼女は、今日は欠席だと聞いていた。

それが、どうして。

もう一度、文を読み直す。

一切の無駄を排した、簡潔な文。

文面だけ見れば、想い人を呼び出す恋文の様にすら思えるそれ。

「来てください」の一文に滲み出る、込められた意思の強さ。

液晶画面に映るデジタル表示のそれは、前に彼女が裕一に送った手書きの恋文よりも強い想いが感じられた。

一瞬の逡巡が、頭を過ぎる。

あの娘は知っている。

あたしの持つ、病を。

あたしが犯す、罪を。

思い出されるのは、昨日の屋上での事。

夕闇を背負った彼女が浮かべる、歪んだ笑み。

見つめてくる、冷たい瞳。

心を抉る、鋭い言葉。

行けば、またそれらと向かい合う事になる。

それを思うと、背筋が震えた。けど。

だけど。

チラリと、前の席でこつちを見ている裕一を見る。

事の次第が分からず、「？」となつている間の抜けた顔。

それが昨日の、彼の顔に重なる。

必死で、情けなくて、真剣で、そして、優しい顔。

その時感じた、彼の存在。

肩を掴む、手の熱さ。

ぎゅつと抱き締めてくる、腕の感触。

微かに漂う、汗の匂い。

それは、あたしに生きる意味をくれた、存在そのもの。

そう。

彼がいたから、あたしはあの時、生きる事を選べた。

彼がいるから、あたしは今、生きていられる。

だから。

だから。

あたしは、彼を放せない。

否、放さない。

それが、どれだけ自分本位な事だとしても。

それが、どんなに罪深い事だとしても。

ならば。

それならば。

向き合おう。

もう一度。

彼女に。

自分の罪の体現に。

そして、今度こそ言い放とう。

何の虚飾も、言い繕いもなく。

自分の。

自分の想いを。

パチン

音を立てて、携帯を閉じる。

そして、あたしは怪訝そうな顔をしている彼に向かって言った。

「裕一、あたし、ちよつと学校に戻る」

カツ カツ カツ

夕闇の満ち始めた廊下に、乾いた足音が響く。

放課後の廊下。人気の失せた廊下を、秋庭里香は視聴覚教室に向かって歩いていった。薄闇の向こうには、件の教室の扉が浮かび上がる様に見えている。それに向かってわき目も振らず、秋庭里香は歩いていく。

一歩。

また一歩。

少しずつ。

しかし確実に、近づいていく。

やがて、その扉の前に立つた秋庭里香は大きく一吸い、深呼吸をするとその扉を開いた。

夕方の視聴覚教室は、薄暗くて静かだった。

一歩中に入ると、校庭から聞こえていた運動部の人達の声が一気に遠くなる。

部屋に、防音設備が施されているせいだろうか。

それとも、もつと何か別の理由だろうか。

教室の中を見回す。

彼女の姿は見えない。

まだ、来ていないのだろうか。

そう思っただけ振り返ろうとしたその時、  
ボタン

唐突に、扉が閉まった。

遠くなっていた外界の音が、さらに遠くなる。

「……来てくれるって思っていました。秋庭さん」

いつの間にか後ろにいた彼女が、閉ざされた扉の前で笑っていた。

ガチャン

後ろ手で鍵をしめる音。静かな部屋の中には、それはやけに大きく響く。

「さあ、これでここにいるのはあたし達だけです」

そう言いながら、手に持っていたものを机の上に放る。軽い音を立てて机の上に転がったのは、この視聴覚室の鍵。

「逃げ場はないですよ。お互いに」

そう言って、彼女——如月蓮華は綺麗に笑った。

「だけど、結構人が良いですね。秋庭さん。昨日の今日だったのに。それとも、あたしのラブレター、そんなに強烈でした？考えて考えて考え抜いて、その結果があの一文。シンプル・イズ・ザ・ベスト!! 戒崎先輩の時ののは、ちよつと装飾過多だったかな？」

そう言って、彼女はケタケタと笑う。

「だけど、それは表面だけの笑い。」

昨日の彼女を見た、今なら分かる。

その、笑みの影に隠れた冷たさも。

その内に秘められた、仄暗い滾りも。

「……今日は、欠席だつて聞いてたけど？」

あたしの問いに、彼女は笑いながら答える。

「そうですね。ちゃんと、今日は休みますって電話しました。だから、今日あたしは学校（こ）にいない事になってます」

「何で、そんな事……」

「何で？」

ピタリと止まる笑い声。彼女の目が、キュウと細まる。

「決まってるじゃない。誰にも邪魔されない様にだよ。これからの事を……」

そんな言葉と共に、暗い瞳があたしを見据えた。

「ここの視聴覚教室はいいね。防音設備がちゃんとなってる。おかげで外に音が漏れない」

言いながら、彼女はコンコンと壁を叩く。

「そう言えば、文化祭の時に、ここで男共がポルノビデオの上映会やってたんだって？やだねえ。男共つてのはこれだから」

そう言つて、また声だけでケタケタと笑う。

「聞く所によると、戎崎先輩も参加してたらしいね。駄目じゃない。付き合ってる男を欲求不満にさせとくなんて、女の名折れだよ」

本気なのか冗談なのか、判然としない口調。

「……用は、何？」

あたしの問いに、彼女は壁の方を向いたまま答えた。

「最後通告」

「最後通告？」

「そう。最後通告」

顔は壁を向いたまま。

声だけが、壁に反響する様に返ってくる。

「最後通告つて、何？」

「分かってるくせに」

声に、暗い陰がこもる。

背筋に走る悪寒。

それを、ぐつと堪えて言い返す。

「分からない」

「嘘」

そう言いながら、彼女が振り返る。

振り返ったその目には、あの暗い炎が灯っていた。

胸の内が、ザワリと疼く。

「アンタは分かってる。誰よりも」

言いながら、ツカツカと近づいてくる。

触れるほどに近づく、顔。

暗く揺れる瞳に、あたしの顔が映った。

「アンタと一緒にいたら、戎崎先輩は未来を失う」



ザクリ

胸を抉る、鋭い言葉。

「アンタは、戎崎先輩の全部を奪っていく」

ザクリ

ザクリ

切り刻まれる、心。

「そしていつか、自分だけいなくなる」

ヒヤリ

頬に走る、冷たい感触。

音もなく上がった手が、あたしの頬を撫でていた。

「そんな事が許される？許されると思ってる？」

あたしの頬を觸る、白い手。

「ねえ。許されると、思ってるの？」

暗い瞳。

暗い、暗い瞳。

暗い輝きの中に映る、あたしの顔。

「許されないよね？許される筈、ないよね？」

薄い唇が、耳元で囁く。

許されない？

そう。許されないのだ。

許される筈もない。

そんな事は。

決して。

決して。

「ねえ。分かるでしょ？分かる筈でしょ？」

優しく、言い聞かせる様に。

冷たく、咎める様に。

そう。あたしは分かっている。

何もかも。

とつくの昔に。

「だったら……」

だから、知っている。

彼女の声が、これから紡ごうとするその言葉も。

あたしが受け入れなければならぬ、その宣告も。

「戎崎先輩と……」  
そう。

彼女の言おうとしている事は正しい。

本当に。

本当に。

彼の事を思うなら。

あたしは、そうするべきなのだ。

そうしなければ、いけないのだ。

そんなあたしの心を見透かす様に、彼女はほくそ笑んで――  
そして言った。

「別れて」

「別れないよ」

あたしの言葉に、彼女はスウと目を細める。

その手が、あたしの頬から離れた。

「……本気？」

「うん。裕一とは別れないし、離れない」

あたしは言う。

一句一句に、力を込めて。

「アンタ、病気なんだよね？」

彼女が、問う。

「うん」

あたしは頷く。

「死ぬんだよね？」

一寸の躊躇もなく紡がれる、その言葉。

「うん」

だからあたしも、躊躇なく頷く。

「なら……」

「でも、駄目」

言い放つ。きつぱりと。

「裕一は、あたしのもの」

彼女の肩が、ピクリと震える。

「約束したの。いっしょにいるって。ずっと、いっしょにいるって。だから、裕一はあたしのもの。渡さない。誰にも。もちろん、あなたにも」

「……………」

秋庭里香の言葉に、如月蓮華は沈黙した。

彼女は最初、無言で立ち尽くし、やがて脱力した様に俯いた。

しばしの間。

如月蓮華は、何も言わない。

秋庭里香も、何も言わない。

やがて、俯いていた如月蓮華がゆっくりとその顔を上げていく。

暗い瞳が、再び秋庭里香の姿を映す。

すっかり夕闇に沈んだ教室の中で、それは妙に輝いて見えた。

続く

―想い歌―・☒

―22―

昔々、ある王国に生まれた双子の姉弟。

一人は王女。

一人は召使。

召使<sup>彼</sup>は誓う。

例え世界の全てが敵になろうとも、王女<sup>彼女</sup>の笑顔を守ろうと。

そして、その誓いは違う事なく守られる。

世界の全てが敵となる中、彼は彼女を守りきる。

自分の命を代価にして。

自分の全てを代償にして。

今は無理かもしれない。

けれど、その時は必ずやってくる。

遺された彼女が、心から笑える日が。

そのために、彼女の未来は守られたのだから。

彼がそう、望んだ様に。

だけど。

だけど、それならば。

王女を守れなかった召使は、どうすればいいのだろう。

守るべき者を。

守るべき未来を守れなかった召使は。

その後を。

その後の生を。

一体。

一体何のために。

何のために生きればいいのだろう。

答えは、見えない。

まだ、見えない。

音もなく流れる、黒い髪。だけど、その流れ方にいつもの艶やかさがない。目印のサイドテールも、纏め方が雑な様だ。よく見れば、制服にもしわがよって、くたびれてる様に見える。ひよつとしたら、昨日から着替えすらしていないのかもしれない。

「……まいったなあ……」

話す声に、疲れた様な響きがこもる。

「秋庭さん、頭良いから、分かってくれると思ってたんだけどなあ……」

顔にかかる髪を払いながら、如月蓮華は言う。

「まいったっちゃった。本当に、まいったっちゃた」

まいったまいったと繰り返しながら、彼女はゆっくりと秋庭里香に近づいていく。

フラフラと揺れるサイドポニーが、秋庭里香の目の前で止まった。

「全く、しょうがないなあ……」

ボソリと呟く声が、微かに耳にさわる。

「本当に、全くもって、しょうがない……」

「——!？」

不意に走る悪寒。

秋庭里香は、反射的に身を逸らす。

ヒュッ

それまで彼女の首があった場所を、鋭い軌跡が通り過ぎた。

「ああ、避けないでよ」

抑揚のない声で、如月蓮華が言う。

その手に握られていたのは、ひと振りのカッターナイフ。

「あれだけ話してもダメだったんだもの。もう、ホントに、しょうがないよね？」

そう繰り返す、如月蓮華。

窓からさし込み始めた夕日の中で、手にした刃が冷たく光った。

「……遅い!!」

携帯の時計を見ながら、僕はそう呟いた。

里香が吉崎に呼ばれたとか言って校舎に戻ってから、もう四十分は経っていた。

何の話か知らないけど、ちょっとかかり過ぎではないだろうか。

一瞬、僕も行ってみようかとも思ったけど、余計な事をしてまた里香にへそでも曲げられたらかなわない。

どうしたものかとうつつしているとき、

「何してるんですか？ 戎崎先輩」

聞き覚えのある声が、背後からかけられた。

驚いて振り返ると、そこには鞆を持った吉崎多香子が立っていた。

「え!?!お前、何でいるんだよ!?!」

「いちや悪いんですか?」

僕の言葉に、ムツとしたように吉崎は言う。

「放課後ですよ。学校の外にいちやいけない道理でも?」

「い、いや、そういう訳じゃないけどさ。じ、じゃあ、里香はどうしたんだよ?」

それを聞いた吉崎が、怪訝そうな顔を顔をした。

「秋庭先輩? 秋庭先輩がどうかしたんですか?」

その言葉を聞いた時、僕は嫌な、酷く嫌な予感が背筋を這い上がるのを感じた。

「……どういふつもり……?」

ジリジリと距離をとりながら、秋庭里香は如月蓮華から目を離さずに尋ねる。

「見て、分からない?」

手にしたカッターをキチキチと鳴らしながら、如月蓮華が言う。

「死んでよ」

暗く滾りながら、それでいて酷く冷めた瞳が秋庭里香を見据える。「どうせ、死ぬんでしょ。だったら、今死んだって大して変わりないじゃない」

抑揚のない声。壊れたスピーカーの様に、感情の死んだ声。それが、音のない教室の中にクワンクワンと響く。

ゆつくりと近づいて来る、如月蓮華。ジリジリと下がる、秋庭里香。冷たい汗が、秋庭里香の頬をつたう。

「……それで、どうするの?」

「……?」

その言葉に、如月蓮華は小首を傾げる。

「こんな事をしたって、裕一はあなたのものにならないよ」

「だろうね」

返ってきたのは、そんな答え。

「分かっているの?」

「分かっているよ」

何を当たり前前の事を、と言わんばかりの態度で如月蓮華は言う。

「許さないだろうね。戎崎先輩。許す訳ないよね。でも、それがどうしたの?」

カツン

如月蓮華の足が、また一步近づく。

後ずさる秋庭里香。

「アンタが今いなくなれば、先輩はアンタの呪縛から解放される」  
カツン

また一步。

秋庭里香もまた一步、後ずさる。

「アンタが今いなくなれば、先輩の未来は守られる」  
秋庭里香の背中が、ドンと何かに当たる。

後ろを振り向くと、いつの間にか彼女は壁際に立っていた。

如月蓮華が微笑む。

綺麗に。

ゾツとするほど綺麗に。

「それで十分。あたしは、それで十分」

笑っている様な、それでいて泣いている様な、奇妙な表情。それを顔に貼り付けながら、彼女はツと左手を上げる。

ススッ

冷たい指先が、秋庭里香の首筋をなぞる。身を竦ませる彼女を見

て、如月蓮華はまたフフと笑む。

「知ってる?ここにね、頸動脈があるの」

笑みながら、カタカタと壊れた自動人形オートマタの様に言葉を紡ぐ。

「これを切れば、一気に血が出るの。そうしたら、出血性ショックで苦しむ間もなく逝ける」

刃を持つ右手が、ゆつくりとその高さまで上がる。

「動かないでね。狙いが外れたら、余計に痛いから」

そう言っつて、如月蓮華は逆手に持ったカッターを秋庭里香の首に向かつて突き立てた。

「ど、どういう事だよ!?里香はお前にメールで呼ばれたって言っつて戻ったんだぞ。それがどうして……」

「何の事ですか?あたし、先輩にメールなんかしてませんよ?」

僕の問いかけに、吉崎は訳が分からないと言っつた顔で返してくる。ますます混乱する僕に何かを感じたのか、吉崎が訊いてくる。

「どうしたんですか?先輩に、何かあつたんですか!」

「どうも……」

僕の話聞いた吉崎は、慌てて自分の携帯を取り出すとカチカチと操作を始めた。

どうやら、メールの送信履歴を確かめているらしい。

やがて、彼女の顔が青ざめる。

「戎崎先輩、秋庭先輩にメールしたの、あたしじゃありません!!」

「ええ!?じゃあ、一体誰だよ!」

「如月です!!如月蓮華です!!」

それを聞いた瞬間、僕を軽い目眩が襲う。

「な……何でだよ!?今日はあいつ、欠席だつたんだろ!」

「その筈なんですけど……ほら!!」

そう言っつて目の前に突き出された携帯の画面には、簡潔な文章と、確かに「如月蓮華」の文字が記されていた。

それでも僕には、納得がいかない。

「そんな……。じゃあ、何でそのメールがお前の携帯から送られて



来るんだよ!？」

「今日、あたし達のクラスは五時間目が体育で、皆出払ってたんす!!送信された時間から察するに、多分その時間に教室に忍び込んであたしの携帯を……!!」

もう訳が分からなかった。

今の事態も。

如月蓮華の所業も。

何もかも訳が分からなかった。

蓮華と吉崎がグルになつて、僕と里香をからかつてるんじゃないか？

そんな可能性すら考えた。

だけど、

「先輩、何してるんですか?!早く行きましょう!!」

そう言う吉崎の切羽詰った顔が、そんな考えを吹っ飛ばす。

「早く!!止めないと!!あの娘、何をするか分からない!!」

「ど、どういう事だよ!？」

「事情は行きながら説明します!!今はとにかく視聴覚教室へ!!」

そんな吉崎の声に押される様にして、僕は走り出していた。

キーンツ

鋭い音を立てて、折れたカッターの刃が宙に舞った。

突き立てられた刃はかろうじて反らされた首をかすめ、後ろの壁へと当たっていた。

それで、薄い金属の刃はアツサリと折れて飛んだ。

追い詰められた壁際。

生暖かい感覚が、首筋を滑り落ちる。それに、秋庭里香はまた背筋を震わせた。

「……避けないでって言ったのに……」

秋庭里香の顔の横で、刃の欠けたカッターを壁に押し付けながら、如月蓮華はそう呟く。

憎々しげな声が、薄闇に落ちた教室の中に響いた。

「……本気、なんだ……」

「何を今更」

その問いにそう答えながら、如月蓮華は秋庭里香の顔を覗き込む。  
「怖い？」

問いかける言葉。

「……………」

けれど秋庭里香は、答えない。

ただ凜とした瞳で、如月蓮華を見つめ返す。

「ねえ、怖い？」

もう一度、かけられる問い。

「…………怖くない」

彼女の問いに、秋庭里香がようやく答えを返す。

その答えに、如月蓮華はキョトンとした顔をする。

「何で？」

「……死なないから」

「…………は？」

その言葉の意を汲みかねると言った態度で、如月蓮華は小首を傾げる。  
る。

「言ったまま。あたしは、死なない」

その言葉を、秋庭里香は繰り返す。

ポカンとする、如月蓮華。

「……さっき言ったじゃない。死ぬって」

「うん。だけど……」

微かに青ざめた唇が、その言葉をハッキリと紡ぐ。

「死なない」

ますます分からないと言った風に、如月蓮華は小首を傾げる。

「何言ってるのか、分かんない」

「だから、言ったまま」

秋庭里香の手が、カッターを握る手を掴む。

「あたしはいつか死ぬ。それは確か。だけど、それなら『その時』  
が来るまであたしは絶対に死なない」

「……!!」

如月蓮華が、驚いた様に見開く。

「ずっといつしよにいる。それが、裕一との約束だから。」  
その言葉が、確かに彼女を打ち据えた。

「オレを死んだ姉と重ねてる!? 何だよ、それ!? 訳わかんねえぞ!!」  
視聴覚教室に向かいながら、吉崎から聞いた話に僕は仰天していた。

「あたしだって、完全に理解出来るわけじゃないです!! だけど、それだけは間違いありません!!」

怒鳴る僕に怒鳴り返しながら、吉崎が走る。

校内に残っていた生徒達が、何事かと目を丸くして僕らを見る。だけど、そんな事に構ってはられない。走りながら、僕は蓮華の目を思い出していた

暗く澱んで、それでいて沸々と滾るあの眼差し。

と、それに絡まる様に甦ってくる記憶があった。

暗い屋上。

漂う、酒の臭い。

顔を殴ってくる、拳の硬さ。

腹を蹴ってくる、鈍い衝撃。

転がったコンクリートの、冷たい感触。

そうか。

僕ははつきりと思い出した。

あの瞳を。

あの暗さを。

あの、沸々と燃え滾る様な冷たさを。

あれは、“あの時”の夏目の瞳だ。

病院の屋上で、僕をボコボコにした時の夏目の瞳だ。

暗くて、冷たくて、沸々と沸き立って。

人を傷つけてくるくせに泣きそうで、酷く痛そうな、あの瞳。

泣きながら、何かに傷つきながら、誰かを傷つける人間の目。

知らず知らずの内に、身体が震えていた。  
身体が内側から引っくり返ってくる様な、嫌な感覚だった。  
何だよ、お前!!

里香に、何する気なんだよ!!

頭の中の蓮華に、そう呼びかける。

だけど答えなんて、返ってくる筈もなかった。

「……凄いなあ……」

半分感嘆した様に、半分呆れた様に、如月蓮華は溜息をつく。

「昨日とは別人みたい。それが、本当の秋庭里香?」

そう言うのと、彼女はユラリと顔を上げる。

光のない、暗く澱んだ瞳。

それが秋庭里香を映して、るおんと揺らぐ。

「だけどき……」

細い首が、機械仕掛けの様にカクンと動く。

乱れたサイドテールが、それに合わせてふるふると震えた。

「駄目なんだよ……やっぱりそれじゃ、駄目なんだ……」

そう言っつて、途方に暮れた様に顔を左手で覆う。

顔にかかっていた髪が、クシヤリと潰される様な音をたてた。

「あのさ……」

パクパクと、無機質に動く口が言葉を紡ぐ。

狭い水槽で、空気を求める金魚がする様に。

「召使はねえ、守りたかったの……。王女様を……。自分の片割れを

……」

「え……?」

唐突に出てきた単語。

戸惑う、秋庭里香。

けれどそれに構わず、如月蓮華は続ける。

「それだけで良かった……。王女様さえ、そばで笑ってくれてれば、

それで良かった……」

うわ言の様に、ボソリボソリと呟く言葉。

かすれた声が、教室の薄闇の中に溶けていく。

「だけど、王女様は行ってしまった……。勝手に大事なモノを見つけて、勝手にそれを追いかけて、遠い所へ行ってしまった……」

虚ろな瞳が、何かを追う様に宙を舞う。

「召使をおいて、行ってしまった……」

何かを堪える様に、声が揺れる。

「……王女様は、もういない……。召使が守らなきゃいけなかった片割れは、もういない……」

言いながら、両手を目の前にかざしてジッと見つめる。

まるで、かつてそこに握っていたものを思い返すかの様に。

「どうすればいい……？守らなきゃならないものを守れなかった召使は、いったいどうすればいい……？」

「……」

「どうしようもない……。全く、どうしようもないよね……」

いつまでも続く、意の解せない言葉。

返す言葉はない。ある筈もない。

秋庭里香は、ただただ、立ち尽くすだけ。

そんな彼女に、如月蓮華は笑いかける。

それは、酷く弱々しくて。

儂くて。

今にも泣き崩れそうな笑みだった。

しかし――

「でもね、」

声音は、唐突に変わる。

「召使は見つけたの。もう一つの『片割れ』を」

弱々しかつた声に、熱がこもる。

ただしそれは、生きる気力に満ちた健全な熱ではない。

まるで、熱病に冒されて喘ぐ様な、病んだ熱。

「奇跡だと思った。奇跡に違いないと思った」

自分の手を見つめていた瞳が、再び秋庭里香の方を向く。澱んだ瞳。それは熱にかかれて、なお一層濁っている。

「だから、決めたの。今度は離さない。今度は間違えないって」  
スウ。

目の前にかざされていた手が、その向きを変える。

「だから……だからね……」

開かれた手が、伸ばされる。

まるで、差し伸べる様に。

まるで、助けを求める様に。

「アンタはいちや駄目なの。いちや、いけないの」

秋庭里香は動かない。

動けない。

「あの『人』のために。あの『人』の未来のために」

そして、白い指がゆつくりと、細い肩へと絡みつく。

「ねえ……教えてあげる……」

如月蓮華が、穏やかに微笑む。

「アンタの誓いは、気高いの。きつと……ううん、間違いなく、気高いの」

それは、肯定と、感嘆と、そして羨望さえも込められた言葉。

「だけど……だけどね……」

ツウ……

微笑むその頬を、一滴の雫が滑り落ちる。

「例え、皆がそれと認めなくても……。例え、皆がそれを否定しても  
……」

ポタリ

ポタリ

雫が、落ちる。

「それは、罪なんだよ……。間違いなく、罪なんだよ……」

微笑みながら。

泣きながら。

如月蓮華は言い続ける。

「罪は、裁かれなくちゃ、いけないんだよ……」  
肩に絡んだ指。

それに、グイと力が込められた。

「!!」

ガタタンツ

鈍い音を立てて、二人の身体が倒れ込む。

転がる椅子。

傾く長机。

床に広がる、黒い髪。

打ち付けた痛みに、声を詰まらせる秋庭里香。

そんな彼女を組み敷きながら、如月蓮華は終わりを告げる。

「もう、逃がさない」

笑いながら。

泣きながら。

震える手の中で、カッターがギチチと痛く鳴いた。

続く

― 想い歌 ― ・ ⊠

— 23 —

ガタンツ

昏い教室の中に、乾いた音が響き渡る。

教室の闇と同じ色に沈む瞳の下で、綺麗な顔が背を打ち付けた痛み  
に歪んだ。

闇の中、二人の少女が冷たい床の上で折り重なっていた。

床に仰向けに倒れているのは、艶やかな黒髪を腰下まで伸ばした少  
女。

その少女を組み敷き、馬乗りになっているのは、艶やかな黒髪を頭  
の脇で纏めた少女。

上になった少女が、その右手を振りかぶる。

闇の中、鎌首をもたげる蛇の様に生白く浮かび上がるその先で、ギ  
ラリと光るのは逆手に持たれた刃。

一瞬の間。

振り下ろされる、切っ先。行く先にあるのは、組み敷かれた少女の、  
細い首。

薄い白刃が白い肌を抉る寸前、組み敷かれた少女の両手が咄嗟に刃  
を握る手を受け止める。

拮抗する、白と白。

震え合う手と手の狭間。飢えた刃がキチチと泣いた。

ハア ハア ハア

僕達は必死で走っていた。

走りながら、どうしようもなく苛立っていた。

校舎の三階。その端にある視聴覚教室。それが、こんなに遠くに感  
じられた事はなかった。いつまで走っても、たどり着かないのではな  
いか。全てが終わってしまうまで、永遠に着く事は出来ないのではな  
いか。



そんな妄想が、頭をちらつく。

「ちくしょう……あの野郎……!!」

目の前を、蓮華の人を食った様な笑い顔がちらつく。それに向かって毒つきつつ、ひたすらに走る。

「先輩!!ブツブツ言ってる暇があったら、黙って足、動かしてください!!」

隣を走る吉崎が、荒い息をつきながらそう怒鳴ってくる。

ああ、うるせえな!!

言われなくたって分かってるよ!!そんな事!!

怒鳴り返す暇もあらばこそ、僕は走る足になおいつそう力を込めた。

いつしか日は沈み、視聴覚教室の中は闇に包まれていた。

その闇の中で、如月蓮華は秋庭里香の首に手にしたカッターの刃を向けていた。

対する秋庭里香は、そんな蓮華の手を必死で受け止めていた。

「う……く……く……」

震える手。カッターの刃が押し込まれる度、食いしぼる口から苦しげな呼気が漏れる。

押し返そうと、必死に込められる力。握り合う手を通し、如実に伝わる。

けれど、それは酷くか弱い。幾ばくの抵抗にも、なりえはしない程に。

せめてもの抵抗の様に、食い込む爪。微かな痛痒を感じながら、如月蓮華は思う。

儂い。あまりにも儂い。幾ばくの障壁にも、なりえない程に。それならば。

何も、付き合う必要はない。このまま、腕に込める力を強めれば、容易に押し切る事が出来るだろう。その勢いのまま、首筋を断てばそれまでだ。

実際、そうすべきなのかもしれない。

自分は秋庭里香を敵視しているが、憎悪している訳ではない。それならば、いたずらに苦しませず一思いに楽にしてあげるべきではないのか。

その思考に応じるために、カッターを握る腕に力を込めようとする。

けれど。

けれど。

汗に滑る手には震えが走り、思う様に力が入らない。

何を馬鹿な。

心の中で、如月蓮華は叫ぶ。

ここに至って、自分は何を躊躇っているのか。

決めたのではないのか。

決意したのではないのか。

あの人を。

あの人を守ると。

“今度こそ”、守って見せると。

だから。

だから。

“——もう、間違えない——”

無理に押さえ込む、腕の戦慄き。そしてもう一度、力を込めようとしたその時——

如月蓮華はそれに気付いた。

否、それは今までも彼女の目の前にあつた筈のもの。

しかし、自分の気持ちの揺らぎを抑えるのに精一杯で気がつかなかった。

それを、初めて意識が捉えた。

秋庭里香が、彼女を見ていた。

組み敷かれ。

刃を向けられ。

命を、握られながら。

もがき。

戦慄き。

それでも。

それでも。

真つ直ぐに。

逸らす事なく。

彼女を。

如月蓮華を、見つめていた。

その瞳は、酷く透明で。

澄み切つて。

まるで鏡の様に、如月蓮華の顔を映していた。

そこに映りこんだ自分の顔を、如月蓮華は見る。

黒く澄んだ鏡に映る、その姿

左右の反転した、自分の顔。

自分とは逆の、右の髪を結った顔。

「——!!」

如月蓮華の、呼吸が止まる。

そこに。

秋庭里香の瞳の中にいたのは。

ずっと彼女が求めた、姿。

だけでももう届かない、姿。

そう。

そこに、いたのは——

カシャン

乾いた音を立てて、カッターが床へと落ちた。

ハア ハア ハア

その頃、僕らはようやく視聴覚教室の前へと着いていた。

夜闇に沈んだ廊下の中で、ボンヤリと浮かび上がる教室の扉。中は、しんと静まり返っていて、物音一つ聞こえない。

その事が、僕の不安を煽る。

僕は教室の扉に飛びつくと、そのドアノブを力いっぱい捻った。

だけど、

ガチャツガチャツ

ドアノブは鈍い音を立てるだけで、ビクともしなかった。

「くそ!! 鍵がかかっている!!」

「そんな!?!」

「おい、本当に視聴覚教室（こ）にいるのかよ!?! 里香達は!!」

僕は吉崎に向かって怒鳴る。

「ちよつと待ってください!!」

そう言うと、吉崎は携帯を取り出して何やら操作すると、教室の扉に耳を当てた。

なるほど。防音設備も入り口のドアまではされていない。ここからなら、中の音が幾ばくなりとも聞こえる訳だ。

しばしの間。そして――

「着信音が聞こえます。やっぱり、先輩達はこの中にいます!!」

吉崎が、確信を持った声で言う。

しかし、そうなると事はやつかいだった。

視聴覚教室は、使用されていない時には鍵がかけられている。

里香と蓮華が視聴覚教室（こ）中にいるという事は、そのどちらか（多分、蓮華）が職員室から鍵を借りるかくすねるかして戸を開けたという事だ。にもかかわらず、今こうして鍵がかかっていると、鍵は内側からかけられているという事。そして、おそらく肝心の鍵は開けたやつが持ったまま。つまりは、鍵はこの閉まった扉の向こうという訳だ。

「おい、蓮華!! いるんだろ?! 開けろよ!!」

僕は怒鳴りながら、教室の扉をドンドンと叩いた。

だけど、当然というべきか返事はない。

僕が歯噛みしていると、吉崎が「職員室に行つて、合鍵借りてきます!!」と言って走り去っていった。

ここは三階。職員室は一階。

その移動の時間が勿体ない。僕は再び、扉を打つ。

「蓮華!! 里香もいるのか!?!」

やっぱり、答えはない。

それでも僕は扉を叩き続ける。

「蓮華!!里香に何かしてみろ!!」

その言葉が届いているのかいないのか。それすらも分からない。

「許さねえぞ!!いいか!!絶対に、許さねえからな!!」

僕の叫びは、空しく夜闇に溶ける。

そして返ってくるのは、ただ沈黙ばかりだった。

秋庭里香の携帯が鳴っている。

教室の扉が、ダンダンと叩かれている。

扉の向こうで、誰かが喚き叫んでいる。

だけど。

だけど。

そのどれもが、今の如月蓮華の耳には入らない。

彼女は見つめていた。

自分が組み敷く秋庭里香の瞳を。

否、その瞳に映るその姿を。

黒い鏡に映る、その姿を。

如月蓮華は、ただ見つめる。

二度と見る事の叶わない、その顔を。

二度と触れる事の叶わない、その顔を。

彼女の手はもう、カッターを握ってはいない。

力なく垂らされたその手が、秋庭里香の頬に添えられる。

まるで、その瞳の中に映る「彼女」に触れようかとするかの様に。

「……何で、泣いてるの……?」

眩く様な声が、その口から漏れる。

「何で……泣いてるのよ……!?!」

そう。「彼女」は、泣いていた。

その漆黒の瞳から雫をこぼして。

濡れた瞳で、彼女を見つめて。

「何で……?どうして……?」

秋庭里香の顔に、パタパタと水滴が落ちる。

如月蓮華は、泣いていた。

その漆黒の瞳から雫をこぼして。

濡れた瞳で、*「彼女」*を見つめて。

*「あたしは……あたしは、*「あんた」*の、ために……」*

*「彼女」*は、答えない。

ただ。

ただ、潤む瞳で彼女を見つめるだけ。

*「……違うの……？」*

如月蓮華の唇が、そう言葉を紡ぐ。

震えながら。

消え入りそうな声で

*「彼女」*に向かつて、呟く。

*「……違うの……？」*

戦慄く言葉。

それが、闇に溶けていく。

*「……あたしの……あたしの、してる事は……？」*

如月蓮華の身体から、力が抜ける。

糸の切れた人形のように、その身が秋庭里香の上に崩れ落ちた。

*「……あたしは……あたしは……」*

呟く声が、嗚咽に詰まる。

如月蓮華は、いつしか声を上げて泣いていた。

秋庭里香の胸に顔を埋め、その身を大きく震わせて。

全てをさらけ出す様に、泣いていた。

その時、奇妙な事に秋庭里香は酷く冷静だった。

苦しみはあった。

恐怖もあった。

けれど。

暴威によって、組み敷かれていたにも関わらず。

殺意を持って、刃を向けられていたにも関わらず。

確かに、命を刺し貫かれようとしていたにも関わらず。本能的に悲鳴を上げる精神と身体。それに反し、心は妙に澄んでいった。

如月蓮華の瞳に滾る、暗い焰も。

そこに宿る確かな狂気も。

静かに、受け止める事が出来た。

だから、見返す事が出来た。

泣く事も。

叫ぶ事もなく。

ただ真っ直ぐに。

如月蓮華の瞳を、見返す事が出来た。

霞む視界の先で、見つめたそれは。

泣いていた。

刃を握るその目からは涙が溢れ、こぼれていた。

何を、泣いているのだろう。

今、自分が望む事に手をかけているのは、彼女だろうに。

やがて、如月蓮華がぼそりと言った。

「……何で、泣いてるの……？」

何を言っているのだろう。

泣いているのは、自分ではないか。

そこで、秋庭里香は気付く。

彼女の、如月蓮華の瞳が真っ直ぐに自分の瞳を見つめている事に。

何を、見つめているのだろう。

自分の瞳の中に、彼女は何を見ているのだろう。

やがて、その腕の力がゆっくりと緩んでいく。

カシヤン

カッターを落とした手が、彼女の涙で濡れた頬に当てられる。

頬を撫でさするその手は、優しくかった。

まるで、何か愛しい者に触れるでもするかの様に。

その間、如月蓮華はずっと何かを口にしていた。

その言葉の意は、秋庭里香には図りかねた。

ただ、そこに込められた痛みだけが、頬に触れる手を通して伝わってきた。

やがて、何かの糸が切れたかの様に、その身体が崩れ落ちてくる。自分の胸に顔を埋めて、嗚咽を漏らし始める如月蓮華。

そんな彼女の頭に、秋庭里香はそつと手を伸ばす。

震える髪を撫でると、サラサラとした感触が手を伝わった。

自分を撫でる秋庭里香にしがみ付き、如月蓮華は子供の様に泣きじやくる。

ああ、終わったのだ。

その事を、秋庭里香はおぼろげに、だけど確かに悟った。

「この……」

もう、我慢の限界だった。

合鍵を取りに行った筈の吉崎は、まだ戻ってこない。

ひよつとしたら、先生達への説明に手間取っているのかもしれない。

それを、悠長に待つてなんかいられない。

今こうしてる間にも、里香がどんな目に合わされているか分かったものではないのだ。

僕は腹を据えた。

扉を破ろう。

そう決意し、相変わらずだんまりを続ける扉から距離をとる。

果たして、それは僕の力で可能なかは分からない。

司や鬼大仏ならともかく、僕ではあえなく跳ね返されるだけかもしれない。

けど、それがどうしたというのだ。

一度で敵わないなら、二度三度と繰り返すまでだ。

肩が壊れても、いや、壊れたって続けてやる。

僕は息を吸って腹に力を溜めると、扉に向かって突進した。

「デエエエエエエエツ!!」

雄叫びと共に、扉が迫る。



と、

ギィ

そんな音を立てて扉が開いた。

「えっ？」

慌てて止まろうとしたが、ついた勢いはそんな簡単には止まってくれない。

「ウ、ウワアアアアアアアツ!?」

ドガラガツシャーン

結局、僕はそのまま室内に突入して、中の机や椅子の群に激突する事と相成った。

「い…………痛たたた…………」

「何してるの？裕二」

「り…………里香…………？」

開いた扉の影で、里香が馬鹿でも見る様な目で机や椅子の山に埋まった僕を見ていた。

「だ…………大丈夫か？」

「何が？」

「いや、だってお前…………」

痛む頭をさすりながら、机と椅子の山から這い出した僕の目に、傍らの暗がりで見つむ蓮華の姿が映った。

「…………!!てめえっ!!」

考えるより先に手が動いた。

蓮華の胸倉を掴もうと手を伸ばす。

「だけど——」

「駄目!!」

里香の声に、僕の手が止まる。

「里香…………？」

「もういいよ。裕二」

「もういいって…………？」

「もう、終わった」

何でもない事のように、里香が言った。

「終わった……？」

その言葉に、改めて蓮華を見る。

その目から、あの沸々と滾る暗い輝きが消えていた。

光が失せたそれは今、酷く空虚で、まるでがらんだような様だった。昨日とは、まるで別人の様だ。

「お前、何かしたの……？」

「何もしてない。だけど、終わった」

僕の問いに、里香はただ淡々と答える。

「終わったって……」

納得のいかない僕が、さらに訊こうとした時、

「あれ？先輩……？」

そんな、どこか間の抜けた声が聞こえてきた。

それに振り返ると、そこには汗だくで息を切らす吉崎が鬼大仏と一緒に立っていた。

吉崎、遅えよ。

つて言うか、余計なヤツまでつれてくんないよ。

「お前ら!!何をやってる!!」

開口一番、鬼大仏は僕達を怒鳴りつけた。

続く

― 想い歌 ― ・ ☒

— 24 —

「一体何をやっつとったかと訊いとる!? さっさと答えんか!!」

鬼大仏——近松覚正は僕達をグルリと睨み回すと、また怒鳴った。相変わらず無駄に声がかい。耳がキンキンしてくる。

それにしても、どう説明したものか。

実際、この暗い視聴覚教室の中で何が起こっていたのかを、僕は知らない。むしろこっちが教えて欲しいくらいだ。

それは、鬼大仏を連れてきた吉崎も同じ。

当の本人は、鬼大仏の後ろで両手を合わせてペコペコしている。どうやら、鬼大仏を連れてきてしまった事をあやまっているらしい。

まあ、事情は分からなくもない。

放課後の、大概暗くなった時分。汗だけで息を切らした女生徒が、個室の合鍵を貸して欲しいなどと飛び込んでくる。教師でなくとも、何事かと思うのが人情というものだろう。

まして、こういう事に鼻の利く鬼大仏の事だ。恐らく、強引について来てしまったのだ。

もつとも、吉崎がそれをあえて拒まなかった事も考えられる。

どうあがいたって、僕らは所詮子供だ。

もし、この中で起こっていた事が、考えうる最悪の事態だったりしたら? くやしいけど、僕達だけではどうにもならなかっただろう。

大人の力が欲しい。

吉崎がそう思ったとしても、仕方ない。

本当の災厄に出会ったとき、僕達はどうしようもなく、無力なただから。

それにしても、この事態には困った。

何か納得のいく説明が出来ない限り、鬼大仏は僕らを放してはくれないだろう。かと言って、僕や吉崎では説明のしようがない。となれば、それが出来るのは当事者である里香か蓮華という事になるのだけ

れど……

——と、

ス……

暗がりの中に立っていた蓮華の身体が動いた。そのまま、僕達の脇をすり抜けて鬼大仏の前に進み出る。

「む？」

そう言っつて、蓮華を睨む鬼大仏。

その視線に動じる事もなく（……というか、端から目に入っていないらしい）、蓮華は口を開く。

「あたしが……」

「——あたしに相談があるって言っつてきたんです」

蓮華の言葉を遮る様に飛んできた声に、皆が驚いて視線を向けた。声の主は里香だった。

里香は、いつの間にか疲れた様な様子で椅子に座っていた。そして、ポカンとしている蓮華をよそに、鬼大仏に話しかける。

「誰にも聞かれたくない相談があるって。だから視聴覚教室（こ）で鍵をかけて、話を聞いてたんです」

嘘だ。事態はそんなのんきなものではなかった筈だ。だけど、里香は立て板に水を流す様に言葉を紡ぐ。

「それで、話が終わって帰ろうとしたんですけど、そこでうっかり先に電気を消しちゃったんです。廊下の電気も消えてたし、真っ暗になっちゃって。それであたし達慌てて……」

……そうきたか。だけど、こんな言い訳で納得する様な鬼大仏ではないだろう。それならすぐに電気を付け直せばいいだけの話だし、大体、滅茶苦茶になっている机や椅子（主に僕のせいだけ）の説明はどうするつもりなのか。

そう思っていると、

「そしたら……」

そこで里香はそう言っつて、自分の胸を押さえた。

「ビックリしたせいかな、あたし急に気持ち悪くなっちゃって……」

「何!?!」

里香が、自分の持つ最高のカードを切った。

里香が病気持ちである事は、教師達の間では周知の事実だ。効果はてき面で、仁王の様だった鬼大仏の顔が見る間に緩む。酷く、心配そうな顔だ。

「それで、あたし達パニックになっちゃって、電気を点けようとか、手探りで鍵を開けようとか、そういう事に頭が回らなくなっちゃったんです」

言いながら椅子にもたれかけると、里香は疲れた様にハア、と大きく息をつく。心なしか、顔色まで悪い様に見える。何だか、僕まで心配になってきそうだな。

「そこで、如月さんが携帯で吉崎さんに連絡を取ってくれて、それで吉崎さんが急いで職員室に合鍵を取りに行ってくれたんです」

「う、ううむ。しかし……」

鬼大仏は今一つ納得しかねる顔で、滅茶苦茶になっている椅子や机を見る。

「ああ、それは裕一です」

「そうそう。それは僕……って、おおい!？」

「途中で如月さんが気がついて、鍵を手探りで開けてくれたんですけど、ドアを開けた途端に裕一が突っ込んできて、ドガラガシャンって……」

「そこだけまんまかよ!!」

「戎崎、また貴様か!？」

案の定、鬼大仏が僕を睨む。思わず、肩をすくめる僕。

「秋庭が心配だったのは分かるが、貴様が浮き足立ってどうする!? 男子たる者、もっとズッシリと構えてだな……」

そのまま、長々と説教に入られるかと思っただけど、そこで鬼大仏は言葉を切った。

「……いや。今日はいい。秋庭、それで具合はどうなのだ?」

「はい。だいぶ、落ち着きました」

里香の答えに「そうか」と息をつく、鬼大仏は僕達を見回してこう言った。

「秋庭は少し保健室で休んでいけ。戎崎は秋庭についていてやれ。吉崎と如月は直ぐに帰れ。いいな？」

「は、はい!!」

里香は頷き、僕と吉崎は同時に返事をする。だけど、蓮華だけは茫然とした様に突っ立っていた。

鬼大仏はそんな蓮華をチラリと睨んだが、すぐに視線を外すと教室の中に向かった。

「ここは、わしが片付けておく」

……鬼の目にも涙。

黙々と机や椅子を片付けるその大きな背中に、僕はこっそりそんな言葉を思い浮かべた。

「じゃあ、何かあったら呼んでね」

「はい」

僕達の返事に頷くと、保健の先生は保健室を出て行った。

それを見届けた後、ベッドの傍らの椅子に腰を据えながら、僕はホツと息をついた。

「全く、よくあんな嘘ペラペラと言えるもんだな」

目の前のベッドに横たわる里香に、呆れた様にそう言う。

「でも、上手くいったでしょ？」

当の本人はクスリと笑みを浮かべながら、そんな事を言っている。

「嘘、好きじゃないんじゃないのか？」

「……嘘も方便」

そう言うと、里香はまたハアと息を吐いた。

さつきから、こんな息継ぎを頻繁にしている。その様子に、僕は急に不安になってきた。

「おい、大丈夫か？ひよつとして本当に具合、悪いのか？」

「……大丈夫。ちよつと、疲れただけ」

そして、里香は軽く目を閉じる。

「なあ、一体、何があったんだよ？蓮華に、何されたんだよ。」

「……………」

里香は目を閉じたまま、答えない。

「なあ、おい……」

僕がなおも問い詰めようとしたその時、

「……何で、言わないの……?」

後ろから飛んできた声に、僕は飛び上がった。

里香が、ゆっくりと目を開く。

振り向けば、保健室の入り口に蓮華が立っていた。

「な、何だよお前……!」

けれど、僕の問いには答えず、蓮華は近づいて来る。

何処か、フラフラとした足取りで。

そして、ベッドの横に立つと、横たわる里香を見下ろした。

「……何で言わないの……? さつきも……今も……」

虚ろな瞳に、虚ろな声。

全ての力を失った様な状態で、蓮華は囁く様に里香に訊ねる。

「……言っただでしょ……?」

やっぱり力のない声で、里香が答える。

「……あたしは、死なないもの」

その言葉に、僕はどきりとした。

対する蓮華も、その目を軽く見開く。

「死なないから、あんな事、意味がない」

見下ろす蓮華の瞳を見返しながら、里香は淡々と話す。

「意味がないから、言わないだけ」

「……今、言っておかないと、また『やる』かもよ……?」

その顔に、とってつけた様な薄笑みを浮かべて、蓮華が言う。

「同じ事。意味がない。あたし、死なないから」

やっぱり、その顔に薄笑みを浮かべて、里香も言う。

「……」

「……」

しばし見つめ合う、二人。

やがて……

「そっか……。あんだ、『馬鹿』なんだ……」

ボソリと囁く様に、蓮華がそう言った。

「……うん」

薄く笑って、里香が答えた。

「馬鹿」。

里香にはもつとも、そぐわない言葉だ。

だけど、不思議とこの時は妙にしっくりとくる様に感じられた。

「馬鹿には……勝てないか……」

何かを諦めた様に呟くと、蓮華は僕の方に向き直った。

「先輩……」

「な、何だよ!？」

「先輩は、幸せですか？」

「え……?？」

「幸せですか？」

酷く、真剣な問いだった。

少しでも嘘が混じれば、そこから全てをこじ開けようとする。そんな問いだった。

戸惑いを覚えて、ふと横を見る。

——里香が、見ていた。

澄んだ瞳で真っ直ぐに、けれど穏やかに、僕を見つめていた。

その瞳が、僕に自信と力をくれる。

「ああ」

僕はそう答えて、精一杯力を込めて頷いた。

それを受けた蓮華は、重ねて訊く。

「その幸せは、いつまでたっても、何があっても、『幸せ』ですか？」

「——!!」

言葉だけとれば、酷く簡単な問いだった。

けれど——

僕は、視聴覚教室までの道程で、吉崎から話を聞いていた。

場合が場合。あくまで端的なもの。それでも、その重さは十分に理

解出来た。

その重さを、全て込めた問い。



大事な姉。

大事なものを得て、「幸せ」だった姉。

その「幸せ」を、「幸せ」として持ち続けられなかった姉。そして、そんな姉を救えなかった自分。

その想いの全てが、込められた問いだった。

「「幸せ」ですか？」

蓮華が繰り返す。

後悔。怨嗟。悲傷。猜疑。覚悟。そして、期待。

色んなものが込められた、重い、重い、問い。

だから、僕は今度は里香の目を見なかった。

誰にも頼らず。

誰にも押されず。

僕はその答えを選んだ。

そして――

「当たり前だろ」

僕のはつきりと、その答えを形にした。

「……「馬鹿」ですね……」

その答えを聞いた蓮華は薄く笑ってそう言うと、つつ、と僕に近づいてきた。

真っ黒い瞳が、僕を見上げる。

そしてクツと背伸びをすると、

「――!？」

柔らかくて温かい感触が、頬に触れた。

「……これくらい、いいでしょ？」

その身を戻しながら、蓮華はそう言って里香を見た。

里香は何も言わず、僕達を見ていた。

微笑んでいる様な、ブスツとしている様な、そんな変な表情だった。そんな里香にクスリと笑いかけると、蓮華はもう一度僕を見てこう言った。

「さようなら。 戎崎先輩」

それは、違う事ない別れの言葉。

そして、全ての終わりを告げる言葉だった。

続く

―想い歌―・☒

—25—

「なあ、結局、何があつたんだよ?」

「しつこいなあ。裕一は」

蓮華が去つた後、改めて訊くと、里香は少しむくれながらそう言つた。

だつてそりや、気になるだろ。

さっきの会話、何か剣呑な言葉が混じつてたぞ。

「そんな事いいから……」

いや、そんな事つて……。

「聞かせてほしい。蓮華あの事」

里香が僕の方を見ながら、そう言つた。

「え……?」

「聞きたいの。知ってるんでしょ?裕一」

酷く、真剣な顔だった。単純な好奇心とか、そんな浮ついた動機じゃないのは一目瞭然だ。こうなつたら、本懐を遂げない限り、絶対に引き下がらないだろう。

僕は溜息をつくと、里香の顔を見た。

「ちよつとしか知らないけど、いいか?」

「うん」

そう言う里香の顔色は、確かに幾分良くなっている様だった。

明るい半月の下、如月蓮華は一人家路を歩いていった。

否、正確には一人ではない。

その少し後ろを歩く、人影がもう一つ。

「……何でついて来るわけ?」

如月蓮華は鬱陶しそうにそう言うと、後ろの人影——吉崎多香子に向かつて振り返る。

「別についてつてる訳じゃないわよ。帰り道が同じなだけ」

「……………」

軽く驚いた様な体の如月蓮華に、吉崎多香子は大げさに溜息をついて見せる。

「知らなかったの？あんだ、本当に先輩達しか見てなかったのね」  
かく言う自分も、大森芳子に聞くまでは知らなかった訳なのだが、それはとりあえず棚に上げておく。

しかし、その驚いた様子もほんの一瞬。

「あ、そう……」

呟く様にそう言うと、如月蓮華は再び前に向き直り、何事もなかったかの様に歩き出す。

その様に溜息をつきつつ、吉崎多香子も再びその後を歩き出す。

しばしの間。

——と

「ねえ、あんだ……」

吉崎多香子が、如月蓮華に声をかけた。

「……………」

答えはない。

振り返りもしない。

だけど構わずに続ける。

「本気でやる気、なかったでしょ？」

その言葉に、如月蓮華がピクリと肩を動かす。

歩いていた足が止まる。

細い首が動いて、後ろを向く。

見れば、吉崎多香子がストラップを持って、携帯をプラプラと晒していた。

「あんたが何をしたのかは、先輩が言わない以上訊かないけど……」  
ストラップをヒュンと回して、携帯をパシリと手の中に収める。

「人の携帯使って誘いメール送つといてから、履歴消さないなんて随分お粗末だね。あんたらしくもない」

「……………」

如月蓮華は何も言わない。ただ黙って、その目を吉崎多香子に向け

ている。だけど、それは酷く虚ろで、どこか捉え所がない瞳。あの、暗  
いが沸々と滾っていた瞳とは、まるで別人の様だ。

「単純に、先輩のメアドが分からなくて使ったって訳じゃないよね  
？あたしの携帯」

「……………」

続ける問いかけ。けれど、返ってくるのは、あいも変わらず無言の  
声。虚ろな瞳も、本当に対峙する彼女を映しているのかいないのか。

「期待してたんじゃないの？気付いたあたしや、戎崎先輩が止めに  
来るの」

「……………」

「本当は、助けてもらいたかったんじゃないの？誰かに？」

「……………」

何を問うても、何度問いかけても、如月蓮華は何も言わない。  
ただ黙って、何も映さない瞳で見つめるだけ。

「ああ、もう!!」

いい加減、イラついた。だから、言ってしまった。

「そんなじゃ成仏出来ないよ!!鈴華さんも!!」

ギツ

途端、如月蓮華の首が吉崎多香子の方を向いた。

何も映していなかったはずの瞳が、確かに彼女の像を捉える。

「……………何が、分かる……………」

「え……………」

底冷えのする様な声。背筋が、一瞬で凍りつく。

「お前なんかには、何が分かる……………!!」

見開かれた目。

そこに見えたのは、確かな狂気。

咄嗟に身を引こうとした瞬間、

ガシッ

猛禽のその様に伸びてきた手が、吉崎多香子の胸ぐらをガシッと  
掴んでいた。

夜闇の中、怯える様に風が泣いた。

「……そうだったんだ。」

僕の話聞き終えた里香は、大きく息をつくとその身をベッドに沈めた。

「吉崎からの、又聞きだけだな。」

僕もそう言っつて、傍らの椅子に腰を沈めた。

「結局、あいつは俺の事が好きだった訳じゃないんだよ。俺に、境遇の似てた姉を重ねてただけで……」

「そうかな……？」

「え？」

里香の言葉に、僕はポカンとした。

「それだけじゃ、ないんじゃないかな……」

「どういう事だよ？」

その問いに、里香は僕の顔を見る。

「如月さんは、お姉さんの事が好きだった。そして、その『好き』は、あたし達が普通の家族に持つ『好き』とはちよつとだけ違った、特別な『好き』だったんじゃないのかな？」

「特別な、『好き』……？」

「うん。だから、如月さんにとってお姉さんは特別な存在。この世界から、絶対に欠けちやいけなかったもの」

「……」

何だか、分かるようで分からない表現だった。

家族とは違う、だけど絶対に欠けちやいけないもの。

それは、人にとってどんな存在の事を言うのだろう。

「だけど、お姉さんは、いなくなっちゃった」

里香の声が、少し変わった。どこか寂しげで、悲しげな声。

「如月さんは、大切な世界の一部を無くしちゃった」

少し変わったその声で、里香は続ける。

「欠けた世界は、簡単には埋まらない。だって、それと同じ形の欠片は、きつと世界の中にいくつもないから」

「……」

「だけど、如月さんは見つけた」

「!!」

その言葉に、僕はハツとする。

「それが、裕一」

里香が僕を見て、微笑む。

「誰でも良かった訳じゃない。同じ境遇なら、良かったって訳じゃない。欠けた欠片を……抜けた特別な形を埋めてくれる人じゃない。きや、いけなかった」

「……………」

「きつと、それは『奇跡』。一生に一度、あるかないかの」

僕は、言葉を失う。

「だから、如月さんは、あんなに一生懸命になった。やっと見つけた欠片を、手に入れるために」

そこで、一呼吸置く気配。そして――

少し小さな声で、でも何かを確信しているかの様に、里香はそう言った。

「何だか、全部分かってるみたいに言うんだな」

僕の言葉に、里香は答えない。

ただ、じつと僕の顔を見つめる。

それが、何となく癪に障った。

「何か、おれが蓮華あいつの所に行けばいいみたいに聞こえんだけど？」  
ちよつとした嫌味を込めて、そう言ってやった。

すると、

「ねえ、裕一……………」

妙にハッキリとした声音で、里香が言った。

「な、何だよ……………!?!」

怒らせてしまったのだろうか。少し腰を引きながら、僕は訊く。

「同じだと、思ってる?」

「え?何が?」

「如月さんのお姉さんと、自分……………」

「――!!」

かけられた、思いがけない問い。

一瞬、息が止まった。

……同じ、なのだろうか。

僕と同じ平均台を渡っていた彼女。

その平均台から、落ちてしまった彼女。

そして、二度とその平均台に登れなかった彼女。

彼女は、僕の未来の姿なのだろうか。

少なくとも、蓮華はそう思っていた。

だから、僕と、一緒に平均台を渡っている里香とを引き離そうとした。

僕が、平均台から落ちないように、里香を蹴落とそうとした。

その行為の是非はともかく、理屈は理解出来た。

出来てしまった。

やはり、同じなのだろうか。

僕と、蓮華の姉とは。

分からない。

答えが、分からない。

助けを求める様に、里香を見る。

だけど、里香は黙ったまま、僕を見つめるだけ。

僕が答えに窮しようとしたその時、小さな音が耳に入った。

トクン

それは、気をつけなければ気付かない様な、小さな音。

他に誰もいない、静かな部屋の中で、意識を集中してたからこそ、感じ取れる音。

トクン

トクン

小さく、だけど確かにリズムを刻む拍動。

それは、里香の心臓の鼓動だった。

生まれた時から脆さを抱え、今は継ぎ接ぎだらけの筈のそれは、それでも健気に、そして確かに、鼓動を奏でていた。

その音色を聞く内に、さっきの里香の言葉が、僕の脳裏に甦ってきた。



た。

(あたし、死なないから)

そう。里香は確かにそう言った。

それが不可能な事は僕達が、里香が一番良く知っている。

それでも、里香はそう言った。

言ってくれた。

確かな誠意と。

確かな決意をもって。

そう。

あれは蓮華に向けると同時に、僕にも向けられた言葉。

僕に晒された、違う事ない里香の心。

それなら、僕が返すべき言葉は何か。

そんなの、決まっている。

「……同じじゃ、ねえよ」

ゆっくりと。だけどしつかりと言葉にする。

里香が、顔を上げた。

「同じな筈、ねえだろ」

確かめる様に、もう一度、ハッキリと口にした。

そう。

蓮華の姉と、その相手の少年の絆が、どれ程のものだったかは僕に

は分からない。

だけど、これだけはハッキリと言ってやる。

僕と里香の決意は、絶対にそれ以上のものだって事を。

——ずっといつしよにいよう——

あの日あの夜、暗い病室で、止められた一分の中で、誓い合ったあ

の言葉。

その誓いに勝るものなんて、絶対はない。

ある筈なんて、ないんだと。

僕は。僕達は、言い切れるのだから。

クスリ

不意に、里香が笑った。

「な、何だよ!？」

僕が訊くと、里香はしやあしやあとこんな事を言った。

「何むきになってるの? 裕一、馬鹿みたい」

……こんな時にそんな事言うか。この女は。

こつちがどれだけ気張って……。

さすがに僕が文句の一つも言おうとした時、里香がポソリと言った。

「分かるなあ……」

「え……?？」

「分かるよ。如月さんの気持ち」

「な、何で?」

「だって……」

最後の方が、かすれてよく聞こえなかった。

「え? 何だよ?」

「あたしも、同じ……」

話すのに疲れたのだろうか。

やっぱりよく聞こえない。よく聞こうと思って、里香の口元に顔を寄せた。

途端――

グイッ

突然、頭を掴まれた……というか、抱え込まれた。

里香の吐息が間近に当たる。

心臓が、ドキリとした。

「ねえ。裕一……」

ものすごく近い場所で、里香が言う。

「な、何だよ……?？」

「神様って、意地悪だよね」

「え……?？」

「空いた隙間に、一つの欠片しか用意してくれないんだから……」  
言っている事が、よく分からなかった。

「何言って……」

言葉が終わらない内に、頬に何かに触れた。柔らかく、温かい感触が伝わる。

そこは違う事なく、さつき蓮華がその唇を当てた場所。

「上書き」

茫然とする僕の頭を抱えたまま、悪戯っぽくそう言って、里香は笑った。

綺麗に、とても綺麗に、笑っていた。

続く

―想い歌―・☒

―26―

♪ ―町外れの小さな港 一人佇む少女  
この海に昔からある 密かな言い伝え  
願いを書いた羊皮紙を 小瓶に入れて  
海に流せばいつの日か 想いは実るでしょう ―♪

ギリギリギリッ

襟元が締め上げられる音が、耳元で鈍く響く。

「あ……く……く……!!」

振れる視界の先で、蓮華があたしを見つめている。  
爛々と、暗く輝く瞳。

これが、狂気というものなのだろうか。

まるで、獲物を引き裂く肉食獣のその様。

怖い。

どうしようもなく、怖い。

先輩は、これと真正面から向き合っていたのか。

無理だ。

あたしには、無理だ。

後悔が、沸騰する様に沸き上がってくる。

助けて。

誰か。

必死の体で、悲鳴を絞り出そうとしたその時――

あの女の顔が、脳裏を過ぎった。

薄闇の満ちる部屋の中で、すがりついてきた手。

溺れる人が喘ぐ様に、紡がれた言葉。

(古崎さん……。どうか……。どうかあの娘の……)

必死の思いで求められた、願い。  
そう。

あの時。

あの家に。

あの部屋に。

彼女達の想いに。

踏み込んだ時から。

知った時から。

もう、引く事など。

有り得は、しなかつたのだ。

「……の……」

竦む身体に、激を入れる。

ゆつくりと、右足が上がる。

震えるそれに、必死で力を込める。

そして――

一気にそれを突き出した。

ドカッ

身体を揺らす、鈍い衝撃。

耳に響く、短い悲鳴。

喉元に感じていた圧迫感が消える。それと同時に、新しい空気が急激に喉に流れ込んできた。

「ゲホッ!!ゴホッ!!」

咳き込みながら、よろめく身体を背後のガードレールで支える。

顔を上げると、涙に滲む視界に地面に倒れている蓮華の姿が映った。

周りを見回すと、通りがかる人達が避ける様にして通り過ぎていく。

面倒事は御免だという態度が見え見えだ。

薄情な事この上もないが、この場においては都合がいい。

息を整えながら、地に伏している蓮華に近づく。

がむしやらに出した蹴りが、いい所に入ったのだろう。

蓮華は地に伏したまま、鳩尾の辺りを抑えてえづいている。

「はあ……はあ……ぎまーみる……」

そう声をかけると、蓮華が顔を上げてこちらを見た。苦痛に歪む目は、それでもギリギリと燃えていた。

「いつまでも、調子に乗らないでよね……。所詮、アンタだってあたしらと同じ小娘じゃない……!!」

そう。

こうして見て、ようやく分かった。

どんなに怖かろうと。

どんなに鬼気迫ろうと。

彼女もあたしと同じ存在。

非力でか細い、少女なのだ。

そう考えると、ようやく心に余裕が出来てきた。

もう一回、大きく息を整えるとあたしは腰を屈め、手を伸ばす。

掴む、蓮華の腕。

酷く細くて、冷たかった。

「ほら、起きなさい!!」

言いながら、蓮華の身体を引き起こす。

「うるさい!! さわるな!!」

そう言っ、手を振り払おうとする蓮華。

でも、まだダメージが抜けていないのだろう。その手に力はない。

「グダグダ言ってんじゃないわよ!! いいから、さっさと立っつて!! こ

こじゃ、話も出来ない!!」

蓮華は忌々しそうに舌打ちしながら、フラフラと立ち上がる。

「ちよつと、あんたたち。大丈夫?」

蓮華の手を引いて歩き出そうとした時、通りがかったおばさんがそ

う声をかけてきた。

優しそうな顔。

前言撤回。

世の中、まだ捨てたもんじゃない。

でも、今は他人にはあまり関わられたくない。

「すいません」とか「大丈夫です」とか言いながら、蓮華を引っ張って場を離れる。

心配そうなおばさんの視線が、いつまでも背中に張り付いていた。

蓮華の腕を引きながら、あたしは歩き続けた。

市役所を通り過ぎて、神社の前を通って、車道を横切る。

蓮華はもう、抵抗しない。ただ、黙ってついてくる。

その様は、疲れてる様にも、何かを諦めている様にも見えた。

やがて、あたし達は勢田川に架かる橋の袂へ出た。

人気はだいぶ減った。

ここなら、腰を据えて話せるだろう。

と、

「どっよ……うん……」

蓮華が、久しぶりに声を発した。

怪訝な顔で、辺りを見回している。

「勢田川よ。知らないの?」

「……知らない」

薄々感じていた事だけど、この娘の世界は狭い。

頭が良くて、知恵も回る。だけど、その意識が認知している世界は

本当に狭いのだ。

きつと、これまでの人生のアンテナを、鈴華という片割れだけに向けて生きてきたせいだろう。

世間知らずと言ってしまえばそれまでだが、この娘の内面はそんな一言ではすまされないぐらいに歪み、病んでいる。

彼女自身はその事を望み、受け入れているのだろう。けれど、それは決して誰も幸せにはしない。

それどころか、痛みや悲しみを撒き散らす。

その事は、彼女がうちの高校に転校してきた短い間だけで十分に証明されている。

(あんたが何をしたのかは、先輩が言わない以上訊かないけど……) さつきはああ言った。けど、あの視聴覚教室の闇の中で起こった事は薄々見当がついていた。

戎崎先輩は気付いただろうか。

教室から出てきた時、先輩の首に付いていた赤い切り傷に。

「何で、こんな所……」

蓮華が訊いてこようとしたその時、

サア……

北の方角から風が吹いた。

その風を受けた蓮華が、川下の方を見る。

「……海の、匂い」

「でしようね」

そう言つて、あたしは橋の欄干に手をかける。

「海、そんな遠くないから」

「海が……」

蓮華の目が、遠くを見つめる。

「この川、すぐに海に続いているの」

「……」

蓮華は橋の欄干に手を沿え、身を乗り出す様にして川面の果てを見ている。

そんな彼女をよそに、あたしはぶら下げていたカバンに手を突っ込んだ。

中から引つ張り出すのは、飲みかけのペットボトル。

ボトルの蓋を回して、中身に口をつける。

喉を滑り落ちる、生温い液体。

あたしはホッと一息つくと、改めて蓮華の方を見た。

彼女は相変わらず、ジッと川面の果てを見つめている。

さて、と思う。

そもそも勢いでここまで引つ張ってきてしまったが、それでどうするか。

漠然と話をしようと思つて連れてきたけど、今更そんな事で事態が好転するだろうか。

先輩の首についていた傷痕や、さつき首をねじ込まれた痛みが脳裏に浮かぶ。

繰り返すが、彼女が本気だったとは思えない。



それでも、もう半歩で “向こう側” に踏み出す様な危うさを如月蓮華は持っている。

彼女の抱える闇は深い。

それに対する恐怖は消えていない。

でも、ここまで首を突っ込んだ以上、もう引き返す事も出来ない。今更、退路はないのだ。

やっぱり、行ける所まで行くしかない。

残っていたペットボトルの中身を、一気に空ける。

口の中の液体と一緒に、迷いを呑み込む。

プハッと息を吐いたその時、それは不意に聞こえてきた。

「♪……町外れの小さな港 一人佇む少女……♪」

顔を向けると、川面の果てを眺めながら蓮華が歌っていた。

「♪……この海に昔からある 密かな言い伝え……♪」

消え入りそうな、だけど澄んだ歌声が、夜の大気に溶けては消えていく。

「♪……願いを書いた羊皮紙を 小瓶に入れて……♪」

あたしは胸の中の緊張を忘れ、それに聞き入る。

「♪……海に流せばいつの日か 想いは実るでしょう……♪」

歌の名は、『リグレットメッセージ』。

『悪ノ召使』が好きな人間なら、知っていて当然の歌。

『悪ノ娘』、『悪ノ召使』。これはその続編。

内容は単純。

召使の犠牲によって生き残った王女が、彼へ手向けた手紙を小瓶に詰めて海に流す。

その情景と想いが、淡々と歌われる。

それだけ聴いたのではよく分からない。先の2曲と合わせて聴いて、初めてその真意が分かる。そんな歌だ。

「♪……もしも 生まれ変われるならば……♪」

最後の句を紡ぎ、歌は終わる。

「……………」

その余韻が消えるのを待って、あたしは声をかける。

「上手いじゃない。先輩からは聞いてたけど」  
「……………」

あたしの言葉に答える事もなく、蓮華は揺れる水面みなもを見つめてい  
る。

話が続かない。

どうしたらいいものか、途方に暮れる。  
と、

「あんた……………」

囁く様にかげられた声。

思わず、彼女の顔を見る。

いつの間にか、蓮華がその瞳をあたしに向けていた。

彼女は問う。

「どうして、鈴華の事を知ってるの？」

「それは……………」

答えに窮するあたしを、白々しいと言わんばかりの視線が射抜く。

「……………やっぱり、母さんか……………」

そう言つて、小さく舌打ちをする。

どうやら、大体の事は察していたらしい。

考えてみれば、当然かもしれない。

件の書類をあたしが届けた事を聞いて、その事を予想したのだ。

賢い彼女なら、容易だろう。

「あの、おしゃべり……………」と吐き捨てる様に呟くのが、微かに聞こえ  
た。

「何を勝手な……………」

思わず、口に出る。

「あなたのお母さん、本気で心配してた。それも知らないで……………」

その言葉に、蓮華がもう一度こつちを見る。

酷く、冷めた目だった。

「心配？あんな奴、何も分かっちゃいない」

バツサリと切り捨てる。

「あんただって、そう。何をいい子ぶってんのか知らないけど、あた

しと鈴華の事に余計な茶々入れないで」

何もかもを、拒絶する言葉。

一瞬たじろぎそうになるけど、ここで引いたらもう機会がないのは  
確実だった。

あたしは、心の中で練り上げていた言葉を言う。

「死んだおねーさんと彼女持ちの男混同して、ちよつかい出す様な  
シスコンに言われたくないんですけど。全く、随分はた迷惑な人間よ  
ね。あんたの大事な鈴華おねー様って」

……反応は、早かった。

どこか虚ろだった蓮華の視線が、ギツと鋭くなった。

眼前に鋭い針を突きつけられる様な、薄ら寒い感覚。

さっきの恐怖が胸をかすめるけど、もう後には引けない。

そのまま、突っ走る。

「だってそうじゃない。死んだ人間の事引きずって、勝手に死んで、  
あんたの事を縛って、それで周りの人間まで巻き込んで。迷惑じゃな  
きゃ何だっていうの？」

「……黙れ……!!」

「ああ、やだやだ!!いつまでも迷ってられると、ほんと迷惑。さっき  
と成仏して、天国なり地獄なり行って先に死んだ彼氏とやらとよろし  
くやってくればいいのに」

「黙れって言ってる!!」

ガンッ

蛇の様に伸びてきた手が、あたしの腕を掠め、後ろの欄干を掴んだ。  
蓮華の顔が、間近に迫る。

さっきのそれよりも、ずっと昏く煮え立つ瞳が真正面から射抜いて  
くる。

「死にたいの……!?!」

低く響く声。

ただの脅しじゃない。

彼女の中の闇が牙を剥く。

背筋に走る、例え様もない悪寒。

これが、殺気というものなのだろうか。ただ、あたしも引かない。ここで、引くわけにはいかない。

「……黙らない……」

恐怖に狭まる気道を鳴らしながら、答える。

「何度も言わせるな……」

怖気立つ様な、声が言う。

「あんたにあたし達の、鈴華の何が分かる!？」  
叫ぶ声。

けれど、あたしも負けじと声を張り上げる。

「分からない!!分かる訳ないでしょ!!」

「——!？」

火事場の馬鹿力とでも言おうか。思いの外大きく響く、あたしの声。

虚を突かれたのだろう。蓮華が、驚いた様に息を呑むのが分かった。

ここぞとばかりに、まくし立てる。

「あたしが分かるのは、あんたが死んだ姉に縛られてるって事!!そして、そのあんたが先輩達を傷つけたって事!!それだけ!!」

ありったけの声。

喉が裂けそうになるけど、構うものか。

「それで、どうしてあたしが鈴華さんの事を良く思える!?!どうして良い娘だなんて思える!?!」

欄干を握っていた手が緩む。

それを振り払いながら、あたしは詰め寄る。

「あたしだけじゃない!!きつと、これからこの話を聞いた人達もそう思う!!そんなあんたに傷つけられる人達は、みんなそう思う!!」

手応えがあった。

あたしの言葉が、蓮華を打ち据えていた。

彼女の心の中の、一番弱い部分を抉っていた。

「あんな娘を一人遺して死んで、何て勝手な姉なんだろう!!あたし達がこんな目に合うような種を遺して、なんて迷惑な娘なんだろう

!!

こんな事を言う事が、本当に正しいのかは分からない。だけど、今のあたしに分かる事はこれだけ。だから、ぶつける。

今のあたしが言える事、全てを飾り立てる事なく、ただぶつける。

「あんたが鈴華さんに縛られてる限り、あんたがそんな事を続ける限り、鈴華さんはそんな悪意にさらされ続ける!!」

そう、子供ガキのあたしにだって分かる。

人は、残酷なのだ。

例え、相手が今はこの世に亡い人間でも。

例え、相手がどんなに悲しい想いを抱いて逝っていたとしても。

その姿を自分達の思うままに歪め、誹謗し、嘲笑する。

その人が、自分とは関係ない場に立つ者なら、なおの事。

だからこそ、遺された者達は守らなければならない。

そんな残酷さから。

そんな悪意から。

己を守る術を無くした者を。

己を示す術を無くした者を。

守っていかなければならない。

そうしなければ、彼女は傷つけられる。

死してなお、辱められ続ける。

だから、彼女は。

蓮華は気付かなければならない。

自分の行為の意味に。

それが為す結果に。

気付かなければいけない。

例え、その行為が 彼女 を想うものからであったとしても。

悪は、悪。

決して、許されるものではないのだから――。

「分かってる!?!理解してる!?!誰でもない!!一番は蓮華!!蓮華が鈴華さんを貶めてるのよ!!」

だから、あたしは叩きつけた。

最後の言葉を。

あたしが言える中で、一番痛いだろう言葉を。

彼女に。

蓮華に、叩きつけた。

ハア ハア ハア

吐き出すべき言葉を吐き出して、あたしは荒い息をつく。

気がつけば、蓮華は泣いていた。

地面に崩れ落ち、両手で顔を覆って。

小さな子供の様に、泣いていた。

そんな彼女の嗚咽を、あたしは黙って聞いていた。

いつまでも。

いつまでも、聞いていた。

続く

― 想い歌 ― ⊠

― 27 ―

「……落ち着いた？」

蓮華の嗚咽が止むのを見計らって、あたしはそう声をかけた。

「……………」

彼女は黙ったまま服の袖でグイツと顔を拭うと、開口一番、

「屈辱……………」

と言い放った。

「何よ？それ」

「秋庭さんにならともかく、あんたに……ごときにまで泣かされるなんて」

「泣かされたんだ」

「訂正。勝手に泣いただけ」

そう言いながら、蓮華はゴシゴシと目を擦る。

今日泣くのは2回目だというその目は、幾分腫れぼったく見えた。やがて、ヨロリと立ち上がると制服についた埃をパンパンと払いながら、あたしを睨む。

「この借りは、いつか返すからね……………」

そう言う声は、言葉とは裏腹に酷く弱々しかった。

「まあ、それもいいんじゃない？」

あたしがそう言うと、蓮華が怪訝そうな顔をした。

「何が？」

と訊いてきたので、

「泣くのもさ」と言った。

「泣きなよ。そして、流しちやいな。鈴華さんへの想いも、相手の男の子とやらへのわだかまりも」

全く、我ながららしくない。まるで、古い演歌の文句みたいだ。けど、他に気の利いた文句も浮かばない。そのまま、勢いに任せる。

「でないよ、あんたはずっとそのまんま。鈴華さんを傷つけ続けるよ」

そう。この娘に必要なのは、鈴華さんの事を、そしてその相手の少年の事をすっぱり割り切る事。

それが出来た時、初めてこの娘の世界は開かれる。

「……………」

「……………」

蓮華は、何も言わない。

あたしも、もう何も言わない。

しばしの間。

すると――

「……………く……………」

蓮華の肩が、小刻みに震え始める。

「……………？」

「くくく……………あは、ははははは……………」

笑い出した。

唐突に。

「ちよ……………ちよつと?」

「ははは、ははははははははは!!」

夜闇に響く笑い声。

壊れた様に鳴り響くそれが、あたしの背筋を怖気させる。

「ちよつと!!?どうしたのよ!」

湧き上がる恐怖と不安を振り払う様に、問いかける。

けれど、笑いは止まらない。

壊れた嬌声はしばらくの間、夜を震わせ続けた。

「……………」

「ん?どうした?」

帰ろうと自転車を引つ張り出していると、里香が空を見上げていて事に気がついた。

「何か、見えるのか?」



もう一度訊くと、里香は「ううん」と首を振った。

「何かね、如月さんの声が聞こえた様な気がした」

「うえっ!？」

思わず飛び上がりながら、周りを見回す。

辺りには、すっかり夜闇が堕ちている。

自転車置き場に建てられた外灯だけが、唯一の光源だ。

その光の外の暗闇に、あの幽鬼の様な姿が佇んでいる様に思えて背筋が冷えた。

「そんな気がしたただだよ。裕一、馬鹿みたい」

キョロキョロと明らかに挙動不審な僕を見て、里香が呆れた様に言う。

「いや、そんな事言うけどな……」

「如月さんは、もうあたし達に関わってこないよ。さつき、さよなら言った」

「お前、信じてんのか？あんな奴の事」

「如月さん、嘘つかないよ」

あつきり、言い切った。

「いや、俺散々騙されたんだけど……」

「何、怯えてるの？」

呆れた様な視線が痛い。

だって、仕方ないじゃないか。どんな目に会わされたと思ってるだ。

そんな僕から視線を外して、里香はまた夜空を見上げる。

「如月さんが色々したのは知ってるけど、あの言葉は嘘じゃない。

それは、絶対」

そう言う里香の目は、不思議な確信に満ちている。

僕としては色々と言いたい事はあるけれど、里香がそう言うのならどうしようもない。

里香と蓮華。その有り様に違いはあるけれど、僕達とは違う世界を見ている二人。何か通じるものがあるのかもしれない。里香との世界を蓮華あいつなんかには専有されるのは非常に癪あいつだけだ。

「でも……」

「ん？」

「それだけ」

夜空を見つめながら、里香は言う。

「あの娘はまだ、抜けてない」

「へ？」

意味の分からない言葉。

思わずポカンとする。

「あの娘は、まだ昏いトンネルの中にいる」

「里香……？」

「一人じゃ抜けない。誰かが手を引いてあげなくちゃ」

言葉の真意を取りかねてる僕を、里香が見た。

「ねえ、裕一」

「え？」

「あの娘の手を引いてくれるのは、誰なのかな？」

戸惑う僕を、里香が見つめる。

その瞳は、夜空に瞬く星の様に澄んだ光に満ちていた。

「くく……ふふふ……」

永遠に続くかと思われた、笑い声。けれど、それもやがて細まって、夜の闇へと溶けていく。

「ふふふ……ああ、可らしい……」

嬌声とともに吐き出したものを取り戻す様に、蓮華は大きく息をついだ。

「……何が、可らしいの……？」

半ば呆然としながら、あたしは問う。

そんなあたしを横目で見ると、その顔に笑いの余韻を貼り付けたまま、蓮華は言った。

「だって、同じなんだもの」

「え……？」

「母さんと同じ。あんた、何にも分かってない」

「どう言う……事……？」

絞り出した声に返るのは、白い仮面に貼り付けた亀裂の様な笑み。

「あんた、まだそう思ってたんの？」

言葉の意が、捉えられない。

あたしの戸惑いを無視する様に、蓮華は続ける。

「鈴華があいつの……光貴みつぎのせいで死んだって、そう思ってたの？」

“光貴”。

それが、件の少年の名だろうか？

けれど、それに思考を向ける余裕は、今のあたしにはなかった。

「ホント、揃いも揃って、馬鹿ばかり」

ゾクリ

ゾクリ

蓮華が言葉を紡ぐ度、背中を悪寒が走る。

何だ？

この娘は、何を言おうとしているのだ？

「教えてあげるよ……」

響く声は、酷く冷えている。

死者が声を発するとしたら、こんなではなからうか？

そう思わせる、声だった。

「鈴華を死なせたのは、光貴じゃない……」

「え……？」

瞬間、月が陰る。

堕ちる影が、蓮華の顔を闇に落とす。

「鈴華が、死んだのは……」

顔型の闇が揺れる。

冷えた声が、闇に響く。

「鈴華を、死なせたのは……」

闇の中で、赤い口がパクパクと動く。

紡ぎ出す言葉は、まるで怨嗟の様に流れて溶ける。

「殺したのは……」

ヒクリ

喉が、引き連れる様に鳴いた。  
次の言葉を、忌避する様に。  
でも、流れる呪歌は止まらない。  
そして、最後の言葉が紡がれる。  
「あ・た・し・だ・よ」  
辺りを染める闇が、怯える様に震えた。

続く

— 想い歌 — · ☒

— 28 —

♪ — 流れていく 小さな願い  
涙と少しのリグレット  
罪に気付くのはいつも 全て終わった後 — ♪

夜闇の中で、外灯の光がゆらゆらと揺れている。

その光の外に、“彼女”は立っている。

まるで、光は自分の居場所じやないと言う様に。

さつきまでの嬌声が嘘の様に、彼女は黙っている。

聞こえるのは、川のせせらぎ。そして、淡い光に誘われる数匹の虫の羽音。

そのうちの一匹が、堪りかねた様に光に飛び込む。

ジュツ

小さな音。

その身を求めた光に焼かれ、虫はポトリと地面に落ちた。

「馬鹿」

地に落ちた虫を見下ろして、彼女は言う。

「届かないものに手を伸ばすから、そういう事になるのよ」

そして、まだヒクつく虫をグシヤリと踏み潰した。

そんな彼女を見つめながら、あたしは戦慄く声で問う。

「……どういう事よ……？」

黒い瞳が、キロリとあたしを見る。

「言った、まんまよ」

「……!!」

「あたしが、鈴華を殺したの」

なんの躊躇もなく、言い放った。

「……分かんないわよ……」

喉が、カラカラに干からびていた。  
さつき、潤したばかりだと言うのに。

「あんたが殺したって……何言ってるのよ!! 訳分かんないわよ!!」  
蓮華が、馬鹿でも見る様な顔でこっちを見た。

昏く沈んだ眼孔が、ギラギラと異様に輝いて見える。ハッキリと分かった。これが、狂人の眼差しなのだ。

蠢く闇を纏いながら、蓮華は言う。

「……まあ、ここまで絡んだんだもんね。いいよ。聞かせてあげる」  
ククツ

細い喉が、引きつる様な笑いを漏らした。

「分かってたんだよ」

眼下を流れる川面に、大きな半月が揺らぎながら映っている。それをじっと見つめながら、蓮華が呟いた。

「鈴華が『あいつ』と……光貴みつきと一緒にあった時、鈴華は別にあたしを捨てた訳じゃなかった」

「……え……?」

どういう事だろうか。

鈴華が、光貴という少年に心奪われた事。蓮華とのつながりを希薄にした事が、そもその事の発端ではなかったのか。

「別に、鈴華は変わってなかったよ。今までどおり、あたしに接しようとしてた」

「……?」

「ほら、やっぱり分かってない」

ポカンとするあたしを見て、蓮華はケラケラと笑う。

「あたし達、ずっと一つだった。それが、たかが男の事だけで分かれると思う?」

虚空を彷徨う様な、虚ろな口調。ボソボソのサイドテールが、フルフルと揺れる。

「光貴と付き合う様になってからも、鈴華は変わらずあたしに寄り添おうとしてた。だけど……」

闇色の瞳が、キユウと細まる。

その顔に差し込む闇が、一層深くなった様に見えた。

「あたしが、許せなかった」

グシヤリ

さつき踏み潰した、虫の死骸。それをすり潰す様に、蓮華の足が地面を抉る。

「あたしは、鈴華が自分だけのものでなくなっただけが許せなかった。光貴という鈴華が許せなかった。だから——」

白い顔に、ひび割れの様に広がる笑み。

まるで、赤い三日月の様だ。

「切って」やった」

「へ……?」

「あたしが、切って」やったのよ」

「——!!」

驚きに、息が途切れた。

空気の切れた金魚の様に口を開けてるあたしを嘲る様に、蓮華は続ける。

「あたしは、鈴華との関係を切った。そして、鈴華が光貴にうつつを抜かして、あたしを蔑ろにしている様に見せかけた……」

「どうして、そんな事を……?」

訊くあたし。きつと、すぐく馬鹿みたいな顔をしていたと思う。

「どうして? 決まってるじゃん」

顔に赤い三日月を張り付かせたまま、蓮華は答える。

「鈴華が、周りから白い目で見られる様にするためよ」

ククク。

引きつった笑いを漏らしながら、白い首が月を仰ぐ。

まるで、その輝きを揶揄するかの様に。

「当然じゃない。罰だもの。あたし達の間、余計な異物を入れた罰。」

そして、蓮華はまたケラケラと笑う。

その様を、あたしは呆然の体で見つめていた。

何という事だろう。

二人の間を裂いたのは、鈴華でも、まして光貴という少年でもなく、蓮華本人だというのか。

それでは、聞いていた話とは全く反対ではないか。

「鈴華はあたしに分かつて貰おうとして必死だったけど、あたしは耳を貸さなかった。まあ、元から貸す気、なかったけどね」

可愛さ余って……というやつだろうか。

その情念の深さに、あたしは薄ら寒いものを覚える。

「そんな事をしてるうちに、光貴の奴が死んだ」

蓮華が言う。

クスリクスリと。

噛み混じりに。

「気付いてたさ。光貴が死んだ後、鈴華が助けを求めてるって。苦しんでるって。まあ、知った事じゃなかったけど。当然だよ。あたしという事、聞かないから。全く、馬鹿みたい」

蓮華から鈴華に向けられる、憎々しげな言葉。

今まで思い描いていた二人の関係とは、相反するそれにあたしは狼狽する。

「で、でも、あんたのお母さん、あんたは鈴華を励まそうとして必死だったって……」

あたしの問いに、蓮華はさらに破顔する。

それはとても自虐的で、自嘲的な笑い。

「はあ？そんなの、格好だけに決まってるじゃん」

酷くあつげなく、そう言った。

「あの女、母親なのにそんな事も分かんないんだから。嫌になっちゃう」

そして、また笑う。

その笑いは、母親に向けたものだろうか。

それとも、自分に向けたものだろうか。

「あたしは光貴を貶めたかった。あいつのせいで、鈴華はこんな事になってる。あいつのせいで、あたしはこんな目にあっている。そ



れを、世間に印象付けたかった」

あんたの言った通りの事。

蓮華は言う。

あんたが言った通りの事を、光貴あいつにしてやったのだと。死んだ彼を貶めて。

傷つけて。

自分の溜飲を、下げていたのだと。

「その上で、あたしは鈴華を拒絶してた。必死だったよ。あの娘。必死で「助けて」って言った。けど……」

聞く気にや、ならなかったなあ。

わざとらしいほどに大きく響く、言の葉。

そしてまろび出る、笑い声。

まるで、囁きが言葉の形を成して出てくるみたい。そう思った。

「まだ許さない。もっと苦しめばいい。もう二度と、あたし以外の人間とつながろうなんて思わなくなるくらいにつてね。そう思った訳」

そこにあつたのは、底の知れない悪意だった。

自分の理想とは違う形へと向かった姉に対する、あまりにも無垢な、そして残酷な悪意。

「最後の遊園地の日、鈴華はあたしに訴えかけてきた。必死に。一生懸命に。だけど、あたしはそれも、無視した。顔だけで笑って、心で無視した。最後の、念押しのもりだったんだけど」

そう。あの母親は、そしてあたしは、本当に何も分かっていなかったのだ。

いや、恐らくは周りの人間全てが分かっていなかったのだろう。

全てを拒絶したのは、想い人を失った鈴華ではない。

一度遠くに行ったものを、もう一度縛りつけようとした蓮華の方だったのだ。

あまりの事に、もう言葉も出ない。

「あの娘、死んじゃった」

終わりの言葉も、酷くあっさりと紡がれた。

「ほら、分かったでしょ？ 鈴華が死んだのは、あたしのせい。あたしが、殺したの」

大きく、一息。

蓮華の瞳が、虚空を見つめる。その先にあるのは、冷たく輝く大きな満月。

「馬鹿だよねえ」

黒い瞳が、月の光にるおんと揺らぐ。

「あたしの言う事を聞いてれば。光貴なんかに構わなければ」  
夜闇に落ちた橋の上を、ザザツと風がわたる。

長いサイドテールが、それに翻られ、ふわりと舞う。

「死ななくて、済んだのに」

最後に、またケラケラ。

けど、その嗤いにもう感情は感じられない。

まるで、能面が笑っている様だった。

『リグレットメツセージ』

不意に蓮華が言った。

「知ってるでしょ？ 後半の歌詞」

「……………」

もちろん、知っている。

言われるままに、頷く。

「全く、よく考えられた歌詞だと思わない？」

笑みが張り付いたままの、顔。

それが、今にも泣き出しそうに見えたのは、気のせいだろうか。

『——罪に気付くのはいつも 全て終わった後——』ってね。」

罪の告白を終えた罪人の様に、蓮華は大きく息を吐く。

そして、彼女はまた、ケラケラと虚ろに笑った。

続く

いつしか、月はその顔を隠していた。

眼下で嬌声を上げる少女。

その声を。その言葉を。それ以上聞く事を拒む様に。

月は、その顔を隠していた。

「くふ、くふ、くふ……」

笑いに引きつく身体を、抱える様に折り曲げる蓮華。

その様を、あたしはただ呆然と眺めていた。

思考が、完全に麻痺していた。

目の前で笑い転げる少女。

歳も。

学年も。

体つきも。

自分と、変わらない少女である筈の存在。

けれど、今のあたしの目に映るものは、そうではなかった。

それは、あまりに歪み尽くして。

あまりに、壊れ尽くして。

そして、あまりに異質だった。

いや、彼女が異質である事は最初から知っていた。

知っている、つもりだった。

けれど。

だけ。

甘かった。

浅かった。

あたしは。いや、きっと戎崎先輩も、そして秋庭先輩さえも。

彼女の。如月蓮華の中に潜む闇の深さを、甘く見ていた。

それを知らしめる様に、彼女は笑い続ける。

そんなあたし達の浅はかさを、揶揄する様に。

——と——

ピタリ

闇を揺らしていた、嬌声が止まる。

そして、

ユラリ

彼女が、ゆっくりと身を起こす。

漆黒の目が、あたしを捉える。

月の隠れた夜闇の中で、それは昏い洞穴の様に見えた。

「……で……」

思わず後ずさるあたしに、彼女が言う。

「あんたは、『あの女』に何を頼まれた？」

あの女。それが、彼女の母親の事を指しているのだと直感的に分かった。

そう。この娘にとっては、自分を想うあの女ひとさえ、その程度の存在でしかないのだ。

「何、黙ってる？」

立ち尽くすあたしに、彼女がにじり寄る。

どうしていいのかわからない。

何を言っても。何をしても。この娘の心には届かない。

どうしようもなかった。

彼女が、近づいてくる。ゆらりゆらりと、その身を揺らして。

「ほら。言っただらんよ。あの女、何を言った？何を託した？」

気圧されるままに、後ずさる。

トスン

程なく背中が、橋の欄干に当たる。もう、逃げ場はない。

「言えないなら、代わりに言っただげようか？」

あたしの身体を挟み込む様に、白い腕が欄干を掴む。

ビョウ

風が吹く。

長くたなびく彼女の髪が、あたしの頬をくすぐる。汗の匂いが、微

かに香った。

彼女が、顔を寄せてくる。甘い吐息が、顔にかかる。

そして、

「——あの子の、本当の友達になつて——てか？」

あの女ひとがあたしに託した言葉を、彼女は一言一句違わずに言つて見せた。

日が暮れ、夜の満ちた部屋の中。

灯りを灯す事もなく、“彼女”はただ座つていた。

食卓の上には、すでに冷め切つた食事が二人分。けれど、それを囲むべき家族の姿は、そこにはない。

今日だけの話ではない。その相手は、昨日から彼女の元へは帰つていなかった。

けれど、彼女はそれに対する行動を起こそうとはしなかった。

学校へ問いかける事も。警察へ通報する事も。彼女はしなかった。

分かつて、いたから。

自分がそれをしたところで、かの子の心は戻つてこない。

その術はもう、自分の手の中にはないのだ。

彼女には、もう待つしか出来る事はなかった。

それが、奇跡にも等しい確率でしかないと知りながらも。

彼女は、ただ待つだけだった。

ツウ……

瘦けた頬を、一筋の雫が伝う。

こぼれたそれが、胸に抱いた写真に落ちる。

滴つたそれは、写真の表面に細い細い線を描く。

まるで、写真の少女が泣いているかの様に。

昏い部屋。

闇の向こうは、見えない。

まだ、見えない。

「……凶星？」

震えるあたしの耳元でそう囁くと、蓮華はその顔にまた笑みを浮かべる。

白い顔に浮かぶそれは、まるで仮面に入った亀裂の様だ。

「あんたも災難だね。こんな無駄な事押し付けられて」

クツクツとせせら笑いながら、彼女があたしから身を離す。

ハアツ

肺に澱んだ空気を吐き出す。

そんなあたしを横目で見ながら、彼女は言う。

「でもね」

色のない声で。

「あんたじゃ、役不足」

ザツクリと、切り捨てた。

「しかしなあ……」

「ん？」

何処か腑に落ちない気持ちで呟いた僕の言葉に、里香が小首を傾げる心配がした。

「こら!!後ろ向くな!!」

思わず振り返ろうとしたら、怒られた。

驚いた拍子に、自転車の頭が少し振れる。

「うわっ!!ととっ!!」

「ほら、危ない!!ちゃんと前見ろ!!」

里香の怒声を聞きながら、慌てて自転車を立て直す。

「あ、危なかった……」

「気をつけてよ!!裕一の馬鹿!!」

青息を吐く僕の耳を、里香の叱咤が容赦なく打つ。

けど、何だな。今回の事件で散々言われたせいとか、少々馬鹿と言われても気にならなくなったな。良い事なのかどうかは、知らないけど。

「で、何？」

そんな間の抜けた事を考えていたら、また里香に声をかけられた。

「へ？何って何だよ？」

「さつき、何か言ってたじゃない」

「あー、あれな」

いつの間にか、月が隠れていた。見えづらくなった視界に気をつけながら、僕は里香との会話に意識を向ける。

「あいつの事さ」

「あいつって、如月さんの事？」

「ああ」

里香の問いに頷きながら、僕は目の前に漂う夜闇を見つめる。

「やっぱり、よく分かんないんだよなあ。結局、あいつは俺にどうして欲しかったんだよ？俺は男だし、あいつの姉ちゃんにはなれないんだぞ？」

「裕一、ホントに馬鹿」

間髪入れずに言われた。

後ろは向けないけど、多分その顔は呆れに満ちている事だろう。いやいや、いつもの調子に戻った様で、結構な事だ。

「言ったじゃない？あの娘はね、なくした片割れになれる人を探していたの。男だとか、女だとか、そんなの関係ない」

その言葉を聞いて、僕は改めて溜息をつく。

「何だよ。例の歌の、「王女様」ってやつか？馬鹿馬鹿しい。そんな妄想に付き合わされちゃあ、たまったもんじゃねえよ」

「……………」

「召使気取りだか何だかしらないけど、お使えする方が亡くなったんだろ？それなら、召使らしく喪に服してりゃいいんだ!!」

里香が、眉をひそめるのが気配で分かった。

自分でも、酷い事を言っている自覚はあった。俗に言う、死体蹴りってやつだ。だけど、自重する気は微塵も浮かばなかった。とにかく、僕の蓮華に対する怒りの衝動は、まだ微塵も収まっていなかったのだ。

「だいたい……………」

「裕一」

さらに言い募ろうとしたら、ついに里香の声が飛んだ。  
やばい。怒らせたか？一瞬後悔したけど、放った言葉を引つ込める事は出来ない。首をすくめて、次に飛んでくるであろう罵詈雑言を待つ。

けど、聞こえてきたのは予想外の言葉だった。

「分かってない」

「へ?」

「裕一、全然分かってない」

「な、何がだよ」

戸惑う僕に、里香は言う。

「違うよ」

「は?」

「あの娘、召使なんかじゃない」

「え……?」

「あの娘は……」

里香が口にした言葉に、自転車のライトが微かに揺れた。

「無駄な努力、ご苦労様」

薄笑みを浮かべながらそう言う蓮華を、あたしはただ呆然と眺めていた。

駄目だ。

その事が、はっきりと分かった。

さつきまで見せていた弱さは、もう微塵も見えない。彼女の心は、また闇の底に沈んでしまった。

どうしようもない無力感が、身体を満たしていた。

ああ、やっぱり無理だった。

分かっていたのだ。

この娘の闇は、あまりにも深い。あたしみたいな小娘に、どうにか出来る筈はないと。

分かっていた筈なのに。

後悔の隅で、あの女の顔が脳裏を過る。



この結末を知ったら、あの女は失望するだろうか。  
初めて、人に託された。願い。想い。

それに、力が及ばない。その事が、こんなにも痛く、重いものだと  
言う事を初めて知る。

噛み締めた唇。そこから、微かに鉄錆の味が染みだした。

「あはは。何で、あんたが死にそうな顔してんのよ?」

突然、浴びせられる嘲笑。上げた視線の先で、蓮華が破顔していた。  
それは、とても綺麗で、無邪気で、だけど、昏い悪意に彩られた笑  
顔。

あたしの、そして恐らくはその向こうにある母親の想い。

その全てを嘲笑い、踏み躪る顔。

表現するなら、それは正しく――

“悪”だった。

「あはは。でも、スッキリした」

彼女は笑う。その笑顔に、姿に、声に、“悪”という言葉を体現し  
ながら。

「正直、腐ってたんだよねえ。戎崎先輩は手に入れ損ねちゃうし、秋  
庭さんには負けちゃうし。ホント、馬鹿ばっかで嫌になっちゃう」

あはは。あはは。

嘲笑う。

「でも、もういいや。どうでも、いいや。あたし、馬鹿になれないし」  
戎崎先輩の覚悟を知り、秋庭先輩の想いを理解し、それでも、なお  
彼女は嘲笑う。

まるで、そうする事が自分の存在意義とでも言うかの様に。  
そこには、さつきまで見せていた弱く、疲れ果てた少女の姿はな  
かった。

あるのは、全てを嘲り、睥睨する罪深き王の如き存在。

否、満ちる夜闇をドレスの様に纏ったその姿は――

そこに思い至って、あたしは理解する。

自分の、思い違いを。

――「悪ノ召使」――

彼女が口ずさみ、身に纏わせていたという歌。

それが示す様に、あたしは彼女を召使なのだと思っていた。守り、使えるべき王女を失った召使。

だからこそ、彼女はその面影を追い求め続けていたのだと。けれど、違う。

今、あたしの前にいる彼女は、そんな哀れな存在じゃなかった。そう。

彼女は「王女」だった。

それは、全ての始まり。そして、全ての終わり。

召使が全てを託し託された、「悪ノ娘」だったのだ。

続く

― 想い歌 ― ・ ☒

— 30 —

「王女様あ？あいつがあ？」

里香の言葉に、僕は素っ頓狂な声を上げた。

「うん」と言って、里香は頷く。

「どういう事だよ。訳分かんねえぞ？」

「召使は、自分を捨てて、王女様に未来を残した。だけど、あの娘は違う。あの娘が出来るのは、奪う事だけ」

奪う事だけ。

その言葉が、妙に耳に残る。

「あたしから裕一を奪おうとして。裕一からあたしを奪おうとして。そして、お姉さんから、未来を奪った」

淡々と話す里香。その声には、怒りも憐憫もない。

「姉から未来を奪った」そんな下りは、僕が吉崎から聞いた話にはなかった。当然、里香の耳にも入っていない。けれど、里香の言葉に、思い込みや着色の気配はない。

里香は、時々僕達には見えない事、聞こえない事を感じ取る。今度も、僕や吉崎の話から何かを読み取ったのかもしれない。

「あの娘は、王女様。与える事も出来ない。癒す事も出来ない。他人にも。自分にも。孤独な、一人ぼっちの王女様」

囁き歌う様に話す里香。透明な言葉が、透明な夜風に乗って流れていく。

僕はただ、それに耳を澄ますだけだった。

不意に、笑い声が止まった。

顔を上げると、蓮華の視線があたしに向いていた。

再び、背筋を這う怖気。けど、それは一瞬。すぐに気づいた。彼女が見ているのは、あたしではない。彼女が、見ているのは――

と、蓮華が動く。

ツカ ツカ

真つ直ぐに、あたしに向かつて歩いてくる。

けれど、あたしの前に来ててもその歩みは止まらない。あたしの横をすり抜け、橋の欄干に向かう。

そのまま、橋から下を流れる勢多川を見下ろす。

「ねえ」

突然、声をかけられる。

「この川、深いの？」

急の問いかけに、声が出ない。

「ねえ。深いの？」

再び、聞かれる。

その言葉に押される様に、ようやく頷く。

「そう」

そして、彼女は言った。

「じゃあ、終わりに出来るかな？」

言葉の意味が脳に染みる前に、蓮華はその身を欄干の向こう側へと踊らせた。

「——っ!!」

上げるべき悲鳴が、喉に詰まった。

全身から、雪崩る様に血が下がる。

転がる様に駆けて、彼女が消えた欄干から下を見下ろす。視界に広がる闇。その中から、見上げる瞳と目が合った。

心臓が悲鳴を上げて、あたしは無様に尻餅を突いた。

「あは、あははははは!!」

笑い声と共に、蓮華が欄干の向こうから顔を覗かせる。

飛び降りたと見せかけて、欄干にぶら下がっていたのだ。

「ははは、騙されてやんの」

ケラケラと笑いながら、欄干を掴む手に力を込める。それだけで、彼女の身体はヒラリとこちら側へ戻ってきた。

「ホント、馬鹿みたい。そんな事、する訳ないじゃん」

尻餅の体勢のまま、笑う彼女の顔を見上げる。そのうちに、メラメ

ラと怒りが沸いてきた。

まだ震えている足に無理矢理力を込めて立ち上がると、そのまま蓮華に飛びついた。

目を丸くしている彼女の襟首を掴み、怒鳴りつける。

「あんた!! いい加減にしなさいよ!! どれだけ人を玩具にしたら気が済むの!? 一体、どれだけの人があんたの事を想ってると思ってるのよ!! あんたのお母さんだって、きっと、鈴華さんだって……」

「だから、何?」

あたしの言葉は、伽藍堂の言葉に止められる。

「鈴華が何? 母さんが、何?」

陸に挙げられた魚の様に、無機質に動く口。それが、パクパクと言の葉を紡ぐ。

「鈴華は死んだ。母さんは何も分からない。あたしには、それが全て。それ以上もなければ、以下もない」

ああ。

「意味が無いの。今のあたしには。生きるのも、死ぬのも、何の意味もない」

ああ、やっぱりだめだ。

「離してくれない? あたしはあたしのもの。あんたに、どうこう言われる筋はない」

手の中から、掴んでいた襟首がスルリと抜ける。

あたしの言葉も。母の想いも。今の彼女には届かない。

あたしは思う。

こんな時、彼女ならどうするのだろう。

この娘と、蓮華と同じ罪を産むかもしれない闇を抱え、それでも凜とその中を歩き続ける彼女なら。

「——!!」

と、その名を思ったあたしの脳裏に浮かぶ、一つの情景。

それは、いつか見た光景。

それは、ある日の放課後。

傾き始めた西日。

薄闇が、辺りを覆い始めた頃。

その中を歩く、二人の姿。

一人は少年。自転車を押しながら。

一人は少女。少年に寄り添うようにして。

二人は、互いを支え合う様にして歩いていく。

どこまでも。

どこまでも。

その身体は、離れない。

やがて、その姿は落ち始めた夜闇の中に飲まれていく。

だけど、見ている者には分かる。

例え、どんな闇に飲まれようとも。

例え、どんな罪に問われようとも。

あの二人は離れない。

違わない。

どこまでも。

いつまでも。

まっすぐに。

一緒に、歩いて行くのだと。

共に、寄り添って行くのだと。

その背中が、告げていた。

……罪がある。

例え、万人がそれと認めなくとも。

例え万人がそれを否定しても。

存在する、罪がある。

罪は悪を産み。

悪は罪を産む。

それは、まごうことなき事実。

だけど。

だけど。

彼らなら、どうするだろう。

そうきつと、彼らなら。

ああ、そうか。

答えは、ここに。

こんな近くに、あつたじやないか。

あたしの変化に気づいたのだろう。蓮華が怪訝そうな表情を浮かべる。

そんな彼女に向かって。

あたしは最後の言葉を紡いだ。

続く

― 想い歌 ― ・ ☒

「何も無い?」

自然に出た言葉。

蓮華が、あたしを見る。

昏い眼窩。真つ黒な目。

怯みそうになる足に、気合いを入れる。

「あんたが、そう思ってるだけでしょ」

「……は?」

闇色の瞳が、ユラリと揺れる。

「何言ってるの?」

問いながら、顔を寄せてくる。能面の様な、色のない顔。背筋を、怖気が這い登る。けど、もう引く事は出来ない。引きはしない。

あたしでは駄目だった。母親あのみとでも駄目だった。彼女に届くのは、きつと“彼女”の想いだけ。

「もう一度、一緒に歩けばいい」

「……?」

胡乱気に揺らめく、蓮華の目。

向けられているだけ。その目は、あたしを見てはいない。この世の全てを、見ていない。空っぽな瞳。それに向かって、あたしは語りかける。

「歩いてけば、いいのよ。もう一度、鈴華さんと」

ギロリ

鈴華の表情が変わった。虚ろだった眼差しに、昏い光が戻る。

やっぱりだ。あたしは確信する。“彼女”の言葉なら、この娘に届くと。

けれど――

ガシャン

蛇の様に伸びてきた手が、あたしを突き飛ばした。背中が橋の欄干



に当たり、鈍い音を立てる。

息を詰まらせ、派手に咳き込む。そんなあたしに、肉薄する蓮華。

「……何言ってるの？マジで」

ギシ…………ギシ…………

耳の後ろで、鉄のパイプが軋む音がする。

「もう一度、言ってみ？」

冷たい息が囁く。

「ほら、言ってみ？」

薄い唇が、目の前で亀裂の様に歪んでいく。周りの気温が、数度下がった様に感じる。カタカタと言う、音が聞こえる。あたしの足が、震える音だ。

その心を見透かす様に、蓮華は言う。

「言ったよね？あんたに、鈴華の何が分かるって」

焦点すら定かでない視線が、舐め回す様にあたしを見る。

「教えたよね？あたしが鈴華に何をしたかって」

無表情な笑みが、引き攣れる様な声を出す。

「その上で、鈴華の名前出したんだよね？」

ヒヤリ

おでこに、冷たい感触が当たる。顔を寄せた蓮華が、自分のおでこを押し付けてきたのだ。もう、逃げ場はない。

「さあ、言いなよ!!」

歯を、食いしぼる。

すくみ上がる肺に、精一杯の空気を送る。

そして――

「もう一度、鈴華さんと一緒に歩けって言ってるのよ!!」

蓮華の顔にぶつける様に、あたしは声を張り上げた。

「……裕…………」

後ろで、里香の声があった。風が鳴く様な、そんな囁き声だった。

「ん？何だ？」

声を返すと、ちよつとの間があった。

まるで次の言葉をためらう様な、そんな間だった。

「何だよ？言えよ」

その間に、妙な不安を感じて、僕は里香を急かした。

「さつき……言ったよね？」

消え入りそうな声で、里香は言う。まるで、ためらう様に。そして、怯える様に。

里香は、言った。

「裕一は、幸せだって」

心臓が、ドキリとした。

（先輩は、幸せですか？）

さつき、薄明るい保健室で問いかけられた言葉。それが、脳裏を過る。

（幸せですか？）

目の前に、蓮華<sup>あいつ</sup>の顔があった。

昏い、だけど、真摯な瞳。

それが、僕を見つめていた。

「本当に？」

後ろでは、里香が問う。

「本当に、幸せ？」

ああ、お前も訊くのかよ。

心が、キュウと締まる。

「ずっと？」

里香が訊く。

（その幸せは……）

問う声が、〃あいつ〃のそれと重なる。

（いつまでたっても、何があっても……）

そして、紡がれる最後の問い。

だから、僕はお腹に気合いを込める。

「〃幸せ〃？」

「当たり前だろ!!」

僕は、半ば怒鳴る様な勢いで、その答えを繰り返した。

後ろで、里香がびくりと身を竦ませる気配がした。

ちよつと、力を入れすぎただろうか。だけど、構わずに僕は続ける。

「お前、結構馬鹿な!? そんなの、さつきも言っただろ!?」

「でも……」

里香が、か細い声を漏らす。

「あたしは……」

「……いっしょ」だろ!？」

里香の言葉の続きを潰す様に、僕は声を張り上げる。

「ずつと」……いっしょ」だつて、言っただろ!？」

めいっばいの想いを込めて、がなり立てる。

「いっしょなんだよ!? 何があつたつて!! どうなつたつて!! 俺とお前

はいっしょに歩いてくんのだ!!」

そう。その先にあるのが何であろうと、僕は里香と歩いていく。

その先にあるのが、底のない絶望だろうと。

一歩先も見えない、暗闇だろうと。

僕はこの手を離さない。

僕はこの温もりを忘れない。

ずつと。ずうつと。絶対に。

フワリ

柔らかい感触と、甘い香が僕を包む。

里香が、後ろから僕を抱きしめていた。

僕は自転車のハンドルから片手を離して、胸に回された腕に手を添

える。

「転ばないでよ」

里香が言う。

「大丈夫だつて」

僕も言う。

いつしか、隠れていた月が、再び顔を出していた。

半分の光が、僕らの前の道を照らしていた。

どこまでも。

どこまでも。

明るく、照らし出していた。

「何、言ってるの……?」

蓮華の瞳が、当惑する様に揺らぐ。

そんな彼女に向かって、あたしは叫ぶ様に繰り返す。

「もう一度、一緒に歩け!! 鈴華さんと一緒に!!」

「馬鹿……言わないで!!」

たじろぐ様に後ずさりながら、蓮華も叫ぶ。

「鈴華は死んでる!! もういない!!」

だから、あたしも負けずに声を張り上げる。

「あんたの中じゃ、死んでない!!」

「!!」

「だから、あんたは迷ってる!! やり直したくて!! だけど怖くて!!」

「そ、それは……」

狼狽する彼女の様子が、あたしの言葉の正しさを物語る。だから、

あたしは前に出た。

「つなぎなよ!! つながりなよ!! きつと……」

そして紡ぐ、最後の言葉。

「きつと、鈴華さんも、それを待ってる……」

時が、止まった。

声もなく、佇む蓮華。

見開いたその目が、闇の向こうに彷徨っている。

「鈴華……」

伸ばした手が、何かを求める様に虚空を掴んだ。

続く

—想い歌—・☒

—32—

♪—流れていく ガラスの小瓶

願いを込めたメツセージ

水平線の彼方に 静かに消えていく—♪

蓮華は、しばらくの間動かなかった。

まるで、魂が抜けたかの様に虚空を見つめていた。

あたしも、ただその様子を見つめるだけ。

出来る事はない。

ある筈もない。

ただ、黙って彼女を見つめる。

この娘の手を引けるのは、“彼女”だけ。

この娘を支えられるのは、“彼女”だけ。

だから、あたしは願う。

“彼女”が、再びこの娘の手を取ってくれる事を。

永遠とも思える様な、時間が流れる。

そして—

クルリ

「!!」

突然、蓮華があたしの方を見た。

そのまま、手が伸びてくる。

「な、何よ!!何!」

たじろぐあたしの横を、蓮華の手が通り過ぎた。

「へ?」

「何、ビビってんのよ」

傍らに放ってあったあたしのカバンを取り上げた蓮華が、呆れた様にそう言った。

「え?あ、ちよつと?!」

目の前でカバンの中をまさぐり始める彼女を見て、あたしは慌てて声をかける。けれど、蓮華は何処吹く風だ。

「持ってないの。貸してよね」

言いながら、カバンから引つ張り出したのは、ノートとペンケース。そして……

カリカリカリ

薄暗い橋の上に、ペンが紙を削る音が響く。

降り注ぐ月明かりの中で、蓮華は何かを書いていた。ノートを橋の欄干に置いて、一心にペンを走らせる。

カリカリカリ

脇目も振らない。

その背中に、あたしはおずおずと声をかけた。

「あの、何書いてんの……?」

「手紙」

「手紙? 誰に?」

「うるさい。邪魔」

返って来る、にべもない返事。

続けて質問する言葉もなく、あたしはただ黙って何かを書き綴る彼女を見つめる。

やがて、

カリ……

ペンの音が止まる。

文章を、ゆつくりと読み返す蓮華。

少しの間の後、小さく頷くとそのページに手をかける。

ペリ……ペリペリ……

丁寧に、とても丁寧に破り取る。そして、一枚の紙となったそれを、今度は折って、丸めていく。小さな筒状になった紙。それを片手に持ちながら、彼女は足元に置いてあったものを取り上げる。

それは、さつきあたしが飲み干したジュースのペットボトル。

その蓋を開けながら、蓮華は言う。

「あんた、ウェットティッシュか何か、持ってない？」

「は？持っていないわよ。そんなもの」

「ええ。汚いなあ」

「どうやら、あたしが口をつけた飲み口の事を言っているらしい。」

「んだと!? てめえ!!」

憤慨するあたしなぞ気にする素振りも見せず、自分のポケットから出したハンカチで飲み口を拭いている。

それが終わると、彼女は空のボトルにさっきの手紙とやらを詰め始めた。

トントン

何度か叩いて「それ」をボトルの底に落とすと、蓋を被せて締める。

ああ、そうか。

彼女が何をしようとしているのかを察して、あたしは口を噤む。

そんなあたしの様子に気づいたのか、蓮華がチラリとこつちを見る。その彼女の手の中には、手紙の入った小瓶が一つ。

そう。亡き片割れと想いを繋ぐのは――

「何て、書いたの？」

ボトルを見つめる蓮華に、聞いてみる。

「関係ない」

にべもない。まあ、そうだろう。

その言葉は、彼女達だけのもの。

あの人達にとってのそれが、そうである様に。

ただ、それは間違いなく、また彼女達を繋げるだろう。

受け入れられないなら、受け入れる必要などない。

認められないのなら、認められないままでいい。

どこまでも。

いつまでも。

一緒に、いればいいのだ。

そばに、いればいいのだ。

その想いも。

その罪も、もろともに。

そこまで想いあつていた姉妹なら。

それだけ繋がっていた絆なら。

どこに行っても。

どこにいても。

それが出来る筈。

どこまでも、歩いていけばいい。

どこまでも。

どこまでも。

そう。

あの、二人の様に。

いずれ、自分達を包むであろう闇も。

今、抱く罪も。

いつか、それが生み出すであろう、悪も。

その全てを受け入れ、歩みながら。

寄り添い続ける、あの二人の様に。

カツン

蓮華の足が橋の端へ向かう。

目の下を、涼やかな音を立てて流れる勢田川。それを見下ろし、そ

して――

ブンツ

大きく振りかぶり、ボトルを力いっぱい放り投げる。

綺麗な放物線を描いたそれが、空にかかる半月の中でクルクルと影

絵の様に回る。

クルクル クルクル

パツシャーン

遠くの方で、澄んだ水音が響いた。

おい。勢田川。

途中でどっかに引っ掛けるなんて、無粋な真似はやめろよ。

河川掃除のおっさんに回収されるなんてのも、NGだ。



しっかりと。

しっかりと、海まで届けろ。

そして、しっかりと託せ。

あの娘の。

鈴華さんの所まで、頼みますと。

それが、お前の責任。

一伊勢市民として、信用するからな。

遙か彼方の水面を、月の光を反しながら流れていくボトル。

それを遠目に見つめながら、あたしはそう願った。

「♪願いを込めたメッセージ 水平線の彼方に静かに消えてく♪

〜……か……」

ゆつくりと視界から消えていく小瓶を眺めながら、あたしは誰となくそう歌う。

すると、

「下手くそ」

なんて声が、横から飛んできた。

「悪かったわね」

些か……いや、かなりムツとしながら声の出所を睨む。

声の出所——蓮華は呆れた様な顔でこつちを見ている。

「じゃあ、あんた歌ってみなよ」

言ってみる。

「さつき、歌った」

「もう、忘れた」

あたしがそう言うと、蓮華は溜息をついて大きく息を吸った。

そして、

「……♪街外れの小さな港 一人佇む少女 この海に昔からある

密かな言い伝え♪……」

鈴の音の様な声が、静かに旋律を奏で出す。

「……♪君はいつも私のために 何でもしてくれたのに 私はいつ

もわがままばかり 君を困らせた♪……」

夜の水面の上に、優しい歌が流れては溶けていく。

「……♪流れていく 小さな願い 涙と少しのリグレット 罪に氣付くのはいつも 全て終わった後♪……」

ふと思う。今、この歌は誰の為に奏でられているのだろう。少なくとも、あたしの為じゃないだろう。

じゃあ、誰の為か。

……決まってるか。

「……♪流れていく 小さな願い 涙と少しのリグレット 『もしも生まれ変われるならば……』♪……」

彼女が、想いの全てを込めた歌。

静かに流れる水面みなもが、それを聞くべき者の元へと届けてくれたのか。

それは、誰にも分からない。

——結局、小瓶に詰めるのは歪みではなく、一つの願い——

続く

―想い歌―・☒

―それは、奇跡でした。

他人は、ただの偶然と言うかもしれない。

一時の、気の迷いだと言うかも知れない。

けど、あたしにとって。

それは、確かな光。

確かな救い。

届かないけど。

届かなかつたけど。

奇跡のような。

恋でした――

「あーあ、すっかり遅くなっちゃった。怒られるなあ。こりや」  
夜の街中、家路を急ぎながらあたしはぼやいた。

「余計なお節介焼くからでしょ？こっちこそ、いい迷惑だわ」  
横を歩いていた蓮華が、嫌味つたらしく溜息をつく。

「……悪かったわね……」

ジト目で睨むあたしを見下しながら、フンと鼻を鳴らす。

憎たらしく悪態をつく顔。

けれどそれは、憑き物が落ちたかの様に様相を変えていた。何か  
が、彼女の中で変わっている。それは、確かな事の様に思えた。

「で、」

それを感じて、あたしは気になっていた事を訊いてみる気になっ  
た。

「何よ？」

ぶつきらぼうに返る返事。気にせず続ける。

「あんた、これからどうすんの？」

「何を？」

「もう、戎崎先輩に付き纏うのは止めるんでしょ？」

その問いに、蓮華がピタリと足を止めた。

「……何言ってるの？今更」

冷たい、けれど、か細い声。

「いいの？」

「……いいのって、そもそもあんたもそれを望んでた口じゃないの？」

彼女の視線が、鋭くあたしを射る。けれど、そこにさつきまでの危うい昏さはない。だから、あたしも踏み止まれる。

「そりゃ、あんたの動機があんなんじゃないやね。けど、ホントにそれだけだった？」

「……？」

あたしの真意を測りかねる様に、目を細める。だから、ハッキリと言ってやる事にした。

「あんた、戎崎先輩には本気だったんでしょ？」

「――！」

動揺したのか、微かに揺れる視線。でも、それもほんの一瞬。彼女は、すぐに立ち直る。

「あんたには、関係ない」

遠回しの肯定。ほんの少しだけ、年相応の表情がその顔を過る。

そう。出来た筈なのだ。この娘には。もっと狡猾に。冷酷に。残酷に。二人の仲を引き裂く事が。それをしなかったのは、ひとえに彼女が戎崎裕一を、想っていたから。彼を真の意味で傷つける事を、そして、本当の意味で拒絶されること恐れていたから。

「……………」

「……あんたも所詮、女か……」

「うるさい……。馬鹿……」

カツン

蓮華の足が、進む方向を変える。

「どこ行くのよっ？」

「別の道で帰る」

あたしに背を向けながら、言う。

「あなたの馬鹿話に付き合おうの、疲れた」

そのまま、あたしとは別の道へと向かう。

「帰り道、分かるの？」

「馬鹿にしないで」

馬鹿馬鹿と連呼しながら、蓮華は薄暗い路地へと歩いていく。

あたしはただ、その背を見送る。

と、その足が止まった。

「あなた」

「え？」

突然声をかけられて、驚いた。

「吉崎……多香子だっけ？」

「……そうだけど？」

薄闇の向こうで、何かが光る。

蓮華が、肩越しにこつちを見ていると気づくのに、少しかかった。

「ありがとう」

「へ？」

答えはもう、返ってこない。踵を返し、彼女は再び歩き出す。その姿が、闇の向こうに消えるのを見届けると、あたしは一人ごちた。

「ありがとう……か」

ふと、夜闇の中に“彼女”の顔が浮かんだ。

それは、蓮華が“あの女”と呼んでいた女の顔。

彼女達の事を、心から想って。

だけど、その心を察する事が出来なくて。

彼女達を、救う事が出来なかった女。

どうにかしたくて。

けれど、どうにも出来なくて。

赤の他人のあたしにすら、すがらなければならなかった。

それは、とても情けない話。

だけど、とても悲しい話。

想っているのに、届かない。

想っているのに、間違える。

それは、まるであの娘と同じ。

ああ、親子なのだな、と思う。

今日、蓮華が帰った時、その顔を見て彼女は何を想うのだろうか。

（——あの娘の、本当の友達になってくれる？——）

彼女からあたしに託された、あえかな願い。

それに、答える事は出来なかった。

だけど——

「少しくらいは……」

あたしは夜の空を見上げ、小さく呟く。

空には、大きな半月が微笑む様に浮かんでいた。

続く

次の日の朝、僕はいつもの上り坂で里香と行き逢った。

僕が「おはよう」と言うと、里香も「おはよう」と返してきた。いつもの朝。

いつものやり取り。

何だかそれが、すごく懐かしく感じられる。

「身体の調子、どうだ？」

僕が訊くと、里香はニツコリ笑って、

「うん、大丈夫。朝ごはんも、ちゃんと食べれたし」と言った。

僕は「そうか」とか言いながら、まじまじと彼女を観察する。

うん。昨日悪かった顔色も普段どおりに戻っているし、本当に具合が悪そうな様子はない。

内心、かなり心配していた僕はホッと息をついた。

でも、そんな僕の気持ちを当の本人は知るよしもなく、「何ジロジロ見てるのよ？気持ち悪い!!」なんて言ってくる。

全く、少しはこっちの心情も察してくれよ。昨夜も、それでろくに眠れなかったんだから。

そんな事を思いながら、僕はこっそりと溜息をついた。

と、ふと視線が里香の首に止まった。

あれ？と思う。

そこだけ、肌の質感が変だった。

何というか、自然じゃないというか、人工的と言うか。とにかく、普通の肌じゃない。

よくよく見ると、それは特大サイズの絆創膏だった。

肌色の保護色をほどこしたそれが、里香の首筋にピッタリと張り付いている。

おかしいな。昨日はこんなもの、してなかった様な気がするんだけど。

「里香」

「何？」

「首、どうかしたのか？」

「え？」

「首だよ。首。絆創膏なんかして。どうかしたのか？」

「あ、ああ。これ？」

里香が、首筋を押さえる。

少し、慌てた様に見えたのは気のせいだろうか。

「昨日、少し怪我しちやっみたい。」

それを聞いた僕は、飛び上がりんばかりに驚く。

「おい、何だよそれ!?!聞いてないぞ!!」

僕の剣幕に、そつちも驚いたのか里香が目丸くする。

「小さな怪我だから。昨日家に帰ってから気がついたの」

里香には珍しい、弁解する様な口調。それが、僕に疑念を抱かせる。

「昨日って……やっぱり、蓮華の奴になんかされてたのか!?!」

昨日の事件の張本人は、如月蓮華。

連想は容易につながる。

けれど、里香はそれを真っ向から否定した。

「違うよ。如月さんじゃない。」

「だ、だってお前、そんな所どうやって怪我するんだよ!?!誰かにやられたとしか……」

「それでも、如月さんじゃない!!」

里香はピシヤリと言った。

顔が、すごく真剣だった。

目が、真っ直ぐに僕を見ている。

さっきの、戸惑いの混じった顔じゃない。

いつもの。

いつもの、強い里香の顔だ。

この顔になった里香に、僕は勝てたためしがない。

「でもや……」

氣勢がみるみる萎んで、言葉も尻すぼみになってしまう。



「だいたい、本当に大した怪我じゃないから。裕一だって昨日、気付かなかったじゃない」

「う……」

痛い所をつかれた。

確かに昨日、僕はそれに気づかなかった。

他に気になる事が山ほどあったとは言え、だ。

「だから、大した事じゃないの。全然。分かった？」

「だ、だって……」

「分かった!？」

「わ、分かった……」

畳み掛けてくる里香。

半ば、強制的に頷かされてしまう。

そんな僕を見て、里香はほっと息をつくと、「じゃあ、この話は終わり。いいね？」などと言った。

「う、うん……」

これ以上しつこく突っ込むと、本気で怒り出しかねない。

せつかく戻ってきた平安を、こんな事で台無しにするのは御免だった。

結局、僕の釈然としない思いを残したまま、この件はお流れとなった。

次の日の朝、あたしはいつもの上り坂で裕一と行き逢った。

彼が「おはよう。」と言ってきたので、あたしも「おはよう。」と返す。

いつもの朝。

いつものやり取り。

何だかそれが、すごく懐かしく感じられた。

「身体の調子、どうだ？」

裕一が、そう訊いてくる。

心配そうな顔。

目の下に、少し隈が出来ている。

ひよつとしたら、昨夜は良く眠れなかったのかもかもしれない。その事が、少し嬉しい。

だから、あたしはニツコリ笑って、

「うん、大丈夫。朝ごはんも、ちゃんと食べれたし」と答えた。

それでも今一つ安心できないのか、裕一は「そうか」とか言いながら、まじまじとあたしを見つめてくる。

って言うか、観察してくる。

気持ちは分かるけど、そうジロジロ見られては、少し恥ずかしい。よって、「何ジロジロ見てるのよ？気持ち悪い!!」なんて言葉が出てしまう。

途端にしよんぼりする、裕一。

溜息なんてついているその姿に、ちよつと言い過ぎたかな、とか思う。けれどまあ、いつもの事だ。すぐに立ち直るだろうなんて思っていたら、裕一がまたこっちを見ていた。

何だろう？さっきとは少し、目の感じが違う。あたしの調子なんて漠然としたものではなく、もっと具体的なものを見る様な……。

あたしが戸惑っていると、裕一が言ってきた。

「里香」

「何？」

「首、どうかしたのか？」

「え？」

ドキリとした。

「首だよ。首。絆創膏なんかして。どうかしたのか？」

「あ、ああ。これ？」

思わず、首筋を押さえてしまう。

少し、慌ててしまった。不審に思われただろうか。

「昨日、少し怪我しちゃったみたい」

とっさに出た言い訳に、自分でしまったと思う。何を馬鹿正直に、昨日のゴタゴタでなどのたまっていいのか。昨日、帰ってから家の中で転んだとか、適当にでっち上げれば良かったのに。

ほら、裕一があからさまに驚いている。

「おい、何だよそれ!?聞いてないぞ!!」

彼の剣幕に、思わず目が丸くなる。

いつもの裕一からは、考えられない迫力だ。

「小さな怪我だから。昨日家に帰ってから気がついたの」

つい、弁解する様な口調になってしまった。それがまた、彼に疑念を抱かせてしまったらしい。

「昨日って……やっぱり、蓮華の奴になんかされてたのか!?!」  
いきなり核心を突いてきた。

確かに、昨日の事件の張本人は如月さん。

連想は、容易につながるだろう。

そして事実、あたしの首には彼女が残したものがあつた。

それは、赤く色づいた、小さな切り傷。

昨日、あの暗い教室で、彼女に首を切りつけられた時についたもの。微かに、けれどクツキリと刻み込まれたそれは、一晩明けた今日になってもその形を留めていた。

まるで、彼女の決意を代弁するかの様に。

気をつけなければ気付かない様な、本当に微かな傷。

ほっとこうとも思っただけれど、万が一誰かに見られたらと言う思いが先に立ち、つい絆創膏で隠してしまった。

けど、結果としてはそれが裏目。

かえって、裕一の目を引いてしまった。

ほら、彼の顔が8割方怒っている。

犯人が如月さんだと、確信しかけているのだろう。

けれど、ここで「うん」という訳にはいかない。

もし、ここであたしが領けば、裕一は直ぐに学校に、如月さんの元にすつ飛んでいくだろう。そして、その先で何が起こるのかは、想像に難くない。

だけど、そんな事に何の意味があるだろう。

如月さんは傷ついて、裕一も傷つく。

得する者なんて、誰もいない。

そう。

全ては昨日、終わったのだ。

それを、今更蒸し返す必要なんてない。

だから、あたしはそれを真っ向から否定する。

「違うよ。如月さんじゃない」

あたしの言葉に、裕一は虚を突かれた様な顔をする。

「だ、だってお前、そんな所どうやって怪我するんだよ!? 誰かにやられたとしか……」

「それでも、如月さんじゃない!!」

ピシヤリと言う。

自分の顔が、すごく真剣になっているのが分かった。

真っ直ぐに、裕一の顔を見る。

こんなあたしに、彼が弱いのは百も承知だ。

裕一の氣勢が、みるみる萎んでいくのが見て取れた。

「でもさ……」

反論は許さない。

「だいたい、本当に大した事じゃないから。裕一だって昨日、気付かなかったじゃない」

「う……」

痛い所をついたらしい。

へタレた顔が、さらにへタレる。

チャンス。

一気に畳み掛ける。

「だから、大した事じゃないの。全然。分かった?」

「だ、だって……」

「分かった!」

「わ、分かった……」

半ば、強制的に頷かせる。

すっかり大人しくなった裕一。

それを確認すると、あたしはようやく一息ついて、

「じゃあ、この話は終わり。いいね?」と言った。

「う、うん……」

不承不承と言った感じで頷く裕一。  
とりあえず、矛は収めてくれた様でホツとした。

これ以上食い下がられたら、本気で怒らなければならなかったかもしれない。

せつかく戻ってきた平安を、こんな事で台無しにするのは御免だった。

結局、裕一の釈然としない思いだけを残したまま、この件はお流れとなった。

それからしばらく後、僕と里香はまた並んで坂道を登っていた。

「いい天気だな」

僕がそう言うと、

「うん。いい天気」

里香もまた、そうやって返してくれる。

そんな当たり前の事が、たまらなく嬉しくて、愛おしい。

さっきのちよつとしたゴタゴタも、こうしているとどうでもいい事のように思えてくるから不思議だ。

昨日までは、いつも蓮華あいつの影がちらついて、おちおちこんなやり取りも出来なかった。

如月蓮華、か。

結局、あいつは何だったのだろう。

一番大切なものを奪われて。

一番大切なものを失って。

その果てに、その大切なものを僕に重ねて。

その果てに、里香から僕を奪おうとして。

結局、誰かを傷つける事しか出来なかったあいつ。

吉崎からその話を聞いた時は、薄ら寒い思いがした。

まるで、僕が必死に目を逸らしているものを、突きつけられた様で。

まるで、いつか来る自分の姿を見せられている様で。

怖気が走った。

正直、怖いと思った。

だけど。

蓮華はその想いを「恋」だと言っていた。

違う事なく、「恋」だと言っていた。

僕は、恋とはもつと優しいものだと思っていた。

かつての里香に生きる為の『覚悟』を与え、かつての僕に、彼女に

答える為の『勇氣』をくれた。

恋とは、そんな力をくれる温かいものだと思っていた。

だけど、蓮華の言う事が正しいのなら。

恋にはもつと、別の顔があるのかもしれない。

日向に影が出来る様に。

昼の反対に、夜がある様に。

もつと暗く。

冷たく。

闇色に沸き立つ恋も、あるのかもしれない。

そう。丁度、蓮華の持っていた、あの瞳の様に。

もし、そうならば。

そんな形でしか、恋を抱く事が出来なかった蓮華は。

こんな形でしか、恋を語れなかった蓮華は。

やっぱり、哀れなのかもしれない。

もつとも、だからと言って許したり、同情出来るわけではない。

自分の思いのままに僕を振り回し、あげくの果てに里香まで傷つけた。

今でも鮮明に覚えている。

薄暗い階段の踊り場で、冷たく笑う顔。

——この際、秋庭さんには消えてもらいましょう——

平然と言い放った、あの言葉。

半狂乱の里香。

今にも破裂しそうな、心臓の鼓動。

全部、蓮華がやった事。

どんな理屈をつけたって、犯した罪に変わりはない。

もしまた、同じ事を繰り返したら、今度は何の躊躇もなく殴り飛

ばすだろう。

女だから？停学？退学？知ったことか。

里香を守るなら、そんな事なんの障害にもなりはしない。

来るなら来い。里香は、僕が守るんだ。

だけど、そう息巻く反面、僕はもうそんな事は起こらないだろうという思いも持っていた。

なぜなら、

——さようなら。戎崎先輩——

昨日の、最後の言葉が脳裏を過ぎる。

三人だけの保健室の中で、寂しげに、だけはつきりと言ったあの言葉。

ハッキリ言つて、僕は蓮華の事をまるで信用していない。

あれだけ散々に振り回されたんだ。当たり前だろ？

でも、あの最後の言葉だけは、信用出来る様な気がしていた。何故かと言われりや困るけど、とにかくそんな気がしていた。

蓮華はもう、僕と里香の前には立たない。

全ては、終わったんだと。

そんな確信が、僕にはあった。

「裕一、どうしたの？ブーツとして」

そんな事をとりとめもなく考えていたら、里香がそう言つて顔を覗き込んできた。

ハッと我に帰る。

「え、あ、いやー、ホント、いい天気だなーって思つてさ」

慌ててそう取り繕う。

里香に限つてそんな事はないとは思うけど、このめでたい日に他の女、それも諸悪の根源の事を考えてブーツとしてたなんて知れて、機嫌を損ねられたらたまらない。

そんな僕の言葉に、里香は怪訝そうな顔をして、「だから、さつきからそう言つてるじゃない。裕一、馬鹿みたい」なんて言ってきた。

普通なら怒る所なんだろうけど、今の僕にはそう言った言葉の一つ一つが嬉しくてたまらない。

つい、「そうだな。馬鹿みたいだな」何て言っつて、ついでにウハハ、なんて笑ったもんだから、終いに「気持ち悪い」などと本気で気持ち悪がられてしまった。

でも、いいさ。

それもまた、嬉しいんだから。

また、ウシシと笑う。

あ、里香が完璧に引いている。

何か、面白いな。もつと笑って、もつと気味悪がらせてやろうか。

僕がそんなろくでもない企みを胸に抱いたとき、一陣の風がサアツと坂道を上がってきた。

里香が、「キヤツ」とか言っつて髪とスカートを押さえる。

あ、惜しいな。もうちよつとで足の上の方が見えたのに。などと思っつたところで、

ボカツ

「いっつて!!」

頭を殴られた。

それも、思いつきり。

「エツチ!!見たでしよ!?!」

鞆を構えた里香が、顔を真つ赤にして眉を吊り上げている。

「い、いや待て!!見てない!!見てないぞ!!もうちよつとだったけど、見てないぞ!!」

慌てて弁解する僕の言葉に、里香の眉がますます上がる。

あ、あれ?何か変な事言っつたっけ?

「……』もうちよつとだった』つて事は、やっぱり見る気だったんだ……」

「え?あ、そ、それは……」

里香が再び鞆を振り上げる。

「う、うわ、ま、待て!!話し合おう!!オレ達は、きつと、分かり合える!!」

「うるさい!!バカ裕一!!」

くだらない事を言いながら、キャラキャラとじゃれ合う僕達。



——「馬鹿」ですね——

蓮華の言葉が頭を過ぎる。

ああ、馬鹿でいいさ。

こうやって、馬鹿みたいに笑いあって、馬鹿みたいにじやれ合って、そして馬鹿みたいに寄り添って、僕達は歩いて行くんだ。

ずっと。

ずっと。

風がまた一陣、僕達の間を通り過ぎる。

いつの間にか、季節は動いていたのだろう。

サラサラと流れるそれは、前に感じた時よりも涼やかな様な気がした。

続く



そう思い、「用は何ですか」と訊こうとした時、

「吉崎さん、ありがとう」

先に飛んできた言葉に、思わずポカンとしてしまった。って言うか、何の事か分からない。

「何がですか？」

訊くと、先輩は微笑みながら言った。

「如月さんの事」

「!!」

その名に、思わず胸が跳ねた。

「何か、ありました？」

恐る恐る、訊いてみる。

「さつきね、会った」

「!!」

もう一度、ギョツとする。

「また、ちよっかい出してきたんですか!？」

けど、そんなあたしの言葉に対して、先輩は静かに首を振る。

「ううん。廊下歩いてた時、行き逢っただけ」

「じゃあ、何か言われたとか？」

けれど、先輩はやっぱり首を振る。

「あたしの事、じっと見て。その後、ペコリってお辞儀して行っちゃった」

「……それだけ、ですか？」

「うん。それだけ」

どうやら、余計な心配だったらしい。あの“敗北”宣言を、彼女は確かに履行していたのだ。

もつとも、あれだけの想いがそう簡単に消えるとも思えない。しばらくは、悶々とした時が続くのではないだろうか。

そんな事を考えていると、また先輩が話しかけてきた。

「如月さんね、変わってたよ」

「え？」

「とても、すっきりした顔してた」

「すつきり……?」

訳が分からない。あたしが小首を傾げていると、先輩が言った。

「きつと、何かの思いが晴れたんだと思う」

「思い……?」

「そう。思い」

そして、先輩はまたあたしに微笑みかける。

「吉崎さんが、何かしてあげたんだよね」

「は?」

「あの日、一緒に帰ったんでしよう?如月さんと」

見通されていたらしい。エスパーか何かか?この女ひとは。

「何してあげたの?如月さんに」

微笑みながら訊いてくるその顔に、好事こうずの色はない。ただ何となく、訊いてみるだけなのだろう。だから、あたしもお茶を濁しておく。

「まあ、ちょっとお節介はしましたけど……」

「お節介したんだ」

「はい」

「そうなんだ」と言っつて、先輩はクスクス笑う。

あたしも、「そうです」と言っつて笑っつておいた。

「で、」

「はい?」

「何、聞いてたの?」

話が、元に戻った。

「また、ボーカロイド?」

こつちの方は、声音に思いつき好奇心が満ちている。今回の件で、結構気に入ったのかもしれない。

「はい」

答えながら、ふとあたしは手の中のウォークマンに視線を落とし  
た。

確か、今流れているこの曲は……。

ああ。そうか。

運命の導きなんて大層なものじゃないし、信じる口でもないけれど。今ここに、先輩がいる意味が分かった様な気がした。

手の中のイヤホンを、先輩に差し出す。

「聞いてください」

何か、有無を言わさぬ調子になったけど、先輩は気にしなかった。

素直にあたしの手からイヤホンを受け取る。

「何て言う曲？」

当然の問いかけ。あたしも、当然の様に答える。

『Re | b | i | r | t | h | d | a | y』です」

「どんな曲？」

「聞けば、分かります」

そして、あたしは再生ボタンを押した。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

微かな振動が、曲の始まりを教えてくれる。見てみれば、先輩は目を閉じて曲に聞き入っている。

しばし流れる、静かな時間。

やがて、ウオークマンのから伝わるリズムが静かに消える。曲が、

終わったのだ。

先輩が、イヤホンを外してあたしを見た。

「吉崎さん、これって……」

「作者は明言してませんけどね。そう言う、事です」

「そっか……」

そう言うと、先輩は愛しげにイヤホンを胸に抱く。

「“あの娘”は、この歌を歌うのかな？」

「分かりません。少なくとも、あたしは聞いてません」

「そうか……」

そう呟くと、先輩はフェンスに背もたれて、空を仰いだ。

「歌える日、来ますかね？」

あたしが問うと、先輩は大きく頷く。

「来るよ……。きつと、ううん。必ず、来る」

どこか確信を持った声で、そう言った。

「そう、ですね」

反論する理由などない。あたしも頷くと、先輩と同じ様にフェンスにもたれて、空を仰いだ。

「吉崎さん」

先輩が言う。

「もう一度、聞こう。今度は、一緒に」

そして、イヤホンの片方を差し出してきた。

思わず、「ええ？」と声が出た。

「嫌ですよ」

「どうして？」

いや、どうしても何もあるものか。一本のイヤホンを二人でなんて、恋人同士がやるものだろう。普通。って言うか、恋人がいる身なのに、そういう事は気にならないのだろうか。この女ひとは。

「そんな硬い事言わないでいいから。ほら」

結局、半ば強引に押し切られた。

渋々、イヤホンの片側を耳にはめる。

近くに寄せられる、先輩の顔。サラリとした髪が頬をくすぐって、微かに甘い香りが漂う。一瞬、ドギマギしてしまった。

それを誤魔化す様に、ウォークマンを操作する。

「それじゃ、始めますよ」

「うん」

先輩が頷くのを見計らって、再生ボタンを押す。

♪……………♪♪……………♪……………♪……………♪……………

静かに流れ始める伴奏。

ふと横をみると、先輩はもう、目を閉じて聞き入っている。

それに倣う様に、あたしも目を閉じると歌に身を委ねる。

白い世界の中で、調べは紡ぐ。

悪と呼ばれた姉弟。その最後の物語を。

歌は綴る。

罪が許される事はない。けれど、未来はあるのだと。

今のあの娘は、きつとこの歌は歌えない。

受け入れる事も出来ない。  
でも、きつといつかはたどり着ける。

今は、暗闇の中でたった一人。

でも、小瓶のメツセージは繋いでくれた筈。

一度は途切れた、想いと絆を。

それなら、彼女はきつと歩み出せる。

そして、歩み続けた先にはきつと……。

歌が終わる。

止まっていたゼンマイを巻き終える様に。

あたしは願う。

きつと、先輩も願っている。

いつの日か、あの娘がこの曲を奏でられる日がくる事を。

あの娘のゼンマイが、動き出す日を。

優しい調べの中、意識が眠りへと落ちていく。

意識を手放すその間際。

見えた気がした。

暗闇の中、白く染まる道。

その上を、固く手を繋いで歩く、二人の少女の姿が。

♪——廻り始めたぜんまいは静かに語る「罪が決して許されること  
はない」

「だけど水という言葉

悪という言葉

僕らはそれらを唄へと変えよう

赤い手錠外れ僕に語りかける「これからあなたは生まれ変わるの

よ」と

青い足枷外れ僕に話しかける「今日が君の新しい B i r t h d a

y

全てが廻りそして白く染まる

もうすぐ君に会いに行くよ——♪

終  
わ  
り